
Dies irae × I S

ドレイク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dies irae x IIS

【NZード】

NZ6569NZ

【作者名】

ドレイク

【あらすじ】

この話は、IS世界のキャラをDies iraeのキャラ風に人格改变したお話です。一夏が司狼っぽくなり、笄が蓮っぽい人格となつて色々と騒動を引き起こします。

第一話

私が剣術に没頭するのは、ひとえに連綿と受け継がれてきた技術を受け継ぐことに至福を感じていてるからだ。満ち足りていくといつてもいい。

勿論、初めは気乗りしなかった。私は何氣ない日常こそが好きだつた。その気持ちを言葉にできない子供のころから、ずっと。だからこそ、そんな日常とは対極の方に位置する武道なんて、関わるだけでも嫌だと思っていた。

幼馴染の腐れ縁に言わせれば、私の思想はキチガイ以外の何物でもないらしい。故あって家族と離れ離れになってあいつの家に住むようになつてからは、よくそのことで口論になつたものだ。

曰く、人生は未知の刺激というスパイスがあつてこそ、そんな腑抜けた人生なんぞ死人のそれと全く変わらない。それに。

「お前は変わらない日常を愛しているんじゃねえ、変わらないままの刹那く輝きこそを愛してるんだよ」

などと言われたこともあつた。中々どうして、人の事を見ている奴だと思います。その言葉はするりと私の中に入つて、違和感なくぴつたりと奥底に嵌まつた感じがした。

「お前はありふれた日常の中にも輝きを感じて。だからこそその輝きがいつまでも続いて欲しいと思つていいだけで、変化そのものを嫌つてはいるわけじゃないだろ?」

思えば、私は子供のころから美術品を鑑賞することが好きだった。

実家が神社を営んでいたりする関係上、寺社仏閣の貴重物を見る機会も多くて、そういうときはいつだって時間を忘れて見入っていた物だ。

成程、確かにそう言った物は、いつまでも色褪せぬ刹那く輝き>だろう。当時の人々が、狂おしいまでに情熱をこめて作り上げるからこそ輝きを放ち、そう言った物は後世でも評価され続ける。

そんな自分の気持ちに気付けば、剣術の修練というのも、なかなかどうして悪くはなかった。先人達が己の命をかけて築き、連綿と続く命で以つて残し続けた刹那、思えば、そのなんと輝いていることか。

その一端に触れるというのは、体力の続く限りいつまでも没頭し続けていたいと思うほどだつた。

こうして、周囲からは剣術馬鹿と称される私が出来上がつたのだった。開けても暮れても剣の事ばかり考えて、洒落た服で己が身を着飾るよりも、古流剣術の術理を収めるほうに注力する。そんな時代に逆行したかのような武骨者の自分が、まあ当の私自身が悪くないと思っているから良しとしておこう。

「…………それにしても一夏、お前はとことん厄介事が好きだな」「いい男には厄介事が付き物なんだよ」

そして私をそんな人物に変えた腐れ縁はといふと、私と同じ教室で減らず口を叩いている。

言つておくがここは明文化されていない物の女子高みたいな場所で、男であるこいつがいられる場所ではない。

織斑一夏。染め上げた金髪に捲り上げた学生服の袖からは刺青が覗く、見紛うことなきチンピラだ。

そんな奴がここ、IIS学園に何故いるかと聞かれれば答えは一つ。

「イツがISを動かしてしまったからだ。

何でも高校受験の会場にあつたISを面白全部で触つてみたら動かせてしまった、といつゝとらしこ。

「第一お前、女尊男卑にどっぷり染まつた奴を嫌つていただろうが」「ん？ ああまあ……それ差つぴいても面白そじやねえか」「それでお前にとつてしてみれば地獄の様なここに来た、と？」「そうそう、元から選択肢なんてない様なもんだろ？ 要は気持ちの持ちよつと。自發的にここに来たつてことなら精神衛生の面でもプラスだろ」「

相も変わらずプラス思考だなコイツは。身に降り注ぐ厄介事全てを未知の刺激としてとらえて、面白事に変えている。

正直言つて、コイツの事は馬鹿としか思えない。出会つた時から一貫してぶれないその性根は、ここまできたらいつそ見事と言えるのだろうな。

私には決して真似出来ない、そして真似したくない姿勢だと思つ。騒動に塗れた日常なんて御免こひむる。

「 ちょっと、よろしくかしら？」

ああ、早くも厄介事の足音がすぐ後ろまで来ているようだ。全く、私を巻き込んでくれるなよこの馬鹿。

「聞いておりますの？」

「あれ、オレっ！」

「明らかにお前に視線を向けているだろ？が、よかつたな、早速役得じやないか」

「うええ、これが？」

「見た目は綺麗じやないか」

「ばっかお前、よつぢりみぢりの」の状況、気にするべきは中身だ
「ううが」

「…」

「いや見た目からして高飛車、そんな女、ちよつと引くわ」

心底嫌そうな表情を見せる一夏。まあ確かに、声をかけてきたこの女性は見た目からしてきらびやかな雰囲気を纏っている、いわゆるお嬢様という奴だろう。

「え……聞こて「ああ、私もちょっと近づきたくないタイプだな」
ますのつ……！」

いや、聞いてない」

「不本意だがこの馬鹿と同じく」

聞いてますわよ、そんな反応返せるくらいには耳に入っている
でしょ？！？

「アーニー、お前が何をやるか分かってない？」

「何でお前はいつも嘘をつなんだ

「だつてオレはこの学園で唯一の男子生徒だぞ？」
「オレが最上位にきまつてるだろ！」
希少性でいえば

一馬鹿で最上位の間違いだろうが

「お嬢ちつぱりしたも」

どうやら話しかけてきた人物は一夏のノリについてこられなかつたらしい。絶叫を迸らせて肩で息をしている、御愁傷様だといっておく。

私が彼女の立場なら絶対近づきもしないだろう、實に度胸がある。

「一夏、そろそろひやんと聞いてやれ」

「そうですね、世界唯一のHSを動かせる男がどんな人物か見定めて差し上げようかと思いましたが、まさかこんなちやらんぽらんな男だったとは」

「んなもん頼んでねえよ、小さな親切大きなお世話って知ってるか？」

「んなつ！？」

せっかく会話になつたとこのに、早速一夏の言葉で顔色を失う少女。まあでも、最初から話を聞いていたところで結果は変わらんよつた気がするがな。

「まあそつ言つてやるな、上から目線でも一応は善意だからな」「それでもどつせこの後には、「無様なあなたに、この私が教授して差し上げますわ」とかいうんだぜきっと」

「ああ、それはすぐ想像できるな」

「だろ？」

「くつ……所詮は男といつことですかつ」

そう言い残し、彼女は踵を返した。恐らくは、一夏の想像が図星だったのだろう。ああまで言い当てられては、引き下がるしかなかつたらしく。

「やつぱりお前、厄介事に縁があるな」

「楽しそうでいいじゃねえか」

「私は全然楽しくないな。場所は特異でも、平凡な学生生活を送りたかつたよ」

私の苦言にも、一夏は悪童そのものの笑みを返すだけ。そんな表

情を見ていれば自然と溜息が流れてしまった。

流れ出た溜息は、すぐに教室内の喧騒に溶けて消えた。周囲からは突き刺さる視線が私にも感じ取れるぐらいに一夏に注がれている。普通の年頃の女性ならば、こんな環境下で出会う唯一の男性に興味を持つのだろうが、そうして現れたのがこんないかにもなチンピラでは、興味よりも怯えが先立つのか、こうして遠巻きに見ているだけ。

それをこの馬鹿はわかっているのに、一切省みようとは思つてない。どうせ、女尊男卑などと謳つているくせに外見一つでビビつて奴なんぞ、こちらから願い下げとか思つていいんだろう。

それならいつも、「男のくせに生意氣だ」とけんかを吹つかけてくる奴の方が面白いし、相手をするだけの価値がある。そんな戯言を心底思えるような奴だ。（さつきの少女はまあ、からかい甲斐がありそうだったから、ああいう結果になってしまったが）

「さて、クラス代表を決めようと思つ」

教壇の上で教師としてみれば若輩ながらも、威厳に満ちた美声が響く。あの馬鹿とは似ても似つかないが、彼女の名前は織斑千冬と言つて一夏の姉だ。

性格は一言でいえば謹厳実直。少なくとも公の場所でふざけた言動をすれば、即座に鉄拳制裁が飛んでくる。そんなのが唯一の肉親であるにもかかわらず、あれだけふざけた言動を一貫して続けられる一夏の馬鹿さ加減には、ほとほと頭が下がる。

そしてその馬鹿さ加減を、一夏はまたもや発揮してくれた。このIS学園において公式行事というのはエサによる試合がメインだ。クラス代表というのはその名の通り、クラスの威信を背負う物だ。

自薦・他薦は問わない。という千冬さんの声を受けて、真っ先に上がったのは一夏の名前だった。怯えはしてもそれはそれ、やはりクラスどころか学園唯一の男子生徒を、表に引っ張り出さないという発想は無いのだろう。怯えた声で一夏を推挙するクラスメイトが何人かいた。

「 納得いきませんわっ！！」

響いた怒声は、先程一夏に声をかけた彼女の物だった。縦ロールで綺麗に整えられた金髪を振り乱し、その白磁の様な顔を赤く染めて、彼女は一夏をクラス代表にする愚を語り始める。

「クラスの威信を背負う代表を、このような軽薄な人物に任命するわけにはまいりません。おまけに、ただI-Sを動かすことができるという素人にそのような大役が務まるとは思えません！！」

全く持つて、実に真つ当な言い分だった。これっぽっちも反論できる材料が無い。

「I-Jのセシリ亞・オルコットのよう、実力ある者がなるべきですわ」

胸を張つてそう言った彼女、セシリ亞に対し一夏の反応は。

「ああ、セシリ亞って名前だったのか、アンタ」

そう言えばあの時、セシリ亞は名前すら言わせてもらえなかつた

な。というか、私も今ようやくセシリアの名前を知った。

「い……言つに事欠いて、今更私の名前を知ったのですかつ、あなたはつ……」

「いや、お前自己紹介もしないまま帰つただろ」

「け……」

「け？」

「決闘ですわつ！！」

「もうお前にとやかく言つのは疲れた。勝手にしてろ」

この全自动トラブル製造機め。何で入学初日から決闘騒ぎが起きたんだ。コイツは何かトラブルを誘引する未知の物質をまき散らしているんじゃないだろうか。

「おう、勝手に楽ししませてもらひや」

激怒したセシリア嬢が発端となつて、“クラス代表決定とは何の関係もない”決闘が一週間後に取り決められた。クラスメイトはこの決闘の勝者がクラス代表になると思っていたみたいだが、千冬さんがこの馬鹿に権力と名分を持たせては何をするかわからないと、この決闘の勝者に関わらずセシリア・オルコットがクラス代表になることは決定済みだ。

普通ならばこんな経緯で決闘騒ぎが起こるなんてありえない。聞くことによるとセシリア・オルコットはイギリス代表候補生で、まさに専用機持ち。

対して一夏の馬鹿は今までISの操縦経験がない素人で、専用機の方も本当なら支給される筈だったが、『何か成果を上げたわけで

もないのに、どこかの誰かから施し受けろってか？ はつ、冗談きついぜ」と、日本政府の担当者の前で啖呵を切り、そこから喧々諤々の議論の末に何も手を加えていない量産機を支給するということになつてゐる。ガンとして意見を曲げない一夏と、防犯上の理由から是が非でもIJSを所持してほしい日本政府との、それが妥協点だつた。

とりあえず一夏の機体は、明日にでも納入されるらしい。射撃の方を得手としている一夏に合わせて、中距離射撃戦に比重を置いた仏・デュノア社製第一世代型量産機「ラファール・リヴァイブ」をわざわざ日本の倉持技研がライセンス料を支払つて持つてきたという。

「しかしお前、勝ち目はあるのか？ 端から負ける覚悟で戦いに臨むほど、お前は殊勝じやないだろ？」

私の問いかに、一夏は変わらず悪童の笑みを浮かべてのたまつた。

「まあ……なんとかするさ」

小賢じにコイツの事だ、本当に何とかするだろ？ 倦怠感にも似た呆れがそつ身を弄る。一うなればこいつを叩きのめして憂きを晴らしてやると意気込んで、持つていた木刀に力を込めた。

一夏は非合法の手段で入手した黒光りするオートマチック サイレンサー付きのデザートイーグルを構える。中学のころから入り浸つていた不良グループなどとの繋がりは未だ残つてゐるようだ。私との勝負には拳銃を持ち出してきては、子供のころはエアガンに始まり、今やデザートイーグルですらなんなく片手打ちできるほどに拳銃を扱いなれてゐる。

しかし、そうしたところでよくもIJS学園にまでそんな物を持ちこめるものだと感心する。しかもそんな物を、人気のない校舎裏と

はいえよくも平然と取り出すとは、恐らくは「」も監視されている筈だが。

「おーおー、ほさつとしてんなよ

素人目にもわかる出鱈目な曲撃ち。乾いた音と共に飛来したプラスチック弾、ノーリアクションで放たれたそれを、しかしその攻撃を予測していた私の木刀が弾き飛ばす。

私とコイツの勝負に、開始の合図など在るわけがない。不意打ちを食らったほうが間抜けということだ。

迫る試合に向けて、実戦の勘を研ぎ澄ませたいと一夏は放課後に申し出た。とはいへこんな勝負など常日頃からやっているので、今更な申し出ではあった。

私が剣術の修練にのめり込むようになつてから、「一夏は事ある」とに勝負を吹つかけてきた。曰く、「お前に先を行かれるなんて我慢ならない」と。

そうして日を追つになると、「年を重ねる」と繰り返された勝負はエスカレートし続け、今の様な本気の喧嘩染みたものになつてしまつた。

竹刀ではなく、硬い木刀を遠慮なく振るい。プラスチック弾頭とはいえ、実銃をむやみやたらにぶつ放す。傍から見れば殺し合いにしか見えない、そんな異常な光景。

私の斬撃が、アイツの銃撃が、互いの皮膚に切り傷を作り、勝負の果てに武器をとり落とせば、そこから先はただの取つ組み合い。磨いた腕も、重ねた経験、そんな一切を無視しての格闘戦。至る所に走る鈍痛が熱を持つて私の脳髄を茹で上げる。

「コイツにだけは負けたくない。そんな餓鬼の意地としか言えない熱気に浮かれる頭で、いつも私は思うのだ。

よくもこんな異常を、私の日常へ輝きへしてくれたな

そんな物騒な日常に寮の門限ぎりぎりまで没頭し、何故が同室になってしまったいた寮の自室にて、競い合ひよにへたり込む。

「あ～くや、また引き分けか」

「いい加減に負ける、一夏」

「馬鹿言え、負けるのは筈の方だ！」

精も根も尽き果てて、そのまま眠つてしまいそうになる欲求に抗いながら、それでもやるべき事があった。

「なあ一夏、お前をぶちのめして日頃のうつぶんを晴らすのは、私だけの特権だ」

「ああオレも、お前に負けるのは嫌だが、他の誰かに負けるのはもつと嫌だね」

それだけ確認できれば十分だった。一夏は反骨心の塊みたいな奴だから、ならばきっと、奇手奇策小細工何でも使って、必ずどうにかするだろう。

一週間というのは、本当に短い時間だ。あつという間に勝負当田となつて、私はアリーナの管制室で千冬さんと一緒に一夏とセシリア・オルコットの試合を観戦しようとしていた。そのほかにも、クラスの副担任である山田先生も詰めかけている。

「どう見ます？ 織斑先生」

やはり教師といえども、世界唯一の男性操縦者がどのような戦い方をするのか気になる様で、メガネの奥に好奇心を湛えながら問いかける。

「まあ、普通ならばオルコットの勝ちと見るがな……あの愚弟の事だ。どうせ何がしかの小細工をするに決まっている」

その言葉に、私も内心同意する。アイツくラファール・リヴァイブ®が届いた後の実機訓練で、何か閃いたのかものすごく嫌な笑顔を浮かべていた。

あれはきっと、また何か下らない小細工を考えついたに違いない。そんな奴がただ一方的に負けるということなど、私も千冬さんも想像すらしていない。

その時、試合開始の合図がアリーナ内に鳴り響き、ディスプレイの中に映っていた二機のI-Sも同時に動き出した。

反発する磁石のように、瞬時に距離をとるくラファール・リヴァイブ®とくブルー・ティアーズ®。

初手は同時、I-S用の中でも最大の口径を誇る大型ハンドガンを両手にそれぞれ持つた一夏と、専用の大型レーザーライフルくスター・ライトMK?が同時に火を噴く。

交差する鉛玉と閃光は、しかし互いに空を切つた。一夏の顔にはいつもと変わらない人を食つたような笑みが、オルコットの顔には一夏の予想外の攻撃に一瞬だけ強張った表情が張り付いていた。

「成程、ただの的ではないようですね」
「はつ、ほぞいてろ」

そのまま空中で三次元機動をこなしつつ、的確な狙撃を行うオルコット。精妙で優雅な機動を行い一つの狙撃は、オルコットの自負に見合つた精度で行われている。

幾度もの閃光が一夏へと降り注ぎ追い立てていく。そんな物を喰らっている一夏の方はといふと、それでも笑みを絶やすず……いや、あれはより面白がっているな。ともかく、表情だけには苦痛を見せず必死に逃げ回る。

それでも逃げ回ることができてゐるあたり、素人とは思えない操縦だった。しかし、素人とは思えないだけで、間近の比較対象であるオルコットの機動と見比べれば、その差は歴然だ。

「オルコットさんもすごいですけど、織斑君もすごいですね」

確かに、完全にずぶの素人である一夏がここまで持つてゐるのは、普通ならば驚愕以外の何者でもないのだ。

「一夏ちで身体状況を見る限りでは、理想的な興奮状態を維持しているみたいですし、初の実戦だつて言つのに緊張とか無いんですねか」

その山田先生の言葉に、知らず私と千冬さんの嘲笑が重なつた。

「「くくっ、あいつが緊張？」」「
「そんなに笑いを堪えることでしたか！？」
「当たり前だろ、あの愚弟が緊張？ あると思うが筈」
「あり得ません、あいつにそんな可愛げがある筈が無い」

私たちの反応に、山田先生はどう返していいのかわからぬようだ。私としては一緒に笑つてやればいいと思うがな。

そんな会話が流れるときにも、一夏は曲芸の様に出鱈目な、それ

でいて的確な狙いの射撃を連発し、オルコットを牽制している。酷い時となると、視線なセシリアをとらえていないのに、それでも銃弾は「ブルー・ティアーズ」の至近を通過したぐらいだ。

いくらEVAが操縦者に全方位の視界を与えるとはい、その適応能力の高さに舌を巻く。

「それにしても織斑君射撃が上手ですね」

まさか常日頃から実銃ぶつ放しまくっているとは、口が裂けても言えなかつた。

「ああ、あの愚弟は“なぜか”射撃が上手くてな」

全てを知つてゐる筈の千冬さんが、意味ありげな視線をこちらに向けつつそうこぼした。というか千冬さんは全て知つてゐる。何せ一夏が発端となつた騒動に私ともう一人の幼馴染が一緒になつて巻き込まれ、最後は千冬さんの強力な拳骨を喰らうのが、少し前までの日常だつた。

そのせいでも千冬さんは、一夏の悪事など事細かに知つてゐるし、そのたびに虐待一步手前の制裁を喰らわせているが、それでの馬鹿が更生するなんて言うことは一切なかつた。

……本当に反骨心の塊みたいな奴だな、ひねくれ過ぎだろう。

「本当に粘りますわねっ！！」

苛立ち交じりの声と共に、「ブルー・ティアーズ」から四つの飛^ビット翔体が分離する。自律行動するそれは、まるで主の命を受け獲物を狙う獵犬の様に一夏を追いたてる。喰らい付くのは牙ではなくビーム砲だ。

「おいおい、そんなのありかよ」

空になつた弾倉をグリップから排出し、新たな弾倉をグリップ内部に量子展開しながら、襲いかかる四つの獵犬に対し愚痴を漏らす。

「あら？ ここにきて怖氣付かれたのかしら、それとも降参したくなりましたの？」

「バ～カ、こいつこいつで勝つてこそ、株が上がるつてもんだろ？」

追い立て続けられながらも、その眼に宿る闘志には微塵の揺らぎもない。いやむしろ、今こそが勝負どころだと思ったのか、一夏は追いすがる四つのビットを無視して、ハンドガンを格納し、両手に手持ち式のシールドを開発する。

「大言壯語した割に、行つことが特攻とは浅はかですわねつ！…」

真正面からくるのならば、ビットを使わずとも、スターライトMK？による射撃で十分と判断したのか、強力無比な閃光が一夏の手に持つシールドに赤く溶けた弾痕を刻む。

現用火器に対しても圧倒的な防御力を誇る筈のシールドは、たつた数発のレーザー照射で爆碎されて用を成さなくなる。

「いいや、ここまで近づければ十分だ」

だが、ある程度は距離を詰めることには成功している。

そう投擲物が当たるぐらには、一夏とセシリヤの距離は縮まつていた。

それはぱつと見る限りでは、何がしかの爆発物なのかと思わせた。ハンドグレネードか、あるいは音響閃光弾か、それで隙を作ろうと、いつ心算だらうか。

「そんな物が奥の手？ 無意味ですわ！」

身を翻し直撃コースから外れ、例え爆発やら閃光やらが飛び出したところで、E.Sのシールドはそれらを完璧に防ぐだらう。

セシリアの言つ通り、一夏の奇策は不発に終わるのだらうか。そんな表情が観客の生徒や山田先生の顔に張り付く中、私と千冬さんは全く別の事を考えていた。

（（…………あの缶詰、あの馬鹿まだ持つっていたのかつ！？））

そもそもあれは武器でも何でもない缶詰じやないか。去年あの馬鹿が話の種としていくつか買って惨劇を引き起こした、ある意味劇物の缶詰。最早食用としても期限切れとなつて、完全に生ごみと化した缶詰を、一夏はセシリアの間近で撃ちぬいた。

そう、世界一臭い食べ物として有名な、シユールストレミングの缶詰を、だ。

飛散する内容物、完全に発酵しきつてドロドロの液体と化したそれが、弾丸によって空中にぶちまけられて、最早匂いの毒と称せる様な臭気をばらまいた。

臭気という極小の微粒子に、E.Sのシールドが自動で反応する筈もなく、オルコットの整つた鼻筋に開いた鼻腔が蹂躪される。

オルコットの顔が、予期せぬ刺激に歪み苦悶の表情を浮かべる。

「ぐつ！？ 何なんですかこれはつ……」

流石のHSでも、極悪な腐臭からは操縦者を守らなかつたらしい。設定すれば防げるだろうが、何処の世界にHSへそんな設定をする馬鹿がいるのか、あんな臭いを間近に食らつてオルコットの動きが止まる。

「オレの秘策。といふことで俺の勝ちだな」

そして、あらかじめそういう設定をしていた馬鹿は、何の影響も受けずにオルコットとの距離を詰め、零距離からのハンドガン全弾発射で「ブルー・ティアーズ」のエネルギーを零にした。

一応は一夏の勝利といふことで幕を閉じた決闘の後、オルコットは一夏に鬼の形相で詰め寄つた。

「あなたつ、あんな手段で勝つなどと恥は無いのですかっ！…」
「はあ！？ お前本気で言つてんの？ 俺が素人だつてわかつていいだろ」

「それとこれとは話が別です！… 私が言いたいのは、素人ならば素人なりに真面目におやりなさいということですっ！…」

千冬さんや私がいる前で、オルコットは至極真っ当な反論をした。したつもりだつたのだろう。少なくとも彼女にとつてしてみればそれはその通りだつたが……。

「お前馬鹿かよ」

「なつー!?

一夏の反論に、言葉を失つた。齟齬が無い理論展開を前にしてすら、未だ私を侮辱するのか、とその表情だけでも明確に読み取れた。

「ああ確かに、オレは素人で、E-Sの試合って言つてはありゆる面でお前に負けるよ。けどな、だからこそ、オレはお前に勝つために持てる物全て使つた。少なくとも、オレは使える手段全部使つて戦いに臨んだ。オレはオレのできる限り手を抜くことなく“真面目”に戦つた。そこに誓つて嘘はねえよ」

そんな一夏の“らしい”言い分に、つい顔がほころんでしまいそうになる。それは私だけでなく、千冬さんも同様だったみたいで、その顔に苦笑を湛えながら二人の間に割つて入つた。

「そこまでにしておけオルコット、確かにこの馬鹿の手段は手放しで褒められるものではないが、それでもお前が最初から全力で臨めば、こんな結果にはならなかつただろつ」

「…………それ、は」

「悔しいと思うのならば、それを糧にして増長することの愚かさを学べ。そして今度この馬鹿と一戦交えるときは完膚なきまでに叩きのめしてやるといい」

「ええそうですね、私がこの程度だと、こんな下劣な男に思われたままでは私のプライドに関わりますーー」

「その意氣だ、オルコット」

氣炎を燃やすオルコットを見て、千冬さんは満足げな笑みを見せ、一夏もまた面白そうだと笑顔を見せた。

「やつぱつ！」は画面をひだるなあ、 篠

「ふん、 こいでもまたお前の騒動に巻き込まれるかと細つと、 頭が痛くてかなわない

それでもなお、 皆上ひられて笑ってしまつのが、 無性に腹
が立つて仕方がなかった。

第一話（後書き）

＜あとがき＞

ルートとしては先輩ルート後、一夏は司狼の転生体で篠は蓮の転生体です。篠の方は蓮の成分が薄まっていますが、一夏の方はがつつい色濃く残っているという感じで、そして鈴はバカスミポジション。そして一夏のISが単一能力を発動した場合、間違いなくIS版のマリグナントチューマー・アポトーシスになるでしょう。

第一話

「織斑、一夏」

身に染みついた悪臭を更衣室のシャワーで洗い流しながら、私に屈辱を与えた人物の名を呟いた。その呟きはすぐに水の流れる音に搔き消されたが、それでも、その名は胸の奥に宿り続けている。

あの男は最初から気に喰わなかつた。髪を染め上げ、タトゥーを入れて、その見た目からして下劣な雰囲気を漂わせていた。

そんな状況だから、他のクラスメイトは彼を怖がつて遠巻きに見つめるだけ。唯一の例外と言えば、確か篠ノ之箒という名前のクラスメイトだけ。ならばそう、この私が状況を変えるきっかけになろうと意を決し話しかけてみれば、端から私の話を聞こうともしなかつた。

嘲笑うような口調でこちらを煙に巻くだけ、正直言つて何故篠ノ之さんはこんな男と親しげにしているのか、まったくもつてわからなかつた。何一つとして美点が無い男。ただE.Sを動かせたというだけで、名譽あるE.S学園の門をくぐつた不届き者。完全に素人だというのならそれ相応の立ち居振る舞いがあるはず。素人だという状況に胡坐をかいてはいけないはずだつた。

「でも……あの言葉は」

そんな人物をクラスの代表にさせまいと義務感に駆られ、決闘を挑んだ。そのこと自体に否は無い。

一時の腑抜けた気分での男を代表に選び、そうしてクラスメイト全員に屈辱が降りかかるなど、決して受け入れることができなかつた。

だからもう、自分がどれほどの事を分不相応にも行おうとしてい

るのか教育してやるうと思に立ち、あの決闘に臨んだ。

そう、元から試合をしようと思つてすらいなかつた。

『少なくとも、オレは使える手段全部使つて戦いに臨んだ。オレはオレのできる限り手を抜くことなく“真面目”に戦つた。そこに誓つて嘘はねえよ』

不意打ちをされて、腐つた生ごみと化した缶詰を投げつけられて、耐えがたい腐臭を擦り付けられて、でもそれら全ては、私を強敵と認め、自身より格上と認め、それでもなお勝ちをもぎ取らうと足搔いた結果ではなかつたのか。

引き換え、私はどうだつたか。驕り高ぶり、あの男を世の中に溢れかえる牙無き腑抜けた雄と同一視し、教育してやると手心を加えた。ビットを使つまでもないと、戦力の温存などといつ手抜きを行つた。

「負けて 当然ですね」

そう、当然だつた。負けて当然だつた。私の半分の力を、あの男の全力が打ち破つた。私こそが、あの決闘において不面目に過ぎたのだ。

降り注ぐシャワーの冷たさが頭の芯を冷やし、私の脳髄に宿つていた驕慢という余分な熱を洗い流していく。代わりに浮きあがつくるのは、なぜこんな自明の理に思い至らなかつたのかという悔恨。

悔しかつた。

悔しい、悔しいに決まつてゐる。元から私の掌の中になつた勝利は、

私自身が取りこぼしてしまった。後悔は、後の祭りだからこそその後悔なのだと、理屈ではなく実感で思い知つた。

もしも もしもの話だ。あの決闘において驕ることなく、初手から全力での男を叩き伏せていれば、今なお心中に渦巻く悔恨など抱えることなく、クラスの威信を背負つていけた筈だつた。

そんな未来はもう無いのだ。これからはずつとこの悔恨を抱えて、クラス代表などという物をやり続けなければならない。

「くつ……くつ……ああ……」

嗚咽が堪え切れずに溢れ出る。伝う涙が、どうしようもなく熱かつた。何がイギリス代表候補生だ。何がクラス代表に相応しい人物だ。私は、そんな肩書に全く相応しくなかつた。

試合直後はまだあの男に対する怒りがあつた。けれど熱は、時間の経過と共に冷めゆくのだ。最早この悔しさの矛先として至当なのは、自分自身だけだつた。

悔しい。後悔。悔恨。そんな感情が渦巻いて、降り注ぐ水の様に、自分自身も墮ちていく錯覚を味わう。思考も視点も定まらない。底無しの沼にどつぶりと沈んでいくようだつた。

「あ～、邪魔したか？」

そんな状況では、学園の生徒ならばだれでも使えるこのシャワー室に、誰かが入つてくることなど思い至りもしなかつた。

「……あの馬鹿はああいつ奴だから、仕返しするなら全力でやつてくれ」「え……えつと、その」

「いいよ、別に言葉にしなくとも。公衆の面前でみんな真似やられたんだから」

声をかけてきたのは、つい今しがたまで私の心中を埋め尽くしていたあの男 織斑一夏 と唯一親しげにしていたクラスメイト。

「篠ノ之 篠さんでよろしかったかしり」

「そう、あの馬鹿とは腐れ縁の篠ノ之篠だよ」

溜息をつき、自身で発した言葉が真実であるのが心底嫌そうに感じている様な表情で、篠ノ之さんはシャワーの個室を仕切るドアの前に立っている。私はシャワーを止めて、冷え切った体に纏わり付く水滴をバスタオルで拭き取りながら、個室を出て篠ノ之さんと改めて向き合った。

「とつあえずほれ、購買で消臭スプレーをありつたけ買つてきたか」

突き出された右手に握られていたビニール袋の中には、確かに消臭スプレーの缶がぎっしり入っていた。もしかしなくともこれは私の為に買いそろえられたものだろう。

「あ、ありがとう」

とりあえずの礼を述べて、篠ノ之さんの手からビニール袋を受取る。それは、私の為に買つてくれた物。“負けた私の為に”買つてくれた物だ。

きつと篠ノ之さんは、私の事を慮つて買つてくれたのだろう。あの悪臭はきついからなかなか取れないだろうと、些細な気遣いのもとに行つた行為。

「……………」

それが、尚更私の心を抉った。突き刺すよつた敵意なら、憤怒と敵愾心で対抗できる。けれど、優しく溶け込む心がくじにどう抗えというのだ。自分自身が直視に耐えないほどに、とつもなく惨めだった。

「それじゃ、私は帰るよ」

膝をつき泣き崩れる私に対し、篠ノ之をんは何も言わず踵を返し、何事もなかつたかのように立ち去つた。

今のは惨めな私に対し、同情も憐れみも何もかけることなく、立ち去つてくれた。グチャグチャに渦巻く感情が心中を満たす中でも、その気遣いだけはありがたいと感じることができた。

シャワー室を出た後に私を出迎えたのは、更衣室のベンチで葉巻を吹かしていた織斑先生だった。小さな灯がともる葉巻の先から立ち上る煙が私の鼻腔をくすぐる。生憎と、葉巻の煙自体は嗅ぎ慣れない物だったので、決していい香りだったとは思えなかつたが、それでもあの時の悪臭に比べればいい香りと断言できた。

「大丈夫か？」

「それなりには、頭は冷えています」

正直にいえば、織斑先生がこんなことを言つとは思わず、応えを返す時もそんな心境が表に出でていなかつた。

「さうか、似合わんか。私が生徒を気遣うのが

訂正。しっかりと私の心境は悟られていたようだ。

「まあ、長いこと洗いつぱなしだつたのは、それなりに効果が出たようでなによりだ」

「ええ、いろいろ流せました」

「なら、一つだけ聞こう。

クラス代表、やれるか？」

織斑先生は、葉巻を携帯灰皿の奥底にねじ込んで火を消し、真正面から私の瞳を見据え短く問うた。

「勿論

逡巡はある。躊躇もある。あんな無様を晒してもなお、それでもクラス代表などと虚勢を張るのか、といつ血虚の気持ちもある。

「やる限つは、眞面目にやられさせていただきます」

それでも、これは自分に課せられた役目なのだ。それをたつた一度の失敗で、もう恥の上塗りをしたくないからやりたくなりませんなど、不真面目の極みだろう。

ならばここで逃げることこそが恥だ。そんなことをあの男に知れようものなら、死んだ方がましだ。

故にこみあげてくる諸々一切を飲み込んで、私は精一杯の虚勢を張つた。私は出来る限りの最善を尽くすと、眼前の女傑に対して声高々に言い切つた。

「そりゃ、なら頑張れよ

織斑先生はただ、何處となく満足そうな微かな笑みを浮かべて、そう言った。

その日の夜遅く、私は寮の屋上で一人たたずんでいた。流れる夜風が私の頬を優しく撫でていき、あまりにも激動の一日であった今日の疲労を溶かしていく。

「何だ、お前もここにいたのか

「奇遇だな、オルコット

ほとほと、今日という日はこの一人に縁があるらしい。私の頬を撫でた夜風が、染め上げた金髪と、リボンで纏められた黒髪を撫でていった。

二人の手にはジュースやらスナック菓子が少々多めに入ったビニール袋がある。それを持ってここに来たということは、恐らくそういうことなのだろう。今日は夜風が心地いい上に、雲ひとつない夜空には星の瞬きが映し出されている。シチュエーションとしては最適だろう。

「……私はここで失礼しますわ

そんな場所に、私が居ていい筈がない。この場所でこれから行われるのは勝者の宴。断じて敗者の居場所ではない。

「おいおい、付き合い悪すぎるだろ

二人の横を抜け、屋上から降りようとした私の腕を、織斑一夏が掴んで引き留めた。そのまま私を無理矢理座らせ、一人も同じく腰を下ろした。

「」のまま私を鬻りものにしようといつ魂胆ですか？」

「え、そういうプレイが好きなお前？　俺はただ単に一緒に騒ごうと思つただけだよ」

険のある言葉を吐き出す私に對して、織斑一夏は悪戯つ子の様な笑みを浮かべてジュースの缶を差し出した。正直にいえばすぐ自分の部屋へ帰りたいが、差し出された物を無碍に扱うことも少しばかり罪悪感があつた。

だから、私は缶を受け取り、プルタブを上げて飲み口を開けてジュースに口を付けた。大量生産品の安っぽい味が、私の喉を滑り落ちていく。普通のジュースにしては、ちょっとだけ味に違和感があつたが、それでも半ば自棄になつてゐる私にとっては一息に飲み干せる程度でしかなかつた。

「いい飲みつぱりだぜ、セシリ亞」

「生憎と、あなたに呼び捨てられるほど私の名前は安くあつませんが」

「じゃあお前も俺を好きなように呼べよ」

「では、馬鹿で、ああ、この響きはあなたに實によく似合つておりますわ」

「おじおい、そりやあねえだろ」

「何言つてる、お前を馬鹿以外の何と呼べばいいんだ？」

「うわひつでえ、こいつら人でなしだわ。せつかく俺様が和やかな雰囲気を演出してやろうと思つてゐるのこ、こいつらそれを無視してくれやがりましたよ」

「やうか？ お前を馬鹿と呼ぶのは私たちの精神にこの上ない安堵を『与えてくれるぞ』

「どうか、あなたを馬鹿以外と呼ぶとその違和感が私たちの精神にこの上ない負担を『与えますので』」

普通ならば喧嘩を売つてはいるとしか思えない様な私の発言にも、織斑一夏は堪えた様子などまるでなく、それどころかこちらに合わせるかのようにさらにおどけた言葉を返してくれた。篠ノえさんもその流れに乗つてきて、更にふざけた会話の応酬を続けていく。

「チツ、くじんで落ち込んでるセシリアを酒の肴にしようと思つてたのによ」

「当てが外れた様で申し訳ござりませんわ。まあ所詮、あなたなどその程度ということでしょう」

「所詮は馬鹿だからな、馬鹿しかやらん」

「何言つてやがる。決闘であんなにも華麗な頭脳プレイを見せてやつただろうが」

「すまんな、オルコット。見ての通りこいつは救いようが無くてな」

「ええ、そんな物初めてわかり切つてます」

下らない、言葉の応酬。けど、勝者の場所とか敗者の惨めさとか、そんな無為な思考はすっかり抜け落ちていた。

代わりに浮かび上がつてくるのは、こんな下らない事を笑いあえることへの喜び。そう、今私は笑っていた。
意識せずに、自然と、心の底から笑えていた。

「ふふつ、あはははは」

思わず漏れ出た大笑に、一人も笑顔で返してくれた。思えばこんな

なに心の底から笑つたのは初めてかもしれない。

「そうそう、酒の席なんだから笑つてりやあいいんだよ」

「確かに、仏頂面で酒を飲まれるのは勘弁願いたい」

しかし、何故だらう、何かものすゞく違和感があるような。この一人と楽しく会話して、おいしいジュースと安っぽいスナック菓子をつまんでいる。学生同士の下らない小ぢんまりとした騒ぎの筈だ。別になにもおかしいところは無い筈。

「……………って酒とさぞどうこうことですかつー!？」

叫ぶと同時に、飲み干した空の缶に記載されている製品情報を読んでいく。間違いであつてくれとの願いもむなしく、そこにははつきりと酒とこう一文字と、アルコール度数の表記が印刷されていた。

「どうつて? ジュースなんぞで騒げるはずねえだろ」

「それに缶チューハイなんてジュースと変わらん。そつて氣にするな」

「そういう問題ですかつー!」

学校で飲酒を勧めるとは、道理でジュースの味に違和感を感じた筈です。もうすでに私も何本か飲み干した後なので、大声を出すだけ頭がくらべらじます。

「そもそも、学園の購買に酒など売つていない筈でしょ!つー!」

仮にも高校である工学園で酒など売つてゐる筈はない。それなりにやつてここの大量の酒を手に入れたのか、私の問いかけに織斑

一夏はさも当然の様に言い放った。

「ああ？ んなもん姉貴の部屋からかっぱらつてきたに決まってるだろ」「

姉貴？ 織斑一夏の姉とは当然、あの織斑先生の事にきまつている。その織斑先生は学園の寮監も勤めていて、寮内には先生の自室もある。そこに不法侵入し酒を盗んだ？

「正氣ですか？」「

「スリルがあつて楽しいだろ？」「

「自殺行為でしかありませんわつ……」

神をも恐れぬ所業を誇らしげにすら言い切つて、織斑一夏は胸を張つて笑っていた。馬鹿だ。心底の馬鹿が私の眼前にいる。馬鹿だ馬鹿だと思っていたが、よもやここまで大馬鹿であるとは思つていなかつた。

「篠ノ之さんもこの馬鹿を止めてください……」

「言つて止まるような馬鹿でもないだろ？ 何かあつたらこの馬鹿が全ての元凶どころにしておけ」

そう言つて篠ノ之さんは缶チューハイを新たに一本飲み干した。飲み干した空の缶を地面において、世界の真実を諭す様にしみじみと呟いた。

「だから言つただろ？」「コイツは心底の馬鹿だ、と

「そうでした、この馬鹿は真正の馬鹿でしたわ」

「いついうときは、酒でも飲んでストレスを発散するに限るだ。ほらもつ一本どうだ？」「

「ありがたく頂きますわ」

既に私も、相当アルコールが頭に回っているのだろう。口ではなんだかんだ言いながらも、勧められた酒を勧められるがままに飲んでいく。

「 隨分とまあ、楽しそうでいいがじゃな
いか、ええ?」

その直後、そんな酔いを完膚なきまでに吹き飛ばす、絶対零度の
声が響いた。

「…………織斑先生?」

自分の首がまるで鎧びついた機械の様に重く感じられ、鎧びついた金属の軋む音すら幻聴として聞こえてきやうなほどに、私はゆっくりと振り返った。

そこにいたのは勿論、能面の様な感情を排した表情に、凍て付く冷氣の様な怒りの雰囲気を纏つた、今の私にとっては死神同然の存在である織斑先生だった。

「ああそうだ、あの愚弟に酒をかすめ取られた織斑先生だぞ」

もう完璧、間違いないなく織斑先生は怒り狂っている。

「い、これはですね、あの馬鹿に騙された結果というか、私は最初酒とは露も知らず」

振り返って元凶である馬鹿を睨みつけようとしたが、そこに
は飲み散らかされた空き缶と、食い散らかされたスナック菓子のゴ
ミがあるだけ。当の織斑一夏は影も形も存在していなかつた。

「 つていないつー？」

見上げてみれば夜空に一つ、星が追加されていた。織斑一夏の駆
る「ラフアーレ・リヴァイブ」のスラスターの光という星が。

「それじゃあお休み」

そして篠ノ之さんもまた、懐から取り出したロープを屋上の柵に
巻きつけ階下に飛び降りていた。それじゃあ後は頼むといわんばかりの表情を浮かべた篠ノ之さんの顔が、夜の暗闇の中へと落下していく。

つまりは、私を含めた三人の中で、ここにいるのは既に私一人。
織斑千冬という最強最悪の死神を前にして、あの一人は私一人を矢
面に立たせてとつとと逃げてくれやがったのだ。

「逃げたあー!? あの馬鹿一人、私だけ置いて逃げやがりましたの
つー！」

「ああ、もう何もいうな。状況などわかり切っていることだからな、
これだけで済ましてやる」

直後、私の頭頂部に鉄鎧の様な衝撃が降り注ぐ。織斑先生の拳骨
は、すごく痛かった。

「お前の尊い犠牲は、やつと寝るまでは覚えておくれ」

HSとこのつのは、事の他逃げるのには便利だと、一夏は初めてHSとこのつものに嫌悪以外の感情を抱いた。特にあの最強の姉からこうも逃走を成功させるほどの機動力は惚れ惚れすると、世のHS操縦者が聞けば烈火の如く怒る感想を持っていた。

「…………で？ オレ、覗き見るのはいいけど、されるのは趣味じゃないんだよ」

夜の暗闇の中、一夏はだれもいないはずの方向へと言葉をかけた。何も無く、誰もいない。返答など帰つてくるはずもない場所への問い合わせは、しかし。

「あら、勘がいいのね。気配は消していた筈なのに

暗闇から現れたのは、HS学園の制服を身に纏つた一人の女生徒。恐らくは笑みを湛えているであろう口元を扇子で覆い隠しながら、悠然と一夏の方に歩み寄る。その足取りに搖らぎはなく、明確な自信に溢れた物だった。

その性根が、一夏の田には元より豊満な肢体と美麗な容姿を持つその女を、更に輝かせていくように見えた。

その姿に、一夏はどことなく自分と似たようなものを感じ取つていた。これはひょっとすると、結構な当たりなのかもしれないとい、自身の口元に笑みを浮かべた。

「「んばんは色女、こんな夜遅くにじりつしたよ、デートのお誘いか？」

「そんなところよ、織斑一夏君。今日の戦い見てたらや、どうしてもあなたとお話ししたくなつちやつた」

「そりや結構、俺の周りにや見る目ない奴多かつたけどよ、アンタみたいな上玉にそう言われるとはね」

「あら、ついてないのね」

「アンタがオレと戦ってくれるなら、ついてこむに変わらねー」

「あら駄田よ、がつつき過ぎは良くないわ」

「そいつは失敬、何せいい女には縁が無くてね、アンタを逃すと

生縁が無い様な気がしてた

「それにはまづ、聞くべき」ことがあるでしょ、うへ。」

「ああそりだつた、色女さん？　お近づきの呂にアンタの名前教え

ちやくれないか？

その一夏の問いかけに、女は満足げな笑みと、微かな寂寥感を滲ませて自身の名前を口にした。

「樁無更識樁無よ」

女は更識盾無と名乗る、事実その名前は学園のデータベースにも記載されている、彼女の名前としては至極適当な物だ。それでも、一夏にとつては、そうではなかつた。

「おじおじ、オレはアンタの名前を教えてくれって言つてるんだぜ？」

不快感をあらわにして、一夏は余人が聞けば意味不明な言葉の羅列をのたまつた。一夏の耳には、さつきの音の羅列を人の名前として受け入れたくはなかつたから。

「流石、
やつぱつ頬なりやつぱつ頬へれると思つてた」

けれどその意味不明な返答にそは、彼女が望んだものだった。それを聞いたかった。君ならきっとそう答えてくれると願っていたから。彼女はさつきとは違つ、一片の曇りもない満足げな笑みを浮かべた。

「テメエが誇れない物が、そいつの名前であつてたまるかよ」

「うん、そうだね。ほんと、君の言うとおりだよ。樁無つてのはね、更識の家が代々当主に継がせていく名前なの。うちの家は古くから世の裏側のあれやこれやを生業にしてきたからや、やうじしきたりが残つてゐる」

「はつ、馬鹿じやねえの、『誰かが継げる名前なら、そもそもそんな名前は塵同然だらうが』」

そう、一夏にとつて、更識盾無といつ音の羅列は、とてもではないうが人の名前とは認識できなかつた。

人の名前とは、そいつ自身が世界に向き合つての唯一無二の証だと、自分自身がそう強く認識しているからこそ、樁無といつ音の羅列の裏にあるものに気が付いた。

「昔はほんとの名前があつたんだけどね、今はもう樁無しか名乗らせてもらえない」

「アンタも災難だな。どうせ古臭い歴の生えた老人どもが、絶やしてはならぬ誇りだ、とかぬかしてゐんだろ?」

そんな物は、今を眞面目に生きている奴にとつては冒瀧以外に他ならないと、一夏は嫌悪感をあらわにする。名前を継がすなら、継ぐべきそいつ自身が誇りを持つてその名前を受け継がないと意味がないだろ?。受け継がせるという行為自体が、その名前を冒瀧しているとなぜ気付かないのかと、一夏はここにいない見知らぬ誰か

に怒りを抱いた。

「色男だね、君は」

その感情が、わかりやす過ぎるほど瞭然に漏れ出しているから、高々数分しか会話していない一夏を、彼女は心底氣に入つた。

「眞面目に生きてる」

髪を金に染め、腕にはタトゥーを入れて、言葉の端々からも滲み出る素行の悪さは、決して眞面目とは評せないだろう。けれども、彼は織斑一夏として世界に向き合ひ眞面目に生きているのだと、彼女は理解した。

「おつよ、オレは眞面目だぜ」

そう言って悪童の笑みを浮かべる一夏に、彼女はせめてこれだけは告げようとした意を決した。

「じゃあさ、私の事はエリーって呼んでよ」

もう彼女の眞の名前は、記録から抹消され、暗示すら掛けられ、当の彼女自身ですら思い出せない。思い出せるのは、自分の名前は樋無なんかじゃないと、そんな古臭過ぎて腐った音の羅列なんかじゃないとこう怒りだけ。

「エリー？」

「そう、エリー。昔読んだ漫画の中の、氣に入つた登場人物の名前

真実の名前はもう既になく、『えられたのは望まぬ黴の生えた音の羅列。ならば、せめて気に入った音の羅列を』が名前として認識してくれと、彼女は言い切った。

「やうか。まあまあいけるんじやねえのか、エリー」

その響きを紡ぐ。ままならない現実に腐る奴らが多い世の中、それでも彼女は腐っていない、前を向いている奴だと知ったが故に、響きに乗せた意思是一夏の心の奥底からの物だった。

「他の誰かがいるときは、そうだね……会長とでも呼んでよ」

「OK、エリー」

「それじゃあ、もう夜も遅いし、私はここにひで退散するね」

そう言つてエリーは踵を返し、再び夜の暗闇の中に消えていく。

「おやすみ、一夏」
「おやすみ、エリー」

交わし合い、刻みあつたその名前だけで、今宵の出来事に価値はあつたと互いに思いながら。

「よくもまあ、この私を捨て駒扱いしてくれましたわねっ……」

翌日。

「ヤツホー一夏、今日も元気そつね」

「……朝も早くから、全開だなお前」

教室に入った一夏を出迎えたのは、鬼の形相で詰め寄るセシリアと、それを面白そうに眺めるエリーの姿だった。

傍らにいた篠が、その光景に心底呆れ果てた表情を見せる中、当の一夏は当然面白そうな表情を湛えている。

「お前だつて飲んでたじやん。どうだつたよ、人生初のただ酒の味は」

「あの後の織斑先生の拳骨の方がよほど記憶に残つております！」

「

「おお、ありや効くよな。あれ喰らつたら一回酔いなんかしないだろ」

「わああ、セシリアちゃんつてもしかして不良？」

「そんなわけ無いに決まつてるでしょ！……そもそもあなた誰ですかっ！」

「……もう死ねよ一夏、お願ひだから騒ぎを起こすなら私の田の届かないところでやつてくれ」

キレるセシリア、それを面白そうにからかう一夏とエリー、その混沌とした光景に頭を抱える篠。他のクラスメイトはその光景についていけず、言葉を失うだけだった。

「

あんた本当に変わらないわね

そこに割り込む第三者の声に、クラスの耳目が集まつた。見れば教室の入り口に活発さを滲ませた小柄な女生徒が立ち戻りしていた。

ツインテールに纏められた髪が微かに揺れ、その瞳には眼前の光景に對しての呆れが滲んでいる。

「何だウリ坊、お前日本に帰つてきてたのかよ」

まあ確かに、小柄で活潑そうなその彼女に対して、ウリ坊というあだ名はよく似合っているのかもしだい。だがどこの世界にウリ坊と呼ばれ喜ぶ年頃の乙女がいるというのか。

「誰がウリ坊だこりあああああああああつーー！」

混沌とした朝の光景に、小柄な少女による全力全靈のドロップキックが追加された。

第一話（後書き）

＜あとがき＞

会長の設定を生かして、本当に会長をヒートンにしちゃつたぜ。そして鈴はすつとこんな扱い。

あとシャルロットは当然マリイ・ポジなんだけじ、そつすると結構悲惨な目にあうというか、一番えぐい目にあうというか。ラウラのほうは原作そのまんまで出すつもりなんですけどね。…………銀髪眼帯ドイツ出身ということから、シユライバー化したラウラを想像しましたが、そんなの書けるわけがねえ。

あたしが　凰鈴音が　あいつらと出会ったのは、小学五年生の時。

「お前中国人なんだろ?」

「だったらリンリンって呼ばぼつぜ、パンダみたいで似合つてんじやん」

「うるさい、私パンダなんかじゃないもん!」

子どもというのは結構異物を排斥したがるものだ。クラスの中で唯一の中国人であつたあたしは、クラスの悪戯鬼どもにとつては格好の獲物、よつてたかられてからかわれ続けた。誰もあたしの訴えに耳を傾けてくれなくて、あたしに出来たのは泣きながら叫び続けることだけ。

「　　うわくつせえ、ひんまがつた根性つてこんなに臭いんだな。つうわけで消えろよカス共」

「　　見苦しい。お前らつひざいから消えてくれ」

そんなとき現れたのがあの一人、一夏と箒だつた。あいつらは出会った時から変わらなくて、厄介事に率先して首を突つ込む一夏に、心底呆れたような顔をしながらも箒がついていく、そんな今と全く変わらない雰囲気を纏つてあいつらはあたしの前に現れた。

「何だよお前ら!..」

「何つて、決まってるじやねえか。お前らつひざいから消えろつてことだよ」

「Jリーフちは十人以上いるんだぞ、勝てると思つてんのか」

所詮は女の子いじめる様な屑どもだから、臆面もなく数の利を誇示して一夏と笄を恫喝した。けど、あの二人はそんな物一顧だにしないで、むしろそれがどうしたといわんばかりの小馬鹿にした笑みを浮かべた。笄なんか無表情に見せかけた嬉々とした表情で、笄を刀のよう構えていたし。

「じゃあ私は武器を使おう、私は女でか弱いからな、骨折つても知らんぞ?」

「なつ! ? お前卑怯だぞ! ! !」

「うつわ聞きました笄さん? 」いつも寄つてたかつて一人の女の子苛めていたのに卑怯だなんだとぬかしましたよ? 心底屑だわこのいつが。というかお前それ駄洒落? 瓒が笄構えるなんて寒すぎるぜ

「うおわつ! ?」

「よしわかった、先にお前をぼーる」

「……舐めてんじゃねえぞ、この糞があつ! ! !」

最早いじめつ子どもなど眼中になく、笄の放つ一撃を軽やかに避けまくる一夏。そんな一人の様子にいじめつ子どもは我慢ならないといった感じで一人に襲いかつた。

「バーカ、テメエらなんぞくらいたとJリーフ意味ねえよ

「半分はやれよ、一夏」

「むしろJリーフの台詞だつての」

結局、いじめつ子どもはあつけなく一夏と笄に返り討ちにされた。あたしはそれをボーッと見ているだけで、結局何もできなかつた。

「……あ、ありがと」

できたことと言えば、いじめっ子もが全員叩きのめされてから、助けてくれた一人に礼を言つぐらう。でもこの一人はずつと、素直といつ言葉から縁の無い奴らだったから。

「別にお前の為じやねえよ、このカス共が不快だつたからぶちのめしだだけさ」

「ああ、見苦しい上にずかずかといつちの視界に映り込んできたからな」

素直じやないその答えが、とつても重なつたものだつたから、口ではなんだかんだ言いつつも、この一人はきっとすごく仲がいいんだろうなつて思つたの。転校してきたばつかで友達なんかまだ誰もいなかつたから、その時あたしには一人がすつごく眩しく見えた。

「ねえ、私の名前は凰鈴音。その 友達になつてくれない？」

だから、私もその中に混ざれたらいいな、つて思つたら、自然とそんな言葉を言えた。

「おういいぜ、特別に友達にしてやる」

「……好きにしろ、この馬鹿と比べたら誰だつてましだ」

捻くれた返事だつたけど、二人はあつさりとあたしを受け入れてくれた。それが、一人との騒がしくも楽しい日々の始まりだつた。

そして今日、一年ぶりに再会したその親友たちは。

「ふふおつー？」

「ぐはつー？」

「「」の馬鹿共が、よくもあんなふざけた真似をしてくれたな」

千冬さんに強烈なアッパーを喰らって、とてつもなく見事な車田落ちを披露してくれた。

いやもう、普通は一年ぶりの感動の再会なんじゃないの？ とか思つたけど一夏の馬鹿は初っ端からあたしの事をウリ坊呼ばわりするし、ついついそんな馬鹿に対しドロップキックをかましてしまうし、勿論そんな一撃を一夏の馬鹿がまともに食らうわけ無くて、あつさりと避けて「久しぶりだな、おい」とか言いつつあたしの頭を撫でまわしてくるし、筈も一緒に「久しぶりだな、ウリ坊」とか言つて頭撫でまわしてくるし、そりや、正直言つてあたしの頭を撫でてくれるその感触に涙ぐみそうになつたけどわ、もうちゅうつとう、感動的な再会にならなかつたのかしら。

「何をやつてこる」の馬鹿共、もうチャイムは鳴つてこるわ

そしてそういうつまづいてるうちに千冬さんが登場。しかも元から威圧感たっぷりの人だつたけど、なんか当社比120%増しで威圧感増えてたわね。それでその千冬さんは教室内に入つてくるや否や、一夏と筈にアッパーを喰らわせて今に至るというわけ。

ああこれは絶対、一夏と筈がなんかやらかしたなつて思つたわよ。よくもまあ、あの千冬さんの逆鱗に触れる行為を懲りずにやれるわね。絶対一夏がやらかした行為に、筈が口ではなんだかんだ言いつ付き合つてたと思う。見れば、教室内にいた金髪縦ロールの奴も、千冬さんの一撃を田の当たりにして頭抑えてる。あれはきっとあの

子も千冬さんの一撃をくらったことあるわね、私も一夏の馬鹿行為に巻き込まれて喰らったことあるけど、すつしく痛いのよね。ああダメ、思い出したらあの痛みがぶり返してきやう。

「…………ほんと、何にも変わって無いわね」

そんな、一年前にあたしの元から過ぎ去った日常は、あの楽しい田々は変わらずここにあつた。一夏は相変わらず馬鹿だし、篠は自分は馬鹿じやないと大人ぶつてゐるけど、その実一夏と同レベルの馬鹿だし、一人は何にも変わっていなかつた。

「泣くなウリ坊、今生の別れつてわけじやないからよ。向こうで腐つてゐんじやねえぞ。俺たちはずっと“ここ”ここからまた会いに来いよ。その時はまた、一緒に騒げりつ」

一年前のあの時、空港での別れ際、そう言つてあたしの頭を撫でてくれた一夏はちゃんと約束を守つてくれていた。そのありふれた、けれども大切な光景に、涙が溢れ出しそうになるのを堪え、あたしは自分の教室に戻つた。

もうちよつと話して居たくはあつたけど、少なくともこれから三年間はあの馬鹿たちと一緒にいられるから。それに、これ以上いたらあたしまで千冬さんの一撃喰らうしそうだつたからね。

「…………とりあえず、昼休みになつたら一緒に飯食べましょ」

「おうっ」
「ああっ」

そんな何氣ないやり取りこそが、あたしが日本に帰つてきたこと

を実感させた。

「とりあえず、酒が無いのが寂しい限りだが、ウリ坊の帰国を祝つて乾杯っ！」

「だーかーらーっ、ウリ坊つて呼ぶなあつ！！」

「ともかく、鈴が元氣そで何よりだ」

「う、うん、筈もね、一夏共々変わらず馬鹿で安心したわ」

「……おい、あいつと一緒にするな」

約束通り、あたしたちは昼休みになつたら集まつて、食堂で再会を改めて祝い合つた。学生らしく健全に、アル「ールなど一滴も入つていなオレンジジュースでの乾杯を交わし、というか絶対一夏の奴酒があつたら酒で乾杯しようとしたわよね。

「ねえねえ一夏、この可愛らしい子紹介してよ」

「そうですね、あなた達の知り合いにしては至極真面目な方ですし」

なんか一夏たちも友達増えてるみたいだけど、……ビラビラこつ、どいつもこいつも胸に駄肉いっぱい付けてるのよ。そのあまりある肉こつこつよこせ。

「おつ、コイツは凰鈴音。俺と筈の幼馴染だ。まあ気軽にウリ坊と呼んでやりやあいい」

「そう、私は更識楯無、このHリ学園の生徒会長よ。ちなみにあだ名はHリーって言つの、よろしくねウリ坊ちゃん」

「私はセシリア・オルゴット、一組のクラス代表兼イギリスの代表

候補生ですか

それぞれ自己紹介してくれたけど、セシリアって奴はともかく櫛無つて奴、なんか一夏とおんなじ匂いがするわね。早速あたしのことウリ坊呼ばわりしてくるし。というかエリーって何なのよ、櫛無つて名前からどうしてエリーってあだ名が出てくるのかしら。

「ふふつ、気になるつて顔してるわね、けど黙田よ、それは私と一夏だけの秘密なんだから」

「べつに、気になつてなんかいないわよ」

「あら、可愛い拗ね方しちゃつて、ねえ一夏」

「元からこいつはこんな小動物チックだからな。いじられて拗ねてる方が可愛いんだよ」

エリーの肩を引き寄せた一夏は、またそんなことをのたまつている。その様が妙に馴染んでいたから、ちょっとだけむかついた。むう、別に一夏が誰と仲良くなつても構わないけどさ。

「な、オルコット、コイツにはウリ坊つてあだ名がぴつたりだろ?」「クスッ、ええ、確かにそうですね」

ああもつ、簫とセシリ亞もなんかこっち見てにやけてるし。全員そろつて何なのよその生温かい視線はつ。

「あ～つ～！もう何なのよつ、なんでそんなに微笑ましそうにしてんのよあんたたちはつ～！」

「いや、だつて？お前相変わらず小動物チックで可愛いなつて共通認識が構築されただけだろ?」

「まあ、確かにな」

「うんうん、可愛いよ、ウリ坊ちゃん」

「ええ、可愛らしいですわよウリ坊ちゃん」
「うが～つー！ ウリ坊ウリ坊言つなかつー！」

ああもう、何でこいつらは怒り続けるの。あんたたち微笑みっぱなしのよ。ああそ、そういう対応するのねあんたたち、じゃああたしの実力って奴を見せつけてやろひじやない。

「あんたたち、今日の放課後アリーナに集合ー！ そこであたしの実力を見せつけてやるわー！！」

「OK、いいぜ」

「あ、わかったよ」

「了」解

「ええ、期待しておりますわ」

くそう、こいつまであたしが怒ってるのに、結局みんなに張り付いた微笑みは消えることはなかった。

「よく来たわね、あんたたちー！」

「当たり前だろ、面白そだし」

「……お前に恐怖心を抱けって？ 無理言つなよ」

「駄目よお、調べたらウリ坊ちゃんって中国の代表候補生なんだつて、だから実力は折り紙付きな筈よ」

「普フツ、国家代表ウリ坊つて、また可愛らしいですわね」

うん、こいつらほんとに変わつてない。加わつた面子も加わるべくして加わつたような奴だし、遠慮なんていらないよね。

とりあえずあたしは即座に自分の愛機である「甲龍」を展開して、

巨大な青龍刀一本を連結させた専用武器である「双天牙月」を、一番あたしの事をウリ坊呼ばわりして的一夏に振り下ろした。大気を揺るがす唸りを伴った振り下ろしが、一夏がいた地面を大きく碎く。

「　　おいおい、あぶねえな」

「うん、やつぱり一夏のことだから、この程度の不意打ちぐらい避けると思ってた。大きく飛びさがつた一夏の体は既に「ラフアール・リヴァイブ」に包まれてて、その両手にはハンドガンが握られている。

「不意打ちなんて喰らう方が間抜け、なんでしょう？」

「おうおう言つてくれるねえ、それでこそ、だ」

ISに乗つっていても変わらない出鱈田な曲撃ち。けれども的確な狙いが付けられた弾丸は、つい先ほどまであたしがいた空間を打ち抜いた。

「お？」

「ふん、アンタのへなちょこ玉なんか当たるもんですかっ……」

「はつ、吠えてるよ」

「それはこっちの台詞つ……」

あたしは「双天牙月」を手首のモーターを急速回転させて、一夏の銃撃を防ぐ楯とした。同時にそのまま突っ込んで一夏の懷へと飛び込む。そこで「双天牙月」を分離させて、一刀流へとスタイルを変更する。

「あらりそらりそらり……」

未だハンドガンを両手に握りしめる一夏に対し、あたしは両手に持つたく双天牙月^くを振り回し、多方向からの連撃を放つ。近接格闘において、銃器と刀剣を持った者、どちらが有利かなんて言つまでもないだろ？

「ほらっ、どうしたのよ一夏！…」

「はっ、ぬかしてろっ！…」

「まだ素人と言つて差し支えない一夏に対し、あまりにも遠慮がなさすぎると思われるかもしね。事実一夏は防戦一方、けれど相手は一夏なのだ、これぐらいでちょうどいい。」

「ほら、反撃行くぜえ」

「」うちの連撃の隙間を縫つて、アイツのハンドガンが火を噴いた。その一撃は的確に、今振り下ろさんとしていた右のく双天牙月^くの柄元を狙い撃つた。狙い澄ましたタイミングで放たれた銃撃は、こつちの連撃に間隙を作る。その隙に一夏は大きく距離をとり、アイツの得手である中距離戦の間合いとなつた。

「すげえな、鈴

「何よいきなり」

「何つて、お前一年前まではISなんて縁が無かつただろ？ それで専用機まで与えられて代表候補生にまで上り詰めたのは純粋にすげえと思つたのさ」

「……う」

あの馬鹿に手放しこつも褒められると調子が狂う。第一あたしが頑張れたのつて、アンタと籌に追い付けるようになりたいって思つてたから。

「だから嬉しいのさ、遣り甲斐がある。越えるべき壁があるってのは幸せなのさ」

「ふ……ふんつ、相も変わらずプラス思考よね、アンタつて「当たり前だ、一回こいつきりしかないオレの人生、何でマイナス思考で生きなきゃいけねえんだよ」

一夏はぎつと、子供のころから何かに向かって生きていた。勉強だったり喧嘩だったりいろいろ。だから、あの一夏にこう言わると、その、なんか、いやばゆく感じるわ。

「つうわけで、今はお前に挑ませてもいいぜ」「はっ、上等……」

そんな問答を終えて、再び動き出すあたしと一夏。けれど失念していた、こんな状況でもう一人の幼馴染が黙つてている筈ないってことに。

「ノリノリなのはいいがな、私を忘れるな」

「打鉄」に身を纏つた筈が、当然の如く一夏に斬りかかった。だけど一夏が、よりもよつて筈の不意打ちに反応できないはずがない。神速の早撃ちで筈の斬撃に自身の銃撃を当てた。

近接戦用ブレードと、ハンドガンの弾頭が正面衝突を起こし、筈の斬撃を一夏にまで届かせない。

「おひ、ワリイワリイ、鈴の奴に夢中になつてた」「……というか私たちも無視しないでくださいまし……」

「 そうよねえ、特に一夏、君は私を無視しちゃダメでしょ？」

そこに降り注ぐマシンガンとレーザーの雨。同時にセシリアとHリーのISの情報が、私の視界に映し出される。イギリス製第三世代型ISくブルー・ティアーズ」と、ロシア製第三世代型ISくHスティリアス・レイディ」。

「どうあえず、過日の借りをかえさせていただきます！..！」

言つや否や、くブルー・ティアーズ」から四つのビットが分離し、一夏へと狙いを定める。一夏はそれを、初心者にしてはまあまあの機動で避け続ける。多分あいつは一対多の喧嘩に明け暮れていたから、機動自体は慣れでも多方向からの攻撃には慣れているんだろう。でないとああまで避けられる筈がない。

「一度見た奴が早々通じるかよつ！..！」

そして一夏の器用さは半端じゃない。襲いかかるレーザーの雨の隙間を縫つて、遠く離れるセシリア自身へと銃撃を撃ちこむ。確かに情報じやあ、イギリスのBT兵装は本体との同時使用はできないと。いう欠陥があつたはず。それを本能的に察知した一夏の銃撃は、例え牽制程度でもセシリアの攻撃の手を緩めることに成功していた。

そしてそこが、私の攻撃チャンス。

く甲龍」の第三世代兵装、空間圧縮による衝撃波を使用した不可視の砲撃、く龍砲」を起動。セシリアの猛攻を切り抜けた一夏へと

放つ。

「グゥツ、なんだ今の？」

それでもその不可視の一撃を、直感だけで直撃を避ける一夏は半端じゃない。かすり傷以上直撃未満と言つたところに抑え込んだのには、正直呆れかえる。

「ひ・み・つよ」

そして別に「龍咆」は「IS」本体の機動に何ら影響を及ぼさないから、私はあいつでも一朝一夕に真似できないほどに磨きぬいた機動を行使しながら、「龍咆」を撃ちまくる。

反撃を許さぬ一方的な連射。それでもあたしは手を一切緩めることなく撃ち続ける。だってあいつは一夏だから、どんな状況にあっても諦めるなんてしないだろう。その証拠に、アイツの耳には今もなお溢れんばかりの闘志が爛々と輝いている。

「試してみるか」

砲撃の隙間、そこに放たれる銃撃、けれど銃口から読み取れる弾道予測にあたしの体は重なつていない。目晦ましの乱れ撃ち？ そう判断したあたしの真横で、銃弾が弾かれる音が響いた。

「え？」

そこにいたのは一夏が放つたであろう銃弾を弾き飛ばした筈の姿。けれどおかしい、たつきのアイツの銃撃に直撃コースなんて一切な

かつた筈、それに何よつ、ビリして真正面から放たれた銃弾が、私の真横から襲いかかるのか。

「さつすが一夏、ほれなおしちゃう」

「気に入つてくれたかよエリー？ オレの大道芸」

「勿論、銃弾のビリヤードなんてお皿にかかるとは思わなかつた」
エリーのその言葉で、あたしは一夏の行為の詳細に気がついた。
アイツは銃弾同士ぶつけ合わせて、弾道を曲げてあたしの真横から
襲いかからせたのだ。

「オレはな、オレにしかできない」とをやつてみたい。HSとオレ、
どちらが欠けてもできないことをやつて見せてこそ、オレはHSに
使われるんじゃなくて、HSを使つてるつて証になる」

そんな心底子供の意地みたいなことをのたまつ一夏。けれどそれは、真つ当過ぎるほどに正論で、無茶苦茶アイツらしかった。

「だらうな、お前ならうつてつて馬鹿をやつそつだつた」

そして篝は、アイツがそれほどの馬鹿だつてのを、誰よりも深く
理解していたからこそ、真つ先にあんな曲芸に対応できた。正直言つて、その仲の悪さに嫉妬しそつだつた。

「はつ、言つてくれるな、篝！――」

「ぬかせよ一夏！――」

そして再び放たれる銃弾のビリヤード。HSの演算能力と一夏の

積み重ねた経験と出鱈田な技量が成し遂げるそれを、簫は刀一本を頼りに切り払い続ける。

当然そんなに打ち続ければ、ハンドガンなんですが弾切れになってしまふけど、一夏は即座に新しい弾倉を量子展開して弾幕を途切れさせない。

どうやらエスに乗つたとしても、一夏と簫は互いを一番の敵だと認識しているらしい。正直言つてかなりむかついた。浮かれまくつているあいつらを横つづらからひっぱたこう。

「龍砲」は空間圧縮による武器だ。だからまずは圧縮率を最大限にして、一夏の銃弾ビリヤードを無茶苦茶にする。勿論距離があればある程空間の歪みは極小の物になつていくけど、アイツのあの芸当は出鱈田なように見えて、精緻極まる照準があつてこそ、たとえ僅かな歪みでも、アイツのビリヤードを崩すには十分だ。

「つむつーー？」

そしてそれは同時に、「龍砲」のチャージが最大限に完了しているという事、そのまま不可視の砲撃を、今度は簫に向けて放つた。

「ぐるりーー！」

どうよ、今のあたしはあんたたちひとつでも脅威なのよ。これからは置いてきぼりにさせないわよ。

「やるじゃねえか、鈴ー！」

「中々外道に染まつてきたな、お前も」

「うつさいーー！ 誰のせいだ誰のつーー！」

「おい簫、お前のせいだつてよ」

「お前のせいだらうが、一夏」

「一人ともじやあつーー！」

「……子供の喧嘩と変わりありませんわね、」の「むこ」

「でも面白そうでしょ？ セシリアちゃん」

「ええ、そうですわね、」それに私たちを蚊帳の外にすると
はいい度胸だと、思い知らせてあげましょう……」

「同じ感、私達除け者にして盛り上がりってくれりやつして、こんな
にいい女を袖にするなんて、これは罰が必要よね」

「ええ、どびきつ痛いのを差し上げましょ」

それから「アーナの使用時間」を「アーナ」を使った喧
嘩にあたしたけは明け暮れた。

「自主的な学習は確かに推奨すべきではあるがな、
限度をわきまえりの馬鹿共が」

まあそれが白熱しそうだった。あたしたちが使ったアーナ
は数日間使用禁止になっちゃった。そりやあ確かに地面はクレータ
ーだらけだし、壁は至るところ縛割れてしまね。

「これからは皿塗しる。出来んとこうなつまじれからは私がお前ら
の相手をしてやる」

そうして千冬さんから全員に拳骨が見舞われて、あたしたちは全
員そろつて悶絶しちやつた。

「うん、本当に痛いわ、千冬さんの拳骨。」

この一夏、基本的に拳銃だけで戦うのですが、それだと話し的に決め手に欠けるというか、インパクトが無いというか、ならどうしようか頭を捻ったところ、「ジューダスにしてしまえばいいんじゃね？」という電波が舞い降りてきました。そのうちきっと「レスト・イン・ピース」とか言い出しそうではあります。

オレにとって、起点というのはやはりISの登場だったのだろう。姉貴とその親友が作り上げ世に出した規格外の兵器。最強無敵、そんな陳腐な四文字が的確な表現の、いかれたスペックの超兵器。しかもなぜか女にしか使えないという、わけのわからん欠陥を備えもしていた。別にそのこと 자체はどうでもいい。

数がたつたの476機しかないことも、それが世界の戦力バランスを担うことになったのも、それら皆全て別にどうでもいいものだ。確かに、あんな出鱈目な物作つたせいで、俺と笄が離れ離れになりかけもしたが、それも少し抗つた程度で無しにできた。監視対象なんて一か所に固まつていたほうがいいだろ、と姉貴に訴えて、結果、笄は俺達の家に住むようになった。

正直言つて、そうしていなれば俺はどうなつていたかわからな。なぜなら、その頃からちよつとずつ、世間という物が変わつていつたから。

ISがあるから女は強い。女は偉い。だから男は女より弱い。女より下だ。

そんな考えはちよつとずつ、少しづつ、世の中という奴を侵食していくつた。おまけにウチの姉貴が、全国ネットどころか全世界レベルで活躍してしまつた。もとよりバグキャラじめていた姉貴は、瞬く間に世界から脚光を浴びる存在となつた。

もしこれでISが男性にも操縦できる存在ならば、“織斑千冬”が強いのだと至極当たり前の評価となつたのだが、結果それは女性優位の狂つた思考を助長させる一因となつた。

「男が粹がつてんじゃないわよーーー。」

「弱い男のくせに

そんなことをのたまう女性が世に増えて、そういう奴らを見るた
びに心底からの吐き気を催した。どうしてそんなことを口から
吐き出せるのかと、理解に苦しんだ。

相手の欠点を突いて蔑むのはまあ、許容はできなくとも理解はで
きる。相手の粗を突いて、自分は優越感に浸りたい。下衆だが一応
の理屈は通る感情だ。

けど、“コレ”は違うだろ。

自分は女だから、女である時点で男より偉い。そんな物に理屈な
んてあるわけない。

ISが使える？ それはISが強くて、実際にISに乗ってる奴
が強いと自負するのならわかる。女が強いんじゃない、ISが強い
んだ。

つまりは女だから強いんだとのたまう奴らは、相手も、当の自分
すら見ていない。筋の通らぬ自己愛によつて、自分は強い。自分は
偉いと砂上の楼閣で空しい哄笑に浸る。

そんな奴らが、俺にはどうしても人間に見えなかつた。己には見
えぬ何かを頼りに、あやふやで空っぽな自負に酔う連中。木偶人形。
そんな奴らはそう呼ぶのが最適だろ。

そんな奴らを見るたび思うのだ。人間つてのはそうじゃないだろ
う。確かに世の流れに流されることもあるだろ、けど、いつか
は自分の足で流されずに立てる奴が人間だ。

だから俺は、眞面目に生きていかない奴を認めない。

けれど、あの織斑千冬の弟という立場は、そういう眞面目に生きていらない奴らをたくさん引き寄せていった。どいつもこいつも目が曇っている奴らばかり、そんな奴らに辟易していくも 第だけは違っていた。

周囲からは剣術馬鹿だのなんだの揶揄されていても、アイツは自分のやりたいことをやっていた。流されずに自分の足で立っている。そんなアイツが、オレの目には眩しく光り輝いているように見えた。アイツのダチであることが心底誇らしかった。故に、アイツとの勝負は心が躍る。全靈を賭して戦つて、それでもなおアイツは俺と拮抗する。アイツがいる限り、オレは前に進み続けると実感できた。

まあそんな事、口が裂けてもアイツには言えないがな。

今日も今日とて、いつものメンバーが集まって行われた、放課後の喧嘩じみた模擬戦が終わり、一夏を除く面々は大浴場で汗を流していた。

「チツ、今日も引き分けか」

湯気立ち上る湯船の中で、笄の苦渋に満ちた呟きが漏れる。その顔と体にはいくつも痣が付いており、今日の模擬戦が一段と激しかったことを如実に表していた。

「……相変わらずよね、アンタと一夏つて」

何せ今日の模擬戦の顛末は互いに武器を破壊され、弾き飛ばされた二人による、ISを使っての殴り合い。量産機とはいえスラスターの出力とパワーアシストを乗せての殴り合いは、こうして互いの体に痛々しいほどの痣を残していた。

しかしそれは、一夏と篠にとつてはいつもの事。それを一番よく知っている鈴にしてみれば、ああまたいつものオチかという感想しか持てない。ちなみに今日は、互いに渾身の右ストレートによるクロスカウンター、そこからのダブルノックアウトという顛末だ。

「相変わらず」ということは……」これまでも？」

「うんそう、篠と一夏つて事ある」とに勝負するし、その時は篠が鉄芯入りの木刀で、一夏の馬鹿はどうからか手に入ってきた実物の銃使つてね」

鈴が平然と言つた言葉の内容に、セシリアの整つた柳眉が歪む。はつきり言つてそれは勝負という言葉の内容からあまりにもかけ離れたもので、とてもではないが許容できるものではない。

「正気ですか？」

「馬鹿だから正気じゃないんでしょう？ 何せ篠ときたら模擬戦用のプラスチック弾頭を平然と木刀で弾き飛ばすもの。はつきり言つて

馬鹿よ馬鹿」

「馬鹿馬鹿言うな、ウリ坊

「いやー、私も鈴ちゃんの言葉に同意するわ

「……エリーもか」

「私もです、もう一度言いますけど正気ですか？」

「…………ふん」

周囲からの総攻撃に、簞は膝を抱えて口元まで湯船に沈む。口から漏れる空氣の泡が、簞の不満を表しているようだった。

「どうか、お一人はどうしてあそこまで戦つのですか？」

セシリアの疑問は当然のことだらう。一人のそれは最早模擬戦や喧嘩などという言葉の範疇に收まるものではない。殺し合い、と評していいほどに苛烈で白熱した物だ。

「別に、ただアイツに負けたくないだけだよ」

けれど、簞と一夏の当人同士にしてみれば、その一言だけで説明が付くし納得できる。眞実一人の間にあるのはそんな単純化された感情で、その奥底にあるのを説明付けられるのは、この一人をずっとそばで見続けてきた者だけだらう。

「ま、単純にいえばそうだけど、負けないってのは先に立っているつてことで、そうすれば片方も必ず追いすがつてくる、負けたくないってのはつまり、二人で一緒に先へ進みたいってことの表れなのよ」

そう、鈴はこの一人をずっとそばで見続けてきたのだ。だからわかる、この一人の負けたくないは自分の為でもあるけれど、互いの為でもあるのだと。お前はここで終わる奴じやないだらう、だから俺／私が先に進んでやるから追いかけてこいよ、そんなあまりに馬鹿らしい思いを、一人は懸命に抱き続けているのだ。

「プツ……ククツ……」

「あはつ、あははははつ！…」

そんな事を聞かされては、セシリアとエリーが笑うのも当然だ。高校生になつてまで、そんな子供の様な気持ちを懸命に抱き続けているなんて、なんておかしくて、馬鹿らしくて、そして素晴らしいのだろう。

ああ、ならばあれほど一人の戦いに熱が籠るのも納得できようといつ物だ。それぐらいの愚かしくも輝く思いでなければ、人はあれだけ懸命になりはしないだろう。

「成程、二人は親友なんだね」

「そうですね、その言葉こそがぴったりです」

得心がいったと、そんな表情を浮かべるセシリアとエリー。二人の心中にあるのは、そんな関係を結んでいる一人への賛辞と羨望だ。恋愛感情などといつ言葉では結べない、苛烈で傷だらけの物ではあるけれど、そんな思いを結び合える存在がいることにかけ値なしの祝福を送りたいとすら思える。

「…………勝手に言つてろ」

そして篝の顔が真っ赤に茹だつているのは、きっと湯船の温かさだけではないのだろう。

「せつにえば当の一夏さんはどうしているのかしら？」

セシリアが会話に上り続けていた一夏の現状を気に欠ける。学園唯一の男子生徒であるが故に、当然大浴場での入浴許可など下りはしない一夏は、模擬戦が終わった後ふらりと姿を消してしまった。

その一夏の行動は、基本的に毎日がそうであり、セシリアは常から彼のそんな行動が気にかかっていた。

「……知るか、そんなこと」

その問いに篝はそつてなく答える。しかしその様子には、何故か欺瞞が含まれている様に気がしていた。しかし、篝の様子からしてそれ以上は答えることはないだろうと、セシリアはあたりを付ける。

「ああ、一つ言つてあげるわセシリア、アイツはね、古臭いのよ」

代わりにその疑問に答えたのは鈴だ。その中に含まれていた古臭いという単語が気に掛かり、セシリアはそれをオウム返しに口にする。

「古臭い？」

「そう、アイツはかつこつけだからね、女の子の前ではカツコ悪いところを見せたがらないのよ。アンタみたいに誰かの目がある所じゃ、見栄張りたがるタイプなの」

一夏は真面目だ。素行とか外見などではなく、物事に対する姿勢が真面目だ。そんな彼が、自らが強くなるのをただ口を開けて阿呆の様に待つてているだろうか。

そんなことは、例え天地がひっくり返るうともありえない。織斑一夏は座して待つだけの人間ではない。求める物を自らの足で進んで勝ちとりに行く人間だろう。

「成程
見栄張りですわね」

最早セシリアの心情に、一夏への嫌悪感などない。その見栄張

りで意地つ張りな人格に、混じりけなしの好感を得られるぐらいには。

「そういうところがいいんじゃない。カッコいいじゃん」

エリーは勿論、一夏のそういうところを知っている。彼のそういうところが心底気に入ったのだから。

アリーナの中で、未だ動く機影があった。

一夏の駆る「ラファール・リヴィアイブ」が、初歩的な機動を幾度も幾度も繰り返している。急加速・急上昇・急下降・急旋回、教本通りの初歩的な機動を、丁寧に丁寧に繰り返し、それをひたすらにやり続けていく。

常の一夏からは想像もつかない、それは地味と言える光景だつた。時に制御を誤り、頭の中に描いた機動とかけ離れれば、それをアリーナの監視カメラで確認し、客観的な視点からどこにミスがあったのかを事細かに確認する。

そしてまた失敗した機動を繰り返していく。体力よりも精神力を削っていく、明確な進展も何も無い練習を、一夏は無表情で黙々と繰り返していく。

「…………ふう」

そうしてアリーナの使用時間ぎりぎりまで自主練習を行い、少しでもISという兵器の操縦に習熟していく。

最大速度から地面から一センチの距離での急停止をやれば、時に

は地面と痛烈なキスをし、より鋭角な急旋回を行おうとすれば、間接に鈍痛を走らせる。それらの痛みは一夏にとつての糧であり、決して避けては通れない物だつた。

もとより知識面では一般入学でこの I.S 学園に入つたどの生徒よりも、一夏は劣るだろう。男であるが故に、I.S に関しての勉強など全くやつたことはない。そんな自分が彼女たちに追い付こうと思つたら、それはもう男だからこそできる痩せ我慢で、必死こいて追い付くしかないだろう。

おまけに量産型とはいえ、自分だけの機体もある。そんな物を押し付けられたとはいえ、それを無為に腐らせるのは、一夏にとつて我慢ならないことだつた。

全く不満のない人生なんて、女子供の夢物語にしかないだろう。ならばそう、気に入らないことがあってもそれを飲み干して、足搔いて、前に進み続けることが人生だろう。

(……飢えや不満なんぞ、人生に付き物だろうが)

だからこそ、普段は悪態ばっかりついて居る千冬に対して頭を下げ、アリーナの使用時間を延長してもらい、できる限り自らを追い込む。他の誰かはもう通つた道だと自分を叱咤し、無様であろうとも練習を黙々と続ける。

それなりとはいえ、素人同然の機動を行い続ける一夏の姿は、確かに無様と言えるだろう。それでも、そうして積み重ねていく修練は、決して一夏を裏切りはしない。必ず一夏の血肉となつて、いつか花咲く日もあるはずだ。

それになりより、一夏のその姿は真面目と、そう呼ぶにふ

さわしい姿だった。

常日頃一夏が自負する「真面目に生きている」とこの眞葉に違わぬ姿。

「頑張つてゐるね、色男」

「なんだ、エリーかよ」

最初に出会つた時には眞付いた自分の隠行に、全く気付かないほど没頭していた一夏。

「ほひ、喉渴いでるでしょ？」

「……おひ、サンキョ」

常日頃叩く軽口も鳴りを潜め、一夏はエリーから投げ渡されたスポーツーツドリンクをどうにかキャッチする。既に満足に体を動かすだけの体力もないのか、表情だけはどつこにか平静を保つていて、そのおぼつかない手つきが一夏の消耗ぶりを如実に表していた。

そういうところを晒してしまつたことが一夏の表情を、苦虫を噛み潰したようなものに変え、それをエリーは愛おしそうに見つめている。

「チツ」

「拗ねない拗ねない、いいじゃない、そういうところを見られたつてさ」

呟つたりじました一夏は、場を誤魔化すかのようにスポーツーツド

リンクを一気飲みする。「トクリトクリと喉仏が動き、過度の練習で失った水分を急速補充する。

「やつぱつや、じつじつといひは見られたくなかった？」

「当たり前だろ？ 男はいつの時代もカツコ付けばかりなのさ」「でもや、ウリ坊ちゃんや雛ちゃんは気付いているみたいだつたわよ」

「それでも氣付かないふりしてくれるあたり、アイツ等つていい女だと思ひば」「う」

「じゃあ私は悪い女かしら」

そう言つてニヤリと笑つエリーの表情は、確かに悪い女の、魔性といつべき笑みだった。

それを見て一瞬、一夏の表情に思案の色が浮かぶ。そしてどうしたものか、先程までの姿を見られて、このままずるずるとペースを握られ続けるのはしゃくだと、いつもの様に無駄な負けん気を發揮して、一夏は悪戯を考えている時の様に思考を加速させた。

「やうだよな、人の懷にすかずか上がり込んで、こつなりやお前の奥底も見ないと釣り合い取れないな、ベッドの中で、とか」

「やうりと、これまたエリーと同じように性質の悪そうな笑みを浮かべて、一夏はエリーに詰め寄つた。

「あら、積極的ね」

「いけないかい？ イイ女がいるのに手を出さないってのは、逆に失礼だと思つんだがね」

「それじゃあ雛ちゃんは？ ウリ坊ちゃんは？ あの子たちもイイ女なんでしょう」

「ああ確かにそうだけど、雛でオレの息子おつ勃てる自信ないし、

ウリ坊は色氣より可愛さが先に来るだろ、やつこつぶつこは見れねえよ」「

「酷い言い方、悪い男ね」

互いにかわす、ともすれば下品ととられかねない言葉の応酬だったが、それでも互いに奥底の心理を理解しているために、決定的にそういう結果にいたづくための色氣が不足していた。

「
黙目だな
黙目ね」

つまりは、三文居では雰囲気を作れないということだった。双方共に笑みを消し、疲れたように溜息交じりの否定の言葉を吐き出した。

「今日はもう限界かね、これは」
「そうねえ、ベッドの中で本当に寝た方がいいわよ」
「だよなあ、このまま突入しても絶対勃たねえ。それは男として恥ずかしきがる」
「アリーナの施錠は私がしておつからさ、今日はまつ帰っちゃいなれー」
「あ～あ、つづづくカツ「悪い」」
「そつかしら、決めるべき時にカツ「よく決めれる奴が、本当にカツ」よくてイイ男だと思つけど」
「　　前言撤回、やっぱお前イイ女だわ」
「今頃気づいた?」
「いいや、そんなの最初から気付いてた。……それじゃあ悪いけど後頼むわ」

「ええ、おやすみ一夏」

「ああ、おやすみ、エリー」

交わす別れの挨拶。同時に一夏の顔がエリーの顔に急接近した。吐息がかかるなんてものではなく、ほんの僅か零になる一人の距離。キスとするいえない、ほんの僅かの接触をエリーの頬に残し、今度こそ一夏はアリーナから出ていった。

「じゃあ今度こそ

おやすみ、エリー」

三文芝居で気が抜けて完全に無防備になつたエリーへの、それは一夏の完全な不意打ちだった。

そういう雰囲気でこういふことをやられても、エリーは決して動搖しないだろう。そんな状況ならば、来ることが分かっているなら、エリーは自分のプライドにかけて無様に動搖なんてしないだろう。だからこそ、そういう警戒をはぎ取つたところに打ち込まれたこの不意打ちは、エリーの精神を完全に動搖させた。

「…………え？」

そんな咳きですら、発することができたのはアリーナから一夏の姿が消えた後。未だ頬に一夏の唇の感触が残つてゐる様な気がして、エリーは思わず自分の頬を撫でた。

ようやくそこで、自分が一夏にキスされたことを自覚したエリーは、ついでに頬を撫でる自分の掌に熱いものが当たつてゐる感触も自覚した。

「私、キスされちゃつた？」

言葉にすれば、一層掌に伝わる温度が上がったような気がした。

普段の飄々とした雰囲気からは想像もつかない、恋に疎い一人の少女の姿を晒し、それを自覚してしまった自分に一層エリーは混乱する。

「い……一夏の馬鹿」

誰もいなくなつたアリーナで、一人寂しくそう呟くのはあまりにも間抜けだったが、今のエリーはそれぐらいしかできなかつた。きっと一夏はこんな自分を想像していたのだろうと思うと、今手元にハンカチがあれば噛みちぎりそつたほどに悔しかつた。

「いつちが、年上なんだよ？」

女のプライドとして、年下の男の子にいつまで手玉に取られると、混乱が収まつてくれれば悔しさが真つ先にこみあげてくる。

「あ～でも、今更どういつしに行くのもなあ……」

そんなことをすれば余計に手玉に取られる予想しかできない。「何だエリー？ あれぐらいのキスで動搖するなんて結構初心なんだな」とか、「あれぐらいじゃ満足できないってか？ いいぜ、今のお前ならその気になれそうだ」とかのたまう一夏が、エリーの脳内で鮮明に再生される。

「あ～もういつ……一夏の馬鹿つ……」

一度鱗が入つた心はそんな想像だけでも揺さぶられ、エリーはその動搖を吹き飛ばす様に今一度、大声で一夏を罵つた。

『何だ、可愛いところもあるんじゃないかエリー』

そこにちよひび、アリーナの館内放送から一夏の嗜虐心に満ちた声が響く。恐らく、そのまま帰るふりをしてアリーナの管制室に忍び込み、エリーの痴態を一矢二矢と眺めていたのだろう。

「…………え？」

先ほどキスされた時の様に長い沈黙の後に絞り出した咳きが、再びエリー一人だけがいるアリーナに流れた。

「見てた？」

『勿論』

「…………一夏の馬鹿、乙女のあられもないところ覗き見るなんて」

『お前だって俺のカツ「悪いところ見ただろ？ これでチャラだよ』

「一夏のHツチ」

『思春期の男なんて誰そんなもんだろ？』

「一夏の馬鹿」

『おう、よく言われる』

「一夏の変態」

『うわ、ひつでえ』

ああダメだ、とエリーは痛感した。既にペースは一夏の物、これ以上何をどう言つてもこのペースを崩せそうになかった。

「ふん、せつせつと自分の部屋に帰つて寝なさいよ」

「ねへ、お前の可愛い姿も十分堪能したしな、今度はおやすみアリーナ

「

「…………おやすみ一夏」

その応酬を最後にあつたと一夏はマイクを切り、今度はアリーナにはアリーナ一人となつた。

「今度何かあつたら、絶対私がベースを握つてやるんだから

アリーナの中心で気炎を燃やすアリーナ。まあしかし、その姿も一夏がみれば可愛らしことしか映らないものであつた。

第四話（後書き）

「あとがき」

きっと司狼って本質的には努力家だと思つんですよ。けれど何でもできたし、できてしまつたからそんなことすらできなくて、だからこの世界では、女連中に見られないところで努力してゐるって感じです。まあ、そんなの周りにはばればれなんんですけど。

とある日の昼食時の食堂で、いつも面子が集まつてだべつているその時に、エリーがおもむろに一枚の紙を取り出した。

「じゃ～ん！～ これはいつたい何でしょ～？」

そう言つて出された紙を、全員が食い入るように見つめる。

籌だけは「別にどうでもいい」みたいな雰囲気を出していたが、それでも気になる様で視線だけはその紙に釘付けだ。そして鈴がそんな筹の様子を敏く見つけドヤ顔を晒し、常より増して仏頂面になつた筹に「△ペッンを喰らつといひまで、実にスムーズな流れを展開する。

「 てい

「 ふきやつ～？ 何すんのよ！～」

「お前がこつちを見てドヤ顔しているからだろつが」

「アンタが無関心なふりしてチロチロ見てるから仕方が無いじゃないつ～！」

デコピンのせいで赤い斑点ができた額を抑え、憤怒の表情で筹に喰いかかる鈴。

実にくだらなく、微笑ましいやり取りを交わす二人に、他の面子どこりかその場にいた他の生徒ですら生温かい視線を一人に、とうか鈴に集中して注いでいた。

周りから聞こえる含み笑いに、ようやく鈴も自身が注目の的だと自覚し、そこから赤熱化＆暴走のコンボを発動させる。

「うがあ～つ！… アンタのせいだこらあつ！…」

「お前がハイテンションで暴れてるからだろ？ 流石ウリ坊」

「ウリ坊つて言つなつ！…」

涙目で箒に詰め寄る鈴。しかしその光景に悲痛感などなく、何処まで行つても微笑ましさしかなかつた。一夏に至つては「後はぐるぐるパンチしたら完璧だな」とか思つてゐる程だ。

「第一あんたらがウリ坊ウリ坊つて言いまくるから、クラスの皆にもウリ坊つて言はれてるよ。責任取りなさいつ！…」

「皆ウリ坊がぴつたりだと感じたからじやないのか？」

「ち～が～う～の～つ！… アンタたちのせいなのつ！…」

そんなやり取りを交わす箒と鈴を尻目に、セシリアが笑いをこらえながら自身の携帯端末から一枚の画像ファイルを展開させる。

「私のルームメイトがウリ坊ちゃんと同じ一組の所属で、ついでに漫画研究部に所属しておりますの」

もう我慢の限界と言わんばかりに震える手で、タッチパネルを作して展開された画像には、二頭身にデフォルメ化された鈴が、可愛らしいウリ坊の着ぐるみを着込んでいるイラストだつた。大きく口を開けたウリ坊の口から、鈴の可愛らしい顔とツインテールがぴょこんと出でている。

「は……初めて見たとき……もつお腹が張り裂けそうでしたわ… プツ…ククッ」

「あはははつ！… 最高つ！… これ描いた人いいセンスしてゐるわつ！」

「だな、正しくウリ坊じやねえか。クククッ」

「ちなみにこれを描いたクラスの応援旗を作ろつとこいつ話が、持ち上がつているとかいないとか」

「いやあ、これは作るべきでしょ」

「生徒会で正式に認可してやれよエリー。権力つてのはいつこいつ時に使うもんだ」

「そうよね、権力つてのは的確に正しく使わなきゃね」

「何処が正しくて的確なんじゃあああああつーー！」

ようやくセシリアが持ち出した画像に気が付いた鈴が、エリーと一夏のやり取りで更にブチ切れた。

「だいたいどこのどいつよ、こんなイラスト描いたのつーー！」

「お前のファンじゃねえの？ 愛されてるつて証だろ？」

「こんな愛いらない、絶対いらない。といつかこんなイラストの応援旗で応援されたら死ねるわよつーー！」

「ねえ、セシリアちゃん、この画像コピーさせてちょうだい？ 今日にでも画像アップロードサイトに上げるから」

「それには及びませんわ。昨日すでに上げました。喜んでくださいウリ坊ちゃん、すごいアクセス数ですわよ？」

「喜べるかああああああつーー！」

最早放つておいたらどこまでも過熱しそうなほどに鈴はブチ切れていた。

「そういうエリーが持てきた紙切れって何だつたんだ？」

そしてそんな鈴を華麗にスルーして、幕がエリーの提示した本題に目を向けた。もう惚れ惚れするぐらいのスルーつぶりだ。長年の友達付き合いの成せる職人技であった。

「何元凶がスルーしとんじやこらあああああつー！」

何で私たちのせいで話が脱線したんだ？

は人として最優れた禮儀たる三

ねえ それなり私は？ 私への祝儀は？

さうしてなは書いてあるのかな

置いてんのかあああああ

お前をすかにしないわよお前は
公共の場所いや館度を守らないと

いにしたるは

実に平然と、呆れ顔でそんなことをのたまう筈に、鈴の額に井桁
がいくつも浮かび上がる。

「殴つていい？ ねえ、アンタのその顔本気で殴つていいよね」「だから落ち着けって、ここはお前だけの場所じゃないんだぞ？」

「うえ〜んセシリア〜、幕がいじめる〜つーーー！」

ついにあらゆる面で我慢の限界を迎えたのか、鈴はマジ泣きしながらセシリアの胸に顔をうずめて泣きじやぐる。何処からどう見てもそれは幼い子供のそれであり、泣き縋られたセシリアも慈愛の笑みを浮かべて鈴の頭を撫でてあやし始める。

「よしよし、もう大丈夫ですからね鈴ちゃん」

「おこら 何を てしるかせじ」と

可愛さ余てお方達をここにいしめるのは馬鹿以外の何物で
ないでしょに

「...」

鈴をあやしながら、まるで子供の集まりの面倒を見る年上のお姉

そんな様な雰囲気で、セシリアは篠をやり込む。

篠としてもちょっとばかりやり過ぎたかな、と心中で反省しきも

ものをしていたので、セシリアの物言いに反論もせずに黙りこむ。

「鈴さんも篠さんと一夏さんが馬鹿なのは周知のことでしょう？
だったら鈴さんがしつかりしないと」

「うん……わかった……」

ようやく篠も落ち着いてきたのか、泣き止らした顔をセシリアの
豊満な乳房から上げ、自分の腕で残った涙をぬぐい取る。拭い去つ
た後にあるのは、いつものように溌剌とした笑顔。

「ああもう、篠なんかに泣かされるなんてどうかしてたわ」「
ええ、そうです。むしろ篠さんを泣かしてしまったせいな

「……ふん、お前如きに泣かされるか」

「とか言いつつ、ウリ坊ちゃんが元気になつて喜んでるんでしょう
篠ちゃんは」

「うるさいぞ。黙れエリー」

「キヤー、篠ちゃんのシンデレラ最高ー」

どうやら篠はエリーのからかいには耐えることができても、一夏
からのからかいに耐えることはできなかつたようだ。何処からか取
り出した木刀を振りかぶり

「
公共の場所で暴れちゃダメでしょ？」

一夏の頭に振り下ろす直前、横合いから放たれた鈴の言葉に、そ
の動きを止めざるを得なかつた。

「……お前が言つた？」

「あたしだから言つたよ。」

「うつわ間抜け、ちつとき自分が言つた言葉でやり込められてるよ、カッ」「ワリィー」

「それでこの紙なんだけどね」

「……ものすごい平然と話をえますわね、エリー」

「いやあ、だつてこのへんで切りえないと延々とこんな漫才やつてそうじゃない？」この三人は

「オレも入つてんのかよ、エリー」

「もち」

「はあ、それで？ この紙はいつたい何なんですか？」

ようやく話の本題を切り出せることに、エリーは満足げな笑みを浮かべて、取り出した紙の内容を口にした。

「これは近々行われる学年別クラスリーグマッチのトーナメント表よ」

そのエリーの言葉にセシリ亞と鈴の田の色が変わる。何せセシリ亞は一組のクラス代表。そして鈴は途中入学とはいえその実力の高さから、既に一組のクラス代表になつている。

つまりは一人ともがリーグマッチの出場者であり、田の色を変えるほどに気にするのには当然のことだらう。

「それで？」

「どういづ組み合せになりましたの？」

当然の疑問を口にする一人だが、内心は既に第一試合の組み合せにある程度の予想を付けている。

「当然、第一試合の組み合せは一組対一組、セシリ亞ちゃん対ウリ坊ちゃんよ」

何せ互いが専用機持ち、しかも双方共に第三世代型の最新鋭機を専用機としている。基本的にIS学園のこうした試合は生徒の技量の確認もあるが、最も重視されるのはさまざまな組織の諜報合戦だ。田を付けるに値する優秀な操縦者はいるか、あの機体の機能・性能はどれほどのものか、そういうた物の探し合い。女尊男卑の世の中にあらうとも生き続けている古狸の化かし合いだ。

ならばそんな状況下で、中国とイギリスの第三世代機同士をぶつけ合わないなど許される筈がない。何せ相手がただの学生且つ量産機だと、満足なデータを得られないかもしれないのだ。そのためにもこの組み合わせでないと困る。でなければ学園當てに「公正な試合の組み合わせを求める」という一文が判を揃えた様に送られる筈だ。

「まつ、順当よね」

「ええ、想定通りですわ」

故に双方共に驚きはない。しかも毎日の模擬戦で互いの手の内は知れ渡つている。勿論奥の手がある可能性はあるが、そんなもので氣後れするほど一人の心胆は細くない。

「負けないわよ、セシリ亞っ！！」

「それはこちらの台詞ですわ。鈴さんっ！！」

だから互いに闘志を燃やし、遠くない未来での奮戦と己が勝利を

誓いあつ。それは實に青臭く、實に真つ当な、見る者を心地よくさせる好敵手の関係だ。

まるでそつ、どこぞの眞面目な悪餓鬼と、男勝りの負けず嫌いを彷彿とさせる様な、輝きすら感じさせるような光景だつた。

鈴はこれまで、どこぞの一人の関係を見守りながら、それでもそこには入れなかつた。友達だと胸を張つて言えたが、ライバルとはいえなかつた。

セシリアにとつても、代表候補生という地位まで上り詰めるための戦いの毎日だつたが、しかし、勝たなければいけないとは思つても勝ちたいと思つた相手はいなかつた。

そんな二人が、一夏と篠の関係に羨望にも似た憧れを抱いてきた二人が手に入れた、心地よい敵手の関係。

「ノリノリだねえ、一人とも。 ねえ一夏？ 篠ちゃん？」

「 チツ
フン」

まるで鏡映しの自分たちを見せられているような感覚に陥つた一夏と篠が、照れくさを隠す様にそっぽを向くぐらいには、今のセシリアと鈴は光り輝いていた。

「ほんと、可愛いよね皆」

そんな四人を見つめるエリーの表情には、微かな寂寥感が滲んだ微笑みがうつっていた。

「やつぱり友達って、いいものだよね」

「……まあな」

「当たり前だろ？」

「こまさら何言つてんのよ」

「ええ、ここに来てよかったですわ」

反応は様々、それでも全員が搖ぎ無い肯定を返したのだった。打てば響くと言えるようなその即座の反応は、全員に繋がった絆の証なのだわ。

「ねえ、
賭けをしない？」

全員照れくささからか、少しばかりしんみりとした空気を吹き払うよう、Hリーが務めて明るくそう言った。

「　「　「　賭け？」」」

流石にそんな言葉を、いくらHリーとはいえ吐くのは予想外だったのか、全員がそろってそう聞き返した。

「ねえ、賭け。今度のリーグマッチでセシリアひやんとウコ坊ちゃんのどっちが勝つかの賭け」

「いののかよエリー、一応お前は学園の生徒会長だろ？」

「いーわよ、ぶっちゃけて言つといこの教師連中もこいつじつはてるしね。まあでも私たちは健全に、いこの食券でも賭けましょうか」

「賭けに健全も糞もあるのか？」

「あら、篠ちやんはやらないの？」

「一応私は空気を読めるほうだと想つてるんだよ」

「相変わらずヒネてんなあ、篠は」

「……うつむけ」

「やりたいならやりたって言えばいいんだよ、素直じゃないと人生損するぜ？」

「ああはいはい、わかつたよやりたって言えばいいんだろ？ やりたいよ私もっ！！」

一夏の忠言なのか、からかいなのかわからない言葉の前に籌も陥落し、大声で明確に賭けの参加を口にした。

「それで？ 二人はどうちに賭ける？」

言質をとったエリーが、一夏と籌にどちらに賭けるのかを聞いて、セシリ亞と鈴は少し緊張した面持ちで、固唾をのんで一人の選択を聞く態勢をとった。

「
「.....」

恐らくは即答するだろ？という三人の予想を裏切つて、一夏と筹は少しばかりの沈黙の後、賭ける対象を口にした。

「セシリ亞に食券十枚」

まずは筹がそう答え

。

「おいおい筹、同じ方に賭けたら賭けにならないだろ？ オレもセシリ亞に賭けるつもりだったんだぜ？」

つまりは、双方共にセシリ亞の勝利に賭けたのだ。セシリ亞としては、二人は鈴に賭けるだろ？など予想していたので、外れた予想に僅かな驚愕の表情を見せた。

やはり友達として長い付き合いである鈴に、応援の意味も込めて鈴の勝利に賭けるだらう、と。

別に非はないが、それでも少しばかりの後ろめたさを顔に滲ませて、セシリアは鈴の方へと視線を向けた。

「ふふ～ん

ドヤ顔だった。それはもう見事なドヤ顔を鈴は晒していた。セシリアですらがその小憎たらしさにデコピンをかましそうになるほど、それは見事なドヤ顔だった。

「鈴……さん……？」

「どしたの？ ウリ坊ちゃん」

そのあまりの豹変ぶりに、セシリアとエリーもちょっと引きながら鈴に疑問の声をかけた。それに対し鈴は嬉しくて嬉しくて仕方が無いといわんばかりに口元はにやけ、体をくねらせながら、事の仔細を語り始めた。

「え～だつて～、筹も一夏も素直じゃないわけよ。そんな一人だから馬鹿正直に「鈴の勝ちに賭ける」とか言えなくて、それで悩んだ挙句にセシリアに賭けたのよ～、即断即決しがちなこいつらがあれだけ沈黙してたのがその証拠よ～」

そう言い切つたと同時に、鈴の額に一つの指が伸びる。

「

その指の持ち主、一夏と筹は無言で中指を折り曲げ、その先端を

親指で抑えた。見紛うことなき「ピッピン」の形だ。

ギリギリと、傍から見てるだけでも全力全靈の力が込められるのがわかる指は、直後、未だ「満悦」の表情を晒している鈴の額に強烈な音を立てて激突した。

「ふつふん

「ふめぎやつー?」

まあ、何処からどう見ても鈴に内心を暴露された一夏と簾の照れ隠しでしかなかつた。むしろそれ以外にどうやつたら見えるんだと言いたくなるほど、完全無欠の照れ隠しだつた。

「アハハハハハツー! おつ、おなかが限界ですわつー!」

「ブハハハハハツー! もう最高つ、あなた達最高過ぎるわつー!」

そんなものを見せられては、セシリアとヒリーが呵々大笑するのも当然だ。

「何? アンタたち恥ずかし むぎゅー?」

それを見て調子に乗つた鈴の口を、一夏と簾の指がつまんで広げて封じたのだつた。

ちなみに翌日、朝のSHRにて生徒会から配布されたプリントがあつた。

『学内大会における応援旗の仕様とその規定』

ああそつ言えはエリーつて生徒会長だつたわよな、そつか……あ
の言葉本氣だつたんだ……。

「ふつぞつけんなあああああつ……エリーの馬
鹿あああああつ……」

朝も早くから、一年一組の教室に鈴の絶叫が響き渡つたのだった。

第五話（後書き）

「あとがき」

何というか、話における鈴のヒロイン度がヤバい。セシリ亞にまでいじられるって……。

きっと「うが～っ！～！」と吠える鈴を見てE.S学園の生徒たちは次々と陥落していくでしょう。……新ジャンルうがボなんてありだらうか。

遠い。届かない。 私はもう、戻れなくなつた。

見えず、聞こえず、匂わず、感じず、あらゆる物が全く無い。あれから、どれだけの時が過ぎ去つたのか、何も無いから、比較できる物などありはしないから全然わからない。

つまりそれは停滞しているといつ事。時間というのはどうしたって流れるもので、だからこそ何も無いこの時間は流れていない。暗い。昏い。ここはまるで水底だ。のしかかる黒は這い出ることを許さず、流れる事無い漆黒は時間が止まつてゐる。

寒い。

だから私は心も止めた。そうすれば私自身も、何かを感じることは無くなつたから。絡み付く漆黒の停滞に、自分自身も委ねた。それでも、漆黒の更に奥深く、深淵の果ての深遠で私は思う。在りし日の輝きよもう一度。日の光を一身に浴びたいと。願いなんて、ただそれだけ

ねえ、お父さん。私は何か悪い事をした

の？ ワタシガアイジンノコドモダカラ？

それはそれほど罪深かつたのだろうか。生きてゐるなら誰しもが

享受できる輝きすら剥奪されるほどに。

ノイズの様に、その時の光景が浮かび上がる。母さんが死んでから初めて会った、他人の様な父親。そこで差し出された味気ない紅茶を啜つたと同時に途切れた景色と意識。擦り切れた意識が浮かび上がった時は既に、私はここに縛り付けられていた。

あまりに唐突で、何の覚悟も成せないままに放り込まれた地獄。状況を認識してからは、声にならない声で鳴き叫び続けた。

暗いよ。

寒いよ。

誰か、抱きしめて。

それでも、助けは来なかつた。だから私は、諦めたのだ。

遠い。届かない。俺は再び、戻つてしまつた。

止まらず、只管に歩き続ける。自らの足はもう、俺の物ですらなくなつた。見せつけられ、聞かせられ、感じさせられる。俺の意思など欠片も介在しない行進は、正しくからくり仕掛けのそれと同じだ。

最早、かつて進んでいた頃のことは何もかもが思いだせないが、それでも、闘争の只中を、生死をかけた非日常を、誇りを胸に突き進んでいた筈だと、そう確信していた。

だからこそ、その果てにあつた停止く死くは忌避すべき事ではなかつた。足搔いて、足搔いて、足搔き続けて、その果てに勝ちとつ

た結果だ。

停止く死くは、この世に生きる誰にも降り注ぐもの。ならばこそ、それを忌避し続け、逃れ続け、全靈で回避し続けた先に、力及ばず、降り注いだそれにこそ、至高の価値がある。

少なくとも、己はそうして停止したのだと、それだけは断言できる。

俺が憤怒するのは、そうして手に入れた終末を、よりもよって始点に戻すなどという、肥溜に満ちる糞尿より下劣な真似を、誰とも知れぬ者たちにされたということだ。

何故だ。何故俺から終わりを奪つた。終わりがあるから始まりがある、などとよく聞く文句だが、ならば、終わつたままに動かし続けられる俺はいったいどうすればいいのだ。

至高の結末に戻ることすら許されず、さりとて止まる」とすりできぬこの身は、進むことしかできないとのあれば、ならば進もう。立ち塞がる全てを滅ぼし尽くし、あの輝かしき結末へと帰りつくために。

故に、万象一切砂へ還れど、我が拳に呪詛を込めた。

俺を止めたくば止めるがいい。怨嗟を込めて刃を振るい、銃火を放て。立ち塞がる怨嗟の壁が、いつか俺を押ししつぶすその時まで、この身はからくり仕掛けの戦鬼と化す。

ISは基本的に、女性のみが動かせる。織斑一夏という唯一の例外はあれど、それは今でも不变の事実だ。さて、ならばその上で尚、ISを男性の意のままに動かそうとすればどうするべきか。

実際に簡単だ、ISを女性に起動させて、男性はその女性を意のままに操ればいい。女性をISに対するエミュレーターとして一個の部品へと変化せしめ、それを操ろうと考へた男がいた。

その男はそうした成果を求めるあまり、他の企業や国家どころか、ある犯罪組織とまで手を結び、更には妾が生んだ己が娘すら、その外道の所業への供物とした。

自身と血の繋がりのある実の娘の、人間としての尊厳すら認めず、ただ高いIS適性があつたからという理由で、その娘は人ではなくなつた。

そうした下劣畜生の所業の果てに、例え男性であろうとも操れるISは完成した。ハードは作つた。ヒミュレーターも製作した。ならばソフトウェアにもこだわろうと、更なる人柱をその者たちは求めた。

当時裏の世界で名を馳せていた武道家の、その脳髄を今度はソフトウェアへと作り替え搭載し、その機体は真の完成をみる。

死者の魂をくべて動く醜悪極まるその自動人形の名は、ゴーレムと言つた。

セシリ亞の視界に映る照準に「甲龍」が重なり、引き金を引く。銃口の先から迸る閃光が大気を焼きながらゼロタイムで伸びるが、発射タイミングを見切つた鈴は体を右に捻り、灼熱の閃光に機体の表面装甲を焦がしながら、自身の上方に位置するセシリ亞に向かつ

て突進する。

「甲龍」の非固定部位に搭載されたスラスターが唸りを上げ、同時に振りかぶられた「双天牙月」も唸りを上げる。鈴はそのまま突進してセシリ亞へ上段からの振り下ろしを放つ。

その直前、鈴はP.I.Cによる慣性消去とスラスターの推力ベクトル反転によつて、最大速力を維持したままの百八十度反転を行つた。直後、鈴を阻むように四筋の閃光が空中に光の格子を描く。レーザーライフル発射と同時に切り離したビットによる牽制。あのまま鈴が突進していれば「甲龍」は光の格子に絡め取られ焦がされていただらう。

「
くつ
ちいつ」

鈴は突進を阻まれ、セシリ亞は不意打ちを回避されて悪態をつき、それでもその苛立ちを機体の拳動へおぐびにも出さずに戦闘を続行する。

「往きなさいつ、「ブルー・ティアーズ」!—」

セシリ亞は不意打ちを行わせたビットをそのまま稼働させ、鈴の四方を囲むように動かしていく。同時に幾度もレーザーを斉射し、「ブルー・ティアーズ」の本領とも言える単機による包囲戦を展開する。

「まづつ!—? でもつ」

それをやらせては不味いと、鈴は連射モードへと切り替えた衝撃砲をセシリ亞自身に向けて発射する。これまでの模擬戦において、この戦法の弱点もよく知つてゐる。ビット使用時は当人が案山子も

同然になることを。

「そんな手はそりそり喰らいませんつ！」

だがしかし、今のセシリ亞は案山子ではなかつた。大きく旋回機動をとつて衝撃砲の見えぬ空間圧を回避し、手に持つレーザーライフルを発射しながらビットも動かし、計五本のレーザーが一斉に鈴へと襲いかかる。

「……………」

その特性上、今の攻撃などあり得ないと高をくくっていた鈴は、精緻な照準を付けられたレーザーライフルの一撃はともかくとして、微妙に甘いビットのレーザーはなんとか避け切ることに成功していった。損傷としてはシールドを貫通しての右腰部装甲への被弾。即座に被弾し溶解している装甲をページしながら、鈴は先ほどの攻撃を推察する。

（多分、ビットの制御を完全思考制御と、予め組んだマーコーバの
一つを組み合わせて行つてるんだわ。そうして余分のできたりソ一
スで機体本体を制御していると言つたところね）

ならば、ビットの機動精度に着目すれば、セシリ亞自身の攻撃タイミングを見切れるはずと、ISの全方位視界を利用して、場の動き全体を注視する鈴。現時点ではビットの動きに硬さが残っている。

（鋭くなつた？）

そしていま、その動きから硬さがとれ、鋭さが浮かび上がつてくる。ならば今こそ好機と、再びセシリ亞に突撃をしかけようとする

鈴だが、その先にあつたのはしてやつたりと、笑みを浮かべるセシリ亞の姿。

「 かかりましたわね」

「うして鈴が自身のとつた手段を見抜くのも想定の内だったのだろう。オートからマニュアルへの、ビットの操作方法の変更をセシリ亞はフェイントとして利用し、見事に鈴を釣り上げた。

「このままやられるかっ！」

鈴は咄嗟に「双天牙月」を二刀に分離、左手に持つ方の刀身をレーザーライフルの射線上に翳し、楯として利用する。そして右に持つもう一刀を腕部パワーアシストを全開にして投擲。片側だけでも巨大な刃が高速回転しながら、空中に大きな弧を描く。

レーザーライフルから延びる閃光が、左に持つ「双天牙月」の刀身を焼く。しかしながらEIS用格闘兵装の物理的強度は並外れており、刀身表面に溶解痕を穿つにどどまった。

次いで鈴は衝撃砲を稼働させる。先ほどとは違い威力を重視した最大出力モードでの発射だ。そして弾体として圧縮する空間の座標をあらかじめ最大範囲に設定。一応使用可能範囲に收まる数値だが、そのせいで余計に空間圧縮に時間を割かれる。

確かに威力はあるが、本来ならば高機動戦闘には適さない使用法。だが、先んじて投擲した右の「双天牙月」、セシリ亞が余裕すら感じさせる動きで既に回避機動をとつていてそれを、圧縮する空間の歪みで無理矢理軌道変更させる。あらかじめセシリ亞の後背から襲う軌道で投擲したそれを、セシリ亞は前進を選択して避けている。

故に、空間圧縮による「甲龍」側への軌道修正は、セシリ亞の意表を突く。勿論直撃とはいかないが、「ブルー・ティアーズ」の左のスラスターに接触した「双天牙月」は、機体を破壊できるほどでは

ないが相当の衝撃をセシリアに伝えていた。

「しまった、最初からこれを狙つて！？」

そして、セシリアの体勢が崩れる。最大出力での衝撃砲のチャージを終えた、鈴の視線の先で。

解き放たれる空間の歪み。セシリアは少しでもダメージ軽減にと、温存していた「ブルー・ティアーズ」のミサイルを発射する。白煙を描き飛び出すミサイルが、不可視の衝撃によつてひしゃげさせられる。直後ミサイル一基の信管が起動。その爆風は確かにセシリア自身をも襲つたが、同時に不可視の衝撃のダメージを軽減させることにも成功していた。

爆風にあぶられ、同時に距離をとることに成功したセシリアは、即座にビットの制御をマニュアル制御に移行し鈴の牽制を行つ。

クラスマッチ、その第一試合である鈴とセシリアの戦いは、正しく一進一退という言葉が似合う伯仲した物だ。

既にこれまで幾度も模擬戦という形で矛を交えた間柄。戦闘を進める上で重要な要素である戦いのくせ、呼吸のタイミングという物を互いに知悉しているため、まるで演武でも見るかのような入れ替わり立ち替わりの攻守の移動。

しかも筹と一夏の戦いとは違い、二人ともがISの操縦というものに習熟している。何せともに国家の威信を背負う代表候補生だ。相応の実力が無ければ務まらない。

故にIS戦の手本とはこうだと言わんばかりの攻防を、アリーナの中で繰り広げる。「ブルー・ティアーズ」は遠・中距離戦主体の為に鈴を引き離すべく、ビットの多方向攻撃と絡めた狙撃戦を展開し、「甲龍」は接近戦に比重を置いた近・中距離戦用の機体の為、その光の雨をかいくぐりながら接近戦を狙いに行く。

引き離したいセシリ亞と、懐に潜り込みたい鈴の戦いは、双方の実力が拮抗しているために、まるで固定されているように一人の距離は変わらずにいる。

互いの奥の手であった、ビットのマニュアル・オートの混合制御と、空間圧縮による投擲軌道の変化は確かに互いの意表を突いたが、それでも心の奥底に「あいつならばこれ位やるだろ」そういう思いがあつたのだろう、然程相手への動搖を誘えずにいた。

互いに決め手を欠いた千日手。加熱し白熱する思考の中で、この流れを変える一手を模索し続けながら、二人は戦い続ける。

先にその一手を見つけたのは鈴だった。

(…………あれだつ！！)

光明を見出した鈴はこれまで温存していた腕部高電圧縛鎖くボルテックチューんへを起動。同時に目的の位置をとれるまでドッグファイトを繰り広げる。目指す位置はセシリ亞の上方をとりつつ、ある物とセシリ亞が一直線になる位置だ。

それを狙つて居ると悟られぬように、勤めて表情を制御しながら、セシリ亞の放つ閃光の豪雨をかいぐり続ける。機体装甲表面にいくつもの黒焦げた筋を刻みながらも、とうとう鈴は狙い続けた位置をとることに成功した。

「行けええええっ！！」

咆哮と同時に、右腕部装甲が開き、そこから高圧電流を纏つたチエーンが先端部のアンカーに内蔵されたロケットモーターによつて音速を突き破りながら飛翔する。

雷撃の蛇となつたそれは猛然とセシリ亞に襲いかかり、絡め取つてくブルー・ティアーズ⁴を行動不能にしようとする。しかし、この戦いにおいて温存していた武器とはいへ、鈴はこれまでの模擬戦に熱中し既に使用済みの武装であつたため、セシリ亞の動搖はそれほど大きくはなかつた。

「甘いですわねっ！…」

あざけるようなセシリ亞の物言いの横を、空を切つたくボルテックチヨーン⁵が過ぎ去つていぐ。発射時の互いの位置は鈴がセシリ亞の上方に位置していたため、くボルテックチヨーン⁶はそのまま地面に突き刺さる。

「それはどうかしら」

だがしかし、起死回生の一手を避けられた鈴の顔に映るのは、その結果にあまりに不釣り合いな不敵な笑み。ようやくセシリ亞も、鈴がくボルテックチヨーン⁷が命中するなど端から期待していないことに気が付いた。

（では一体！？ 鈴さんは何を狙つて

極限まで加速セシリ亞の思考が、鈴が真に狙つている物を推察していく。何だ、何がある。あれを発射したのはただの日晦まし？ それとも、避けられるここを狙つていた？

「 しまつた！？」

一秒にも満たぬ思考と停滞。短くともあまりに長い隙の後、ようやくセシリアは鈴の狙いに気がついた。それを示すように「ボルテックチェーン」が高速で巻き取られていく。その先端のアンカーに、先の攻防で投擲した「双天牙月」を絡め取りながら。

「どうせええい！！」

裂帛の気合と共に、鈴が右腕を力の限り振りぬいた。当然その拳動は「ボルテックチェーン」に伝わり、即席の巨大鎖鎌と化した「双天牙月」がセシリアに襲いかかる。

背後から完全にセシリアの虚を突く形で飛来するその鉄塊は、「ブルー・ティアーズ」の背部に激突しメインスラスターを破壊。同時にシールドエネルギーを大きく削った。

「これで、勝ちだああああつ！！」

そこに、鈴が真の奥の手を放つ。模擬戦では一度も使わず、これが本番での初使用である、正真正銘の奥の手を。

「甲龍」のスラスターが、構造限界ぎりぎりまで推進用のエネルギーを貯め込み、圧縮する。下手をすれば自壊しかねないほどの暴力的なその力を、指向性を持たせた形で爆発させる。つまりは、それだけの力を丸々転用した文字通りの爆発的加速。同時、機体と鈴の体に掛かる凶悪な慣性をP.I.Cが打ち消した。

「瞬時加速」と呼ばれる、一流同士の試合でも通用する、

文句無しの高等技能。

代表候補生といえども、そう易々と行えないそれを、鈴はここ一番の勝負どころで成功させていた。

音速などとは比べ物にならない、ゼロタイムからのマックススピードに乗せて、握りしめ続けていたもう片方の「双天牙月」を振りかぶる。

人間大の斬撃砲弾と化した鈴。音を置き去り空を切り裂き、狙うはセシリ亞ただ一点。求める物は勝利のみ。

直後、鈴とセシリ亞がアリーナ中央で激突した。加熱する試合を、固唾をのんで見守っていた観客も、当の鈴自身もこの一撃での勝利を確信し。

「私の、勝ちですわ」

奥の手を持つていたのは、なにも鈴だけではない。セシリ亞もまた正真正銘の奥の手を持つていた。

傍目からは判らないものの、セシリ亞の提言を受けて専用レーザーライフル「スター・ライト Mk？」には改良が施されていた。長大な射程と威力を誇る代わりに、その長大な銃身は接近戦においてのとり回しが悪い。それを少しでも解消するために、その長大な銃身に追加装甲の装着及び銃身のフレーム強化を行つていた。

つまりは、そう何度も使えないものの、その銃身を近接格闘戦兵装への楯に改良していたのだ。

「少しばかり、銃剣術の心得がありますので」

それを利用し、「双天牙月」の刃筋をその銃身に滑らせるように受け流し、「瞬時加速」の勢いのままセシリ亞の右後方へと流れて

いつた鈴へと、
「スター・ライトMK？」の銃身を右肩に担ぐよつにして後ろへ向けた。

無論、銃身の改良など最近終えたばかりで、こんな物は一か八かの賭けに過ぎないが、それでもセシリ亞はその賭けに勝つたのだ。後は、引き金を引き、その勝ちを確実なものにするだけだ。

直後、轟音が鳴り響いた。

「
何事ですか！？
いつたい何なのよ！？」

無論それは「スター・ライトMK？」発射によるものではない。全周囲に張り巡らされたアリーナのシールド、エレによる試合の流れ弾を完全にシャットダウンすることができたが、轟音を伴つて破られたのだ。

たちどころにアリーナ内部はその破壊の余波によつて巻き上げられた粉塵に覆われ、それを成した下手人の姿を一時的に覆い隠す。

「相手は　　餓鬼か」

その中より、悠然と進みでる機影があつた。煙をかき分けるように進みでた“それ”は、静謐な声を伴い、その視線の先にあるセシ

リアと鈴を見据えた。

その機影は、一言でいづなら黒き闘士。曲面装甲で包まれた全身装甲の機体、その頭部は虎を模した兜に包まれ搭乗者の表情を包み隠している。

だが、何よりも異常なのはその空虚さ、元より何も無い機械の無機質さとは違う、在ったからこそ抜け落ちたその空虚さが、何よりもセシリアと鈴の精神を撃ち貫いた。

「だが、だからと言つて容赦はせん。ここは闘技場なのだろう。命を賭して鎧を削る場所の筈。　　覚悟しろ、などと今更な事を言つつもりはない」

握りしめられたその拳へ、明確に、鮮明に、立ち塞がる万象一切を碎き滅ぼす、まさに必殺の意思が込められた。

第六話（後書き）

＜あとがき＞

「うん、なんだらう…………自分で書いていて言つのもなんだけど、対ゴーレム戦つてここまで無理ゲー感が出る物だけ？」

そして、この状況下で一組のクラスメイトはウリ坊着ぐるみイラストが描かれた応援旗を掲げていると言つたら、シリアス感が瞬く間にかき消えるよな。

漆黒の鉄虎が、大地を踏みしめる。言葉を語らず、ただ、その拳に明確すぎるほど殺氣を纏わせ、鈴とセシリ亞ににじり寄る。

「 破けろ」

同時、その重厚な巨体が背部に内蔵された高出力のスラスターによつて猛然と加速する。破壊、その一点を成すために、鉄虎は進む。

「くつ、私ですのー？」

狙いを定めたのはセシリ亞と「ブルー・ティアーズ」。例えあと一步のところで勝ちを拾えたとはい、背部のスラスターは鈴の奇策によつて全損し、それに伴う様にシールドエネルギーも大きく削られている。

弱者から撃破する。戦場においては至極当たり前の選択。それを一部の搖らぎすらなく選びとり行使する。先の宣言通り相手が女子供だらうと容赦はしない、していない。

故に、手心などあらうはずもない。その拳に込められし物はあらゆるものを碎く必滅の意思。

「 くつ！？」
「 セシリ亞つーー！」

例えそれを知つていなくとも、生物的な本能がセシリ亞の背筋を凍らせ警鐘を放つ。鈴もまた、自身が狙い定められていくとも、その拳の剣呑さに気付き、セシリ亞の援護に回つた。

恐怖の一念が表情に張り付き、鈴は一刀に分離させていくく双天

牙月へを樁として構え、セシリ亞は四つのビットを間に割り込ませた。セシリ亞が満足に動けない以上、防衛は必然の選択で、そのために取れる全ての手段を二人は行使した。

例え未知の敵といえども、取れる手段の中で最善を選びとつた二人は称賛されてしかるべきだが、そもそも、二人の取れる手段で最善など無かつたのだ。

あ、駄目だコレ。

鈴の脳髄に直感が走る。これは駄目だと、防御なんかを選択しては駄目だと。これはそんな小賢しい真似ができる代物ではないと唐突に理解した。

その理解を肯定するように、割り込んだピットが、掲げられたく
双天牙月ゝが、その拳に触れた途端碎け、砂となつて形を無くす。
万象一切碎け散れと、その拳に宿つた呪詛そのままの、完璧なる破
壊。

眼前に迫る拳、そこから逃れるために鈴はセシリ亞を引っ掴むと、後先考えない瞬時加速を行使。そのままアリーナの内壁に高速で激突した。

「助かりましたわ」

痛みをこらえながらセシリアは立ち上がり、無茶を行使した鈴に礼をうつ。高速で壁に激突した？ そんな物は些細なことだ。“アレ”の直撃を喰らうよりかはるかにましだと実感した故に。

「……どういたしまして、つて言つといひなかしらね」

「私は、あはなりたくありませんもの」

「それについては同意しておくわ」

二人の視線の先には、一人に回避された必滅の拳がその勢いのままアリーナの内壁に激突した光景が映し出されていた。

アリーナの内壁は、核シェルターすら比較になら無い装甲の厚みと強度を持っている。常軌を逸したその防御力、観客を守るシールド発生装置の防御壁も兼ねているからこそ、その強度に関しては間違いない世界最高峰だと言える代物だ。

その内壁が今、二人の目の前で大きく抉られ砂となつて砕け散つた。それを成したのは甲鉄に包まれた握り拳。はつきり言つて、あり得ないと言えた。しかし今、それは現実となつている。どうしようもなく明確に。

砂となつた内壁の欠片が、風に乗つて二人を包んだ。

「何なのだ、あれはつ！？」

管制室内部に千冬の静かな怒声が響く。無論先の一撃は千冬たちも目にしており、その剣呑な脅威に対しさしもの千冬も驚愕の表情を見せていた。

「…………ともかく、すぐさま学園内のI-Sを応援として差し向ける。それとアリーナのシールド及び隔壁の解除はまだかつ……」

「駄目ですっ！！ 今三年が中心となって進めていますが、それでもまだしばらくかかると報告がつ！！」

「最大限急がせろ。それと日本のIIS部隊にも応援を要請しろ。あれは只者じゃないつ！！」

矢継ぎ早に指示を出す千冬、そこにあの鉄虎の解析にあたつていた真耶が驚愕の声を上げる。

「織斑先生っ、あの正体不明機の解析終わりましたっ！！」

「それで、あの芸当はいつたいどういつからくりだ？」

「それが

「

言い淀む麻耶、しかし、今この状況にそんな余裕は一切ない。それは真耶も痛烈に理解しているので、驚愕を飲み込んで言葉を続けた。

「 今の一撃において、局所的なグラビトン・フォトン・ウイークボソン・グルーオンの消失を確認しました」

管制室内の空気が凍つた。真耶が先ほど発言した単語は基本相互作用における物質を構成する力の媒介となる素粒子だ。それが消失した。つまりは、何も形を保てないということだ。

「間違い、無いのだな」

「ええ、事實上、あの一撃を防御するなんてことは不可能です。例えシールドを展開したところで、電磁相互作用によるエネルギーの固定ですから、フォトンを消失させられてしまえば意味がありません」

千冬の頬に冷や汗が伝つ。一撃必殺などといふ、そんな荒唐無稽な出鱈田が今現実に存在していることが、何よりも千冬の背筋を凍らせた。

「くつ……観客の避難誘導を急げ！！」

出来る」とと言えばそれぐらい。あの一撃の理屈がわかつたところで、言えるのは決して喰らひなとこいつことだけなのだから。

「織斑先生つ！！」

そして事態は、その程度では収まらない。この田中モビ、千冬は現実を呪つたことはなかった。

鉄虎の打ち込んだ一撃は内壁の一部を砂に変え、結果、観客席の崩落という事態を引き起しにした。

アリーナのシールドは、複数の発生装置が観客席の下側、内壁を取り囲むように配置されている。それが先の一撃で砂に変わった。無論それは複数あるうちの一基で、すぐさま他のシールド発生装置がその穴を埋めはしたが、事実としてシールドに穴が開いたのだ。

「うわあ、最悪」

「おつと」

「おじ幕、人の肩踏み台にするな。お前の女王様プレイなんて想像すらしたくなえ」

「何言ひてゐる。それぐらいやれよ。私だけ生身だぞ」

つまりは、たまたまその崩落に巻き込まれてアリーナの中に落ちてきた、Hリー・幕・一夏の三人が、この戦いの場に現れてしまつたのだ。

一夏とHリーはすぐさまHSを展開し、唯一生身である幕を受け止める。そしてすぐさままげんなりとした表情を見せ、鉄虎と相対する。

「Hリー、あれどうするよ」

「そもそもどうにかできるのかしら、あれ」

「まあな、……おい！ ウリ坊にセシリ亞、怪我は無いのか？」

「まあ、なんとか」

「私の方は、もう砲台ぐらいしかできませんが」

「つうわけだ黒甲冑。俺らも参戦をせてもうらうぜ。」

その一夏の言葉に、鉄虎はゆるぎなく答える。まるでそんなことになど困惑も驚愕もしないと、「口にそんな機能は無いと言わんばかりの静謐さだつた。

「委細、構わん」

向かってくるなら碎くだけ。砂と消えたいのならば好きに挑めと、HS一機という増援を歯牙にもかけず言い放つた。

「はつ、やうかよ」

そうほやいた一夏の顔には、隠しきれぬ侮蔑の念が現れていた。認めない。お前なんて決して認めるものか、オレの田の前でそんな様を晒してくれるんじやない、と。

「ああ、その思いは、至極当然のことだらうな」「ぬかせよ、リビングデッド、死体のままひづひづり動きやがつて、
目障りだ」

抜き打ち一発。瞬時に構えたハンドガンで正確に鉄虎に額を狙い撃つ。

「認められないといつのであれば、止めてみせろ。
俺は死にたいのだ。死んでやるのではなくてな」

「……チツ」

しかしそれも、鉄虎の握りしめた拳の前に霧散する。弾頭を構成する全ての力が書き消され、素粒子レベルの砂へと還元された。だが、そんな事象よりも一夏をいら立たせたのは、その拳では無くその言葉。甘んじて受ける死などに意味は無く、足搔いた末の死こそが価値を持つと言い切ったその言葉は、つまるところ懸命に生きることへの肯定だ。

その気持ちを、一夏は痛いほどに理解できていた。それ故に、眼前の鉄虎の様にどうしようもない苛立ちを募らせる。

「落ち着きなさいよ一夏」

加熱する一夏を宥める様に、エリーが手に持つ機関砲内蔵のランプで弾幕を張る。計四門の銃口から吐き出される弾幕は、威力・連射性能ともに並外れたものだが、それでもあの拳の前では何の意味も持たない。

「…………HSといつより動く要塞ね」

おまけに装甲強度そのものも、あの重厚な見た目通りの性能を誇つているらしい。拳を避けて着弾してもかすり傷一つ負つていない。

「だな、IS用のハンドガンつても人間用の対物狙撃銃並みの威力はあるんだぜ。それで傷一つつかないってバグキャラすぎるだろ」

無論、一夏もエリーの援護をただ見ているわけではない。ハンドガンの連射による銃弾のビリヤード、特異な機能など何も無い、技量による全方位銃撃。そんな神業ですら、あの鉄虎には何の痛痒も与えていない。

「温い」

そんな咳きと同時に、要塞が動き出した。必滅の拳が万象一切を分解しながら突き進む。防御など許さない、回避しか逃れる術は無い。その一撃を前に、さしもの一夏とエリーも顔を青くしながら逃げの一手を打つ。

「糞つたれがあつ！－！」

地を蹴りスラスターの推力による側転を披露し、天地逆の状態でも一夏の銃撃の狙いは正確だ。装甲が厚いのならば、狙うは関節の隙間。まずはあの剣呑極まる拳を封じるためにひじ関節の隙間を狙い撃つ。

「甘い」

それでも、そんな小細工を鉄虎は難なく見通し、僅かに腕を引き戻す。それだけで針の穴を通した銃撃はその装甲に弾かれた。

「小細工が、効くと思つたのか」

そして、鉄虎は虚空に拳を振りぬく。傍から見れば何の効果も及ぼさない無駄内にしか見えぬそれは、だがしかし、確實に自身へ迫る攻撃を打ち碎いていた。

「効いてくれたって、いいんじゃない？」

エリーの駆るエリックミステリアス・レイディの主武装とも言える、水分子を配合したナノマシンによつて意のままに操作し、時には爆弾として機能する特殊武装「クリア・パッシュ」が先の一撃によつて、そのナノマシンを破壊され完全に水へと戻されていた。

「壊つた筈だ。死んではやらないと」

故に、小細工程度でとれる命ではないと、鉄虎は厳かに、そして静かに吼えた。

「それならつ、これでどう?」

あの拳が相互干渉における四つの力を消去するというのなら、そもそも物質など介在していない「龍咆」は、あの拳ではかき消せないと判断した鈴が、一夏とエリーが交戦している間にチャージして置いた「龍咆」を放つ。

見えざる砲弾が鉄虎に向けて襲いかかり。

「それがどうした」

「ともあつさつとその奇襲を避け切つた鉄虎が、侮蔑交じりの言葉を吐き出す。俺がこの拳頼りの木偶の坊だと思つてゐるのか、と

言葉にならぬ叫びを周囲に振りまいた。

「それでも、やらなよつましじょいひーーー。」

「ならばやるがいい」

「ああ、やひせてもらひまえつーーー。」

「回感ーーー セシリアちやんは篠けやんを守つてね

「……わかりましたわ」

それでも負けるものかと吠えた鈴を筆頭に、一夏とエローも屈す
ることなく鉄虎に襲いかかる。

「篠せんせトがつて」

そんな中、武器と推進機器の殆どを失つたセシリアが、退避も許
されない状況中、唯一生身で立ち向かう篠の守護に就く。あの鉄虎
相手には心もとなさぎるが、それでも今の篠を守るべくこはやつ
て見せようとい意気込むセシリア。

「だ

「……篠さん？」

しかしそこで、心ここにあらずと言つた感じの篠に様子に気がつ
いた。その視線はしっかりと鉄虎を見据えるものの、まるであれと
は違う他の誰かを見ている様な、そんな感じだ。

「君は、誰だ」

時同じくして、一夏もまた不可思議な状況に陥っていた。変わら

ず剣呑な拳を振るい続ける鉄虎から逃げ続けながら、一縷の望みをかけて銃撃を加え続ける。飛来する必滅の拳は、正確に自身に迫る攻撃を無に帰し、少しでも手を緩めればその矛先がこちらに向かう。

それでも、それでもだ。

今もまた、真正面に見据える鉄虎に対し、上方から襲いかかる銃弾の雨を発射。それを無造作に掲げた必滅の拳が無に帰す様を睨みつけながら、一夏は吠えた。

「 テメエ、無いのかよ」

一夏と筈、二人の叫びが重なった。

「 君は、いつたい誰なんだっ！！」
「 ふざけてんのか、端からこっちを殺す気なんぞ
ねえんだろうがっ！！」

その叫びに、場にいる全ての者たちが凍結した。筈と一夏の理解不能な叫びに、エリーも、鈴も、セシリ亞も、相対している筈の鉄虎ですら。

「成程、節穴ではないようだ」

いや、むしろ良く見抜いたという様な、感心の体を見せて鉄虎は動きを止めた。

ああ、確かに「己」は万象一切砂に還れと殺氣を込めている。だがそれは、「己」にとっての常態。だからこそ、今の鉄虎は殺氣を込めていない。

さつ さとは、殺す意思とは、立ち塞がる物を明確な敵手として認識し、その上でその物の命を砂に帰すと決める事、少なくとも鉄虎にしてみればそういうことだ。

吹けば飛ぶよつた儘きものを、ビリしてわざわざ殺さうと思えるのか。

そして、同時に思つ。よつやく、この小つむさい餓鬼の叫びから解放されると。当人は諦め沈黙しているつもりなのだろうが、鉄虎の奥底でこの餓鬼は今なお叫び続けている。

寒い。

寂しい。

誰か、抱きしめて。

ああ、この身を作つた愚者共の誰もが気付かぬこの叫びで、よつやく気付いてくれるものが現れたのかと、鉄虎は認識した。

俺は止まつている。誰かに動かされ続けているから、だからこそ止まりたいと願う。それは間違いなく亡者の思考。死者の祈りだ。

翻つてこいつは、未だ生を諦めきれぬ、停止していない者の思考。生者の祈りだ。

その矛盾。動く亡者の只中に生者が蠢く、相反する矛盾。

そんなものを抱えていては、動きづらうことの上ないと鉄虎は思つ。故に、こんな物は放り捨てたいと常から願つていた。

ならば、即座にこんな茶番劇は終わらせようと、鉄虎はその全力の一端を見せた。

直後、鉄虎の姿が消えた。否、違う。そう見えるほどに素早く動いただけだ。いかに剣呑な能力を備えていようと、基本的にその機体はI.S.だ。

つまりは、他のI.S.が共通してできることを行つても、それは当然のことなのだ。今まで一夏たちが生き伸びられていたのは、鉄虎をどうにか懷に潜り込ませなかつたためだ。

「　　遅い」

瞬時加速。セシリシアとの試合において鈴が使つたその高等技能を、鉄虎は難なく使用した。機能では無く技能故に、その行使は問題なく行われ、今まで不動の距離であつた鉄虎と一夏の距離が瞬く間に零になる。

「なつ！？」

驚愕の声を断ちきつて、必滅の拳が一夏に振るわれる。砂に還る＜ラファール・リヴァイブ＞の胸部装甲、そのまま一夏の体まで砂に還るその刹那、鉄虎はその拳の機能を停止させる。

ただの鋼鉄で形作られた剛券は、強かに一夏を殴り飛ばし、その意識を断ちきつた。

「一夏っ！！」

「大丈夫よ、バイタルには問題ないわ」

悲痛な声で吹き飛ばされた一夏を見やる鈴と、それでも自分を抑えて冷静に勤めるエリー。そんな一人を、一夏を撃破した鉄虎が無感情に見つめ、突撃を開始する。

「こんのおおっ！！ 止まれえっ！！」

「これは、駄目かな」

半ば半狂乱になりながらも、それでもあきらめずに「龍砲」を撃ち続ける鈴と、表情にこの状況への諦めを滲ませたエリーが機関砲を撃ち続ける。何せ一夏を加えた三人でようやく足止めできていたのだ。頭数が一人減れば制圧力も低くなるという物。

「安心しろ」

そんな咳きを伴つて、再び瞬時加速を発動させた鉄虎が一人の懷に潜り込む。

「壁にもならんものをわざわざ壊すほど、俺は醉狂ではない」

鉄虎の拳が、先の光景の焼き直しの様に、鈴とエリーの意識を断ちきる。吹き飛ばされアリーナの内壁に張り付けにされた「甲龍」と「ミステリアス・レイディ」を一顧だにせず、鉄虎は幕へと歩み

寄る。

「 篦やんはや、ひか
きやあつー。」

満身創痍の体で、それでもなお篦を守り立と立ち塞がつたセシリアを、無造作な腕の一振りで弾き飛ばし、つこに鉄虎は篦の眼前へとたゞり着いた。

「 聞こえて、いるのだな、お前は」

その言葉の意味を、篦は正確に理解していた。アリーナに入つてから、ずっと耳に鳴り響く声。ありふれた、何の変哲もないことを求め続けるその声が、耳にこびりついて離れない。

「 ああ、聞こえて、いる」

それを無視することはできなかつた。ありふれた何の変哲もない日常を望んでやまないその意思は、篦にとつては絶対に無視できぬものだ。

篦は、大切に思つて、いるからなくしたいと思い。その声の主は、無くしてしまつたから取り戻したいと叫んで、いるのだから。

「 ならば、お前が進めて、生かして、やれ。
ユーレータゴニットのノイズ増大。排除する」

同時、鉄虎の胸部装甲が開き、中に封入されていた特殊容器を排出する。それを篦に向かつて放り投げた。本来ならば、それは鉄虎には許可されていない行動だ。

だが、己が矜持のために、これ以上彼女を使うことは我慢できなかつた。故に、開発した者たちからはバグとしかとらえられない矜持の発露にて、彼女を己が体から解放したのだ。

「H/Mコレー タコニシトの排除により、間もなく機能停止すると判断。自動帰還プログラム起動」

ただそれだけを呴いて、鉄虎は急上昇し空の彼方に消え去つた。

「完璧に、見逃されたな」

そう呴く筈の手の中の容器には、機械部品を組み込まれた誰かの脳髄が、衝撃を伝えぬように容器内に充填された液体の中に浮かんでいた。

第七話（後書き）

＜あとがき＞

うん、どうしてもこの面子があるゴーレムに勝つ光景が思い浮かばなかつた。故にこんな結果です。主人公たちに勝つゴーレムって、この話ぐらい？

そして第はカレン^ジデバイスならぬシャルロット^ジデバイスを手に入れました。

「あ～あ、カツ「ワリイ」

夜の校舎の屋上に、紫煙が漂っていた。一夏の沈鬱な気持ちを吐き出す様に、ふわりふわりと漂っている。

先日のあの戦い。あれはつまるところ戦いでも何でもなかつた。あの乱入者は一夏たちを敵とすら認識していなかつた。敵と認識できるほどの脅威ではなかつたから、手心を加えて見逃した。

「完敗、だな」

その一文字以外、今の一夏を表せる言葉はない。箒との勝負は引き分けばかり、箒を巻き込んで一緒に他のチンピラと喧嘩した時は、勝ちばかりだつた。

つまりは、この敗北こそが織斑一夏という男の人生の中で、最初にして明確な敗北。

「…………」これが、負けか

正直に言つて、無茶苦茶気分が悪い。負けという物がこれほどまでに気分を悪くさせるものだつたとは。こんな物をずっと味わつて居たくはない。

ああ、だから、だからこそ世の中にいる誰もが勝ちを、勝利を曰指して頑張るのだ。敗北を撥ね退け、心地よさを得るために。

「明日から、もつと頑張るとあるか」

だから、今はこの沈鬱な気持ちを煙に乗せて全部吐き出やつ。負けた、敗北したのは確かだが、ならばあとは勝利するだけではないか。敗北の水底に落ちたのなら、勝利へと上り詰めるだけ。やることは決まっている。迷う要素なんてどこにあるというのか。

決意を固めて煙草を吹かす一夏の顔には、確かに悔しさが混じつてはいたが、それでも、その口元には笑みが浮かんでいた。

「落ち込んでいい様ですわね」

そんな一夏の背後から、鈴の鳴る様な声が響く。まるでいつかの焼き直し。違うといふを上げるとするならば、それは配役が全く逆とこうことだらうか。

「当たり前だろ？ 昨日と今日で、もう十一分に落ち込んでたからな」
「残念。せつかくあなたの落ち込んでいる様子を見て笑つてやろうと思いましたのこ」

苦笑を洩らし、肩をすくめるセシリ亞の背後から、新たに一人の人影が加わった。夜の影から豊満な肢体とツインテールが浮かび上がる。

「なんだ？ ハリーにウリ坊も来てたのかよ」

「何だつて……ずいぶんな言い草じゃない」

「ほんとほんと、余裕が無い男の子は嫌われるわよ?」

「もうですわね、あなたにはそんなしおらじこ様子は似合いませんわ」

「同感、アンタ馬鹿なんだから、馬鹿面晒して笑ってる方が似合つてる」

字面だけ見れば暴言としかとらえられない言葉だが、その裏にあるものは判りやすく過ぎるほどに明白で、一夏の口元にもつこつこ苦笑が張り付いた。

「ひつでえ奴ら」

「アンタに染まったのよ」

「朱に交われば、といつことじょうか」

誰もが素直じゃないから「落ち込むな」「元気を出せ」みたいな言葉一つ言いだせない。それでも、言葉ではなく心。セシリ亞の、鈴の、ヒリーの心が一夏を元気づけていた。

「ほんとこひつでえ奴らだな、落ち込む暇一つありやしねえ」

そう漏らした一夏に、鈴がやれやれと言つた表情で、唯一この場にいらない筈からの伝言を伝えた。

「一夏、筈からの伝言よ。落ち込むなんてそんな殊勝な事、お前には似合わない。気持ちが悪いからそんな真似晒すな、つてね

「はつ、もうかよ」

そつけない返事。打が鈴の耳にはその一言こそが一夏の闘志を燃え上がらせているのに気がついた。直接ではなく伝言であったとしても、やはり筈からの叱咤に腑抜けた様を晒すのは、一夏にとっては最大限に我慢ならないことのようだ。

「まんと、ここつりて馬鹿なんだから」

そう漏らした鈴の表情には寂寥感が浮かぶ。この一人にとって、やはり互にこそが一番特別で、一番心を止めているのだから。

「もうよねえ、こここんなにいい女が勢ぞろにしてるのー夏、たら、篠ちゃんにじやつこんすぐるもの」

「癪だけど同意するわエリー。ここつりお互にじやつこんすぐる」

「あらあら、お一人とも嫉妬ですか？」

「うつさい黙れ」

「まあ、女として気になる男の一一番になりたいっていうのは否定しないわよ？」

「ふふつ、可愛らしいですわねお一人とも。とくにウリ坊

ちゃんが」

「うが～つ！！ 頭撫でんなあつ！！」

「え～、だつてこのわざくれ立つた気持ちを癪すにはこれが一番な

のよ」

「そうそう、お前の頭撫でんのすつづく気持ちいいんだよ」

「アンタもしぬれつとあたしの頭撫でんじやないわよつ！！！」

「はあ……癪されますわ」

気付けば鈴の頭は一夏も含めた三人がかりで撫でくつ回され、整えられていた髪型がすぐにもみくちゃにされた。そして撫でられ続けるのと同時に鈴の、頬も完熟したトマトのようになつて真っ赤になつていく。

「いい加減にせんか貴様らああああつーー！」

泡騒と同時、その囲みから抜け出した鈴がここに来る時に持ち込んだビニール袋をまさぐる。そこから取り出されたのは一本の缶。ぶつちやけて言えば缶コーヒーハイだつた。

「もう飲む。あんたを元気づけるために持つてきた奴だけどあたしが飲む」

完全に座った田つきで田を開け、有無を言わせぬ一気飲みしていく鈴。

「ああもう… 飲まなきゃやつにられるかあ…」

まあ、もちろん他の面子がそのままとこりのはありえない。腰をおろして一気飲みを続ける鈴の傍らに腰を下ろし、次々に残りの酒に手を付けていく。

「勿論オレも飲む」

「私もですわ」

ふん、この不良集団

「何言つてゐるウリ坊、お前もだらうが」「アンタニ毒されたりのよ、責任取つねえ

「悪い……オレ、貧乳は趣味じゃない」

「何そんな阿呆なこと心底申し訳なやうに思つてたのやあやあ

「あ、おつ！」

「ええ、私も随分毒されたみたいですね」

つい先ほどまで一夏が抱えていたしんみりとした空気など瞬く間

に吹き飛んで、心底騒がしい空気が流れる。一夏が鈴をからかって、鈴がそれにブチ切れて、エリーとセシリ亞がそれを楽しそうに眺めている。

「 篤はどこに行つたんだ？」

その宴の最中、不意に一夏が呟いた。いつもつるむ面子の中、唯一いないメンバー。篤の居所を気に駆けるが、大方の予想はついていた。

リーグマッチにおいて襲撃を行つた正体不明機、それが自身の胸部から排出し篤に委ねた、人の脳髄が内包されたユニット。あの機体の発言から、学園側でもあのユニットの機能に大方のあたりを付けていた。その下劣非道極まる目的故に、襲撃事件以上の機密レベルで情報管制が敷かれ、今は学園地下の機密ブロックに保管されている。

「……お姫様のところよ」

「ですが、もうあの方は何の反応も見せない、脳死状態に近いと聞きましたが」

無論、人道と倫理を侵さない範囲でのユニットの調査を行つてはいる。ISに、機械的に、物理的に接続されていたために、ある意味で調査そのものは楽に行えた。

その結果は、全くの無反応。接続端子を通じて、人間が外界から刺激を受けた際に神経線維に流す電気信号を模した信号を送つても、あの脳髄は何の反応も見せずに、脳波はフラットのままだった。

そのため、学園側は既にこの脳髄が脳死状態にあると判断していた。機械的に脳細胞だけが生かされた人間の残骸。その行いに学園

教師全員が憤慨を漏らし、そんな行為の贅にされた名も知らぬ彼女を悼んだ。

さりとて軽々しく廃棄処分に出来るほどの代物ではない。何せ外道の行いとはいえ男性でもISに乗れるかもしれない証拠なのだ。今はまだ、学園の底深くに秘しておくしかできなかつた。

そして保管されたあのコニットは、今なお起動させたままであり、想像に絶する無残を行われた彼女の、ある意味墓標の様な存在になつてゐる。襲撃事件が発生し、その後処理に忙殺されている箸の教師たちですら、激務の合間を縫つてそのコニットの前で、思いの弔いを捧げていた。

一夏たちも、それは同じ思いであつたので、教師たちの許可をもらつてそのユニットに弔いを捧げていた。すんなりと許可がもらえたのも、少しでも彼女の魂が癒されるのなら、と思つた学園側の気持ちの表れなのかも知れなかつた。

「やうか……また、あそこへいるのか

宴で得た笑みを消して、苦虫をかみつぶした表情を見せる一夏。鈴もエリーもセシリ亞も、あの行為には憤慨を隠せない。

「　　アイツは、諦めてねえんだろうな

そう、そんな中、簞だけが彼女が生きていると、言葉にはしなくともコニットを見つめる視線に込めていた。五体を奪われ、脳死に至つた彼女を、それでもまだ生きていると。

「……でもっ！　あの状態よ？」

「流石に脳死判定と診断されている以上、の方は“死んで”いる

のでしょ」「

「そうね……篠ちゃんのあれば、思い込みとしか言えない」と細川

口々に否定的な言葉を漏らす二人。篠にはその言葉をすでに伝えているものの、それでも篠は「……それは無理だな」と答えるばかり、正直に言つてその篠の姿を、三人は痛々しいとすら思つていた。

「……だよな、オレもあの子はもう死んでる」と細川

一夏にしても、そのこと自体に異論をはむ気はない。しかし。

「けどよ
オレと篠は違うんだ」

しつかりとした確信を込めて、一夏は言葉を続けた。

「どんなに近くにいてもオレとアイツは他人で、だからこの視点が違う。見ている物が違うんだ。だから、オレに見えていない物がアイツに見えて、聞こえていたって不思議じゃないだろ」「

それは、今更言葉にしなくても当たり前すぎる、不变の事実。

「それにアイツ、幻でラリつてしまつ様な素直な性質じゃねえだろ。捻くれ者だよ」

誇らしげにそうのたまつ一夏。あまりにも自分の事を棚上げにしたその物言いに、三人はそろつて苦笑し「お前が言つた」と唱和し

たのだった。

私の目の前に、醜悪な機械に繋がれた脳髄が浮かぶ。

「あの黒甲冑に、進めてく生かしてやれって言われたけど、どうすればいいんだろうな」

力無い咳きが私の口から漏れる。ああ言わればして、名前も顔も知らぬ君をこうして保護、したのだろうか。これは単に、縛り付ける場所を変えたのではないかという思いがよぎる。

「君は、今も泣いているんだな」

耳を澄ませば、今も君の泣き声が聞こえる。寂しいよ。寒いよ。誰か、抱きしめて、と。

「皆は、君はもう死んでいるって叫び

もうこれは死体だ。だからせめてこの子を悼もう。私たちだけでも、この子の魂が安らいでくれることを祈りう。揃つてみんながそう言つて、でも。

「こんなのはじや、そんなの受け入れられないよな

泣いている子を放つて、素知らぬふりを決め込んで、それで日常に戻れだと？

「

ふざけるな

何で、何でそんな重苦しい物を背負わなきゃならない。私の日常にそんな物が混じる余分なんて無いんだよ。

「だから、絶対いつか、君をそこから救い出して見せる

偽善と独善に満ちた、私の宣誓。誰かの死を背負いたくないから、誰かの悲鳴を背負いたくないから、今の日常が崩れてほしくないから誓う、不実の言葉。

それでも、妥協と諦めを抱えて、満足できるほど私の日常は安くはないんだ。そんな妥協である、諦められる安物の間に、価値なんてないと思うから。

例え子供の我儘、現実を知らぬ餓鬼の言葉と言われようとも、無くしたくない、穢したくないと強く思うのは、私の心の根幹で、搖ぎ無く根付いている想い。

「今は、いつする」としかできないけれど

だから、今の私にできるのはこれくらい。脳髄を満たしたユーチュートに手を回し、皿に満足かもしけないけれど、少しでも君の寒さが和らぐようと、抱きしめた。

暗い。昏い。水底は、今も変わらずにある。私も、今も変わらず、ずっとここにいる。

「 ほ う き ？」

それでも、今感じているこの気持ちとは、何なのだろうか。

「あ、なんだか、ちごく癪かしいな。何だつただろう、この気持ち。
ちは。」

「あー、安心できて。すー、安心げるこの気持ち。」

「抱きしめてくれてるのは、あなた？」

「ああそうだ、暖かい、だ。ここはずつと寒いけれど、今、誰かが
私を抱きしめてくれてると、何も感じない中でも、そう理解でき
た。」

「これがたとえ幻だったとしても、それでも、今私は癪さを感じて
いない。」

『だから、絶対いつか、君をそこから救い出して
見せる』

「それも、幻聴のかもしだいけれど、待っているから、私、あ
なたが来てくれるのを。」

私は、今よひやへ、この水底の中で、希望といつ物を感じる」と
ができた。

「だから、いつか会おひくな、ほひわ」

「うん、だから今は眠ひつ、こつかきつと、ほつわに会えると想ひつ
から。

「 素晴らしい」

ああ、何といつ輝きだらうか。ここまで弄ばれ、翻られ、人間としての尊厳を地に落とされ、想像を絶する地獄に叩き落とされてもなお、君は美しい。

その心が、その思ひが、世に存在するどんな宝石よりも美しいと断言できる。自身をこんな境遇に追いやった下劣な父親を憎みもせず、何も無い無色の地獄に突き落とされてもなお、その心は壊れずにいる。

「掛け値なしに称賛しよひ。君のその心は、その思ひは、ああ、なんて美しい」

我が妹と同じように、ありふれた日常こそを希い、そして恋焦がれる。そんな状況にあってもなお、その願いへ輝きへは色を失っていない。

「ならば、ああならば、報いなければいけないだろう。君はその輝きで、私を魅せてくれた。ならば、それに見合ひ報酬ぐらい用意せねばいけないだろうな」

それに、我が妹もそれを願つてゐるだろう。ああ、確かに我が妹の器は大きいとは言えない。しかし、深いのだ。その中にある、日常を、輝きを、決して取りこぼさないように、と。

「君はもう、その中に入つてゐるのだよ。故に誓おう、私と我が妹とで救い出して見せよう、宝石よ」

悲劇のあとだからこそ、その後に相応しいのは問答無用のハッピーエンド。『都合主義の神様くデウスエクスマキナ』を持ち出してでも、流した涙に相応な輝きを見ないことは、おさまりがつかないだろう。

「幸いにして、私はどうやら世間一般では大天災などと呼ばれているようでね、からくり仕掛けの神様を氣取るぐらい造作もないことなのだよ」

友人からは「お前はあまり出しゃばるな、何もかもが無茶苦茶になる」と言われたこの身だが、こんな時ぐらいは全靈で挑んでも構わないだろう。

「何せ、人助けなのだからね」

第八話（後書き）

＜あとがき＞

水銀の口調つて難しいと痛感しました。うん、あんなウザさを良く書き切ると、原作にはほとほと感心し直しました。そしてこの話における束さんは、うざいけどいい人。いい人だけうざいを目標にしています。故に今回の決意も善意百パーセントです。

「 何？ IJの武器の山」

アリーナにうずたかく積まれたコンテナの山。その中にあるのは IJの各種武装。送り主は世界各国の IJ関連企業であり、しかもそれ全てがただ一人の人物に向けて贈られたものである。

「何つて？ オレが使うに決まつてんだる。流石に武装が大口径ハンドガンだけつつうのは火力不足だと思つてよ、世界各国の企業あてにオレが武装を探してるつて情報を流したら、一日でこの通りだよ」

そう答える一夏の表情には、先の一戦で無様な敗北を晒したことへの悔しさが滲んでいる。無論それは落ち込むものではなく、その屈辱をばねにして闘志に変える悔しさだった。

「それにしてもいろんな武器があるわねえ」

「え、と？ IJ用のクレイモア爆弾に、液体窒素を封入した凍結弾頭、熱伝振動式スパイクを取り付けた特殊チエーンアンカー、真っ当な武器も多いけど、際物の武器も多いな」

「一夏さんにはそれがぴつたりでしょうに、…………馬鹿らしい小細工が得意な方ですから」

「ああ、あのシールストレミングの缶詰を使つたんだっけ？ セシリ亞との試合で」

「まあ、世の中にはこんな馬鹿もいるのだと得難い教訓も得られたので、いい体験ではありましたわ」

そんな一夏がここにある多種多様な武器を使って、どんな小細工をしかけるのか、場にいた全員が恐れと興味を混ぜ合わせた表情を見せていた。

「おう、また負けるのは嫌だからな。精々小細工を考えるさ」

そう言つた一夏の笑みには、それはもうこやりしこ笑みが浮かんでいた。

「…………ほんと楽しそうにしてるわね」

「絶対また馬鹿なこと考えてるんだろ」

「しかも一夏の使う機体つて拡張領域の多いくラファール・リヴィアイブ」だからね、それだけで取れる戦術の幅が多いもの

「そこにこの際物武装の数々が加わるわけですか…………」

そこに鈴が、ひとつ重要なことを口にする。いくら際物の武装を使うとはいえ、そういう物をいきなり実戦に使うわけにもいかないだろ。仲間内の模擬戦で事前のテストを行つのは必然。

「ねえ、誰がその際物武装のテスト役になるの？」

そして、そういうつたテストをするのであれば、対象は一人に絞り込むべきだろ。まずは一対一で使用し、実際の使用感覚を掴んでいく。それは実に当たり前のことであり、実に筋の通つた考え方だ。

「セシリ亞、お願ひね」

「ヒリー、あなたこそが適任ですわよ」

「やつぱりここは一夏と一番長く戦つてきた筹りやんの出番よね」

「一夏にちょっとかいかけられるのはウリ坊だと、ずっと昔から決まつてゐるんだ」

実際に息のあつた押し付け合いだつた。まともな武器、まともな使用方法、まともな使用者であれば、四人にも否はない。しかしながら、眼前で不敵な笑みを浮かべる一夏にはそのどれもが当てはまらない。

四人の間に電流が走り、誰が一夏の生贊になるかをなすりつけ合う。ここで全員で逃げるという発想が無い当たり、結構なお人よしだろう。

そんな四人の足元に転がりこむ、黒光りする円筒形の物体。

「「「「…………へ！？」「」」

瞬間、轟音と閃光がまき散らされる。ISのハイパー・センサーですらがその轟音と閃光に対し処理能力を飽和させ、一時的に視界と聴覚を封じられる。

「へえ、流石だな。ISにも効くフラッシュ・グレネードは」

感心の体でそう呟く一夏。押し付け合いに夢中になつていたところによる完璧な不意打ち、こういう物のテストをするならこういう状況はまさにうつてつけて、つまりは押し付け合ひどころか、早速皆が実験台にさせられたのだ。

「何やつとんじやああああつ……」

「不意打ちにきまつてんだる。つーかそれ以外にどう見えるんだよ

「ああそりだな、不意打ちだな。というわけで斬る」

真っ先に復帰したのは、常日頃から一夏の奇行に巻き込まれ続けたいた鈴と篠だ。〈双天牙月〉と日本刀型のブレードが一夏を挟みこむように襲いかかる。即座にその二つの刃の锷元を狙い撃つた一夏のハンドガンが、斬撃の速度を鈍らせ脱出に成功する。

どうにか脱出に成功した一夏は、次いで先のフラッシュショグレネードに酷似した形状に円筒の物体を放り投げる。ただし吐き出したのは炸薬によって加速されたベアリング弾。金属球のシャワーが牽制となつて、追撃を狙おうとしていたエリーとセシリ亞の機先を削ぐ。

「相変わらず無駄に器用ですわねっ！！ 今日は必ずあなたの顔面にミサイルとレーザーをぶち込んで差し上げますっ！！」

「私もちょっとと鶏冠に来たかなあ」

「おおう、怖い怖い」

そして視線を完璧にセシリ亞とエリーに向けつつ、右腕に装着したヒートスパイクチーンを鈴に発射する。いくらエリが全方位視界を得ているとはいえ、今まで完全に視線と連動させない攻撃に、鈴の反応が一瞬遅れヒートスパイクチーンに機体を絡め取られる。ある意味一夏らしい器用な攻撃によって鈴は振り回され、セシリ亞とエリーに突撃させられる。

「『めん遊ばせ、ウリ坊ちゃん』
「『めんねえ、ウリ坊ちゃん』」

まあ、そんなことで鈴に遠慮する優しさはこの場にいる誰もが失っている。〈ブルー・ティアーズ〉のミサイルと〈ミステリアス・レイディ〉のランス内蔵四連装機関砲が火を噴き、どでかいモーニングスターと化した鈴を撃ち落とす。

「ゼンツゼンツゼンツ 気持ちが」もつてなああああいっ……」

「うわあ、ひでえ。全然容赦ないなお前ひ」

完全に自分の所業を棚上げした一夏の声に向かって、その戯けた口を塞ぐように三人からの攻撃が飛来する。

「「「お前が言つた……」」

「だつてオレあんな形だけの謝罪なんてしないぜ?」

まあ確かに、先の不意打ちや口常の奇行について、一夏が謝ることなんてまずない。その点でいえば、その言葉は嘘を言つていらないだろう。

「皆、今日の模擬戦は一夏対皆、とこいつ形がいいと思つんだ。

ぶつちやけリンチしてほいりあ」

「賛成ですわ」

「うーん、今日ばかりは篠ちやんに同意するわ」

「異論? あるわけないでしょ。むしろ断る理由なんてある筈ないじゃない」

篠の意見に一切反論は起らなかつた。篠のブレードが、鈴のく双天牙月^ハが、セシリ亞のくスター・ライト^{ムク?}^ハが、エリーのランス^ハ蒼流旋^ハが、そろつて一夏に狙いを定める。

「うわあ、きつこなあ」

そつまやく一夏の顔には、それでも期待の色が浮かぶ。これ位やつてこそ身になるという思いがあるのだろう。

そして始まる一方的な蹂躪劇 とこいとこにはならなかつた。

何せ器用さと悪知恵にかけては突出している一夏である。四人の予想通り数々の奇手奇策を使用して、さんざん四人を手こずらせたのだつた。

翌日の朝、教室の中には昨日の模擬戦の痛みで顔をしかめ、机に突つ伏している一夏の姿があつた。無論そんな一夏の様子に同情の眼差しを向ける者はいない。筹もセシリ亞も氷のように冷たい視線で一夏を見下していた。

「あ〜いてえ、おまえらほんとに遠慮ねえのな」

「お前が手こずらせてくれたからな。昨日だけであれから、ガドリング、ハンドミサイルユニット、パイルバンカー、ショットガン、試作レーザーライフル、大型グレネードキヤノン、焼夷榴弾、拳銃の果てに戦艦の主砲を転用した超大型キヤノン砲まで持ち出すし」「しゃあねえだろ、ある奴をまずは使ってみなきや」

「しかもそれが奇想天外な使用方法で使われるのですから、たまたまものではありますんでしたわ。焼夷榴弾と液体窒素弾頭で水蒸気爆発を起こすわ、発射したミサイルをチエーンで絡め取つて無理矢理軌道変更するわ、非常にあなたらしい戦いでしたわ」

「褒めてくれてありがとう」

「ええ、あなたらしいお馬鹿な戦い方でしたわ」

とはいものの、皆が手こずつたのは何も奇手奇策のせいばかりではない。入学してからこれまで、ほぼ毎日の一夏の様に行われている模擬戦（しかも相手は代表候補生一人に国家代表一人、おまけに三人ともが専用機持ち）、それに加え自主練習も欠かさず行つている。元から器用で要領のいい一夏だ。今では代表候補生の目から見て

も一夏の技量はそれなりと言えるものになつてきている。勿論算もだ。

しかも天性の煽り上手で他人のリズムを崩すのが抜群にうまい。昔からの幼馴染である鈴ですらいよいよ言葉であしらわれている現状、他の面子もいい様にリズムを崩されっぱなしだ。

統括すれば、無茶苦茶嫌らしい戦いぶりなのだ、一夏の戦いは。少なくとも最初は一夏対皆の戦いが、まずは貧乳ネタで怒りの矛先が捻じ曲げられた鈴が一夏の側に付き、過田のキスをネタにからかわれたエリーが顔を真っ赤にさせて、言葉攻めで戦闘不能になるぐらいには。

「あの時のウリ坊は本気で怖かったぞ」

「ええ、執拗に胸を切り落とそうと突撃を掛けてきましたものね」「ああ、あれ最高だつたな。『その胸よこせ〜〜〜』ってマジ叫びだつたし」

「というかエリーに何を囁いてましたの？　あの後からずっとぼうつとしてましたし」

「別に、大したことは言つてないぜ。あの時の可愛いエリーがもう一度見たいなあって言つただけ」

「「あの時？」」

「それは秘密」

興味心から事の真相を聞き出そうとした一人だったが、それも教室内で新たに響く声に止められた。

「口を閉じろ。今からは授業時間だ」

その言葉の通り、開始のチャイムに僅かのずれも無く教室に入ってきた千冬の、普通の声量だが威厳たっぷりの言葉によつて、教室内の喧騒がピタリとやんだ。

その様子を見渡し、少しばかり満足げな感情を目元に乗せた千冬は、一瞬教室の入り口に目をやつた後に言葉を発した。

「今日から転校生が一人、このクラスにやつてくる。 入つてこいボーザヴィッシュ！」

教室内の面々が、その言葉に興味心身な視線で入り口を注視する。教室の扉が引かれ、件の人物が入室した。体格は小柄と言つていいだろう。刃の輝きを想起させる銀色の髪を腰あたりまで伸ばし、左目は眼帯で覆つていて、身に纏つ雾囲気は他の生徒と一線を画すほどに硬く、とげとげしいものだ。その銀の髪と相まって、まるでナイフの様だと評せる人物だった。

「自己紹介をしろ、ボーザヴィッシュ！」

「了解しました、教官」

「……もうお前の教官ではない。お前は学生で私は教師だからな。呼ぶなら織斑先生と呼べ」

「了解しました。織斑先生」

やや疲れたような表情を見せる千冬。その横を件の転校生　ボーザヴィッシュ　が進みでて、自己紹介を始めた。

「ラウラ・ボーザヴィッシュだ」

非常に簡潔で、無味乾燥な自己紹介をだ。明らかにそれは他の生徒に対する無関心の表れで、字面だけは自己紹介の体を成していたものの、その言葉は全く自己紹介ではなかった。

「あの……ボーテヴィッシュさん。それだけですか？」
「以上です」

見かねた真耶が言葉を書けるも、ラウラの返答はその気遣いをバッサリ切って捨てる物だった。

直後、教室内を見渡したラウラの視線が一点で止まる。クラス唯一の男子制服の着用者、織斑一夏へと、そのままラウラは一夏の座る席の前にまで歩み寄り、おもむろに腕を振り上げた。

「貴様がつ」

そのまま勢いよく振り下ろされる腕。無論一夏がそのまま平手打ちを喰らつなどという可愛げがある筈も無く、上体を逸らしてその一撃を避ける。

「…………おいおい、オレ何かしたか？ アンタに」「認めない。私はお前が教官の弟だなどと認めないつ

口調は静かでも、はちきれんばかりの怒りを滲ませるラウラに対し、一夏の胸中に去来するのは「ああ、またか」といつ、嘲りと諦めが混じった物だった。

「…………なるほど、なるほどねえ、お前もそういう類か木偶人形。気持ちが悪いから寄つてくんな」

一夏が吐き出した言葉には、たつぱりの嘲笑と侮蔑が乗っていた。

ふざけた口調でも、いや、だから」や一夏がラウラを心底そつ認識していることが分かる言葉だった。

「貴様あつ……」

激昂するラウラ。一夏の言葉を額面どおり受け取り、且つ自身にとつて許せない存在からの言葉は、瞬く間にその顔を朱に染めた。

「教官の栄光を汚した存在がよくもつ……」

対して一夏の表情は冷たい無表情だ。先のラウラの自己紹介と同じく、ラウラに対し何の期待も関心も寄せていない。その一夏の無感情な瞳がラウラを射抜く。

「じゃあお前、どいつ存在ならば認められるんだ?」

「な……こ……」

「否定をすることは言い換えれば、認めるための指針がなきやいけないはずだろ? だからお前、どいつ存在だったら認められるんだよ」

そう囁きながらも、そんなもの在りはしないと一夏は思つている。これはただの子供の癪癩じみた感情的なものだ。理由? そんなものは「とにかくこいつが気に入らない」の一言にきまつている。ともかく先に否定ありきだから、後付けの理屈すら在りはしない。勿論、そう思うに至つた背景はあるだろうが、そこで思考停止している馬鹿の言い分だ。これまでの一夏の人生で幾度となく出会つた十把一絡げの小物。少なくとも一夏は、現時点のラウラをそつ認識していた。

「もう一度言つぜ。寄つてくんぬ気持ちが悪い。腐つて見えるんだ

よお前は

出合つて数分もたつていなにもかかわらず、一夏とラウラの関係は修復不可能なほどに拗れ、一触即発の空気が流れる。

「やはり貴様は……！」とつぶす

「はつ、やつて見せりや」

「まわらぬことではないかもしけないが、今の時間帯はRRの時間である。

「よくもまあ、そこまでべらべらと、

いい度胸だ

糞餓鬼ども

つまりは、怒れる千冬大明神の目の前で、喧嘩一歩手前の空気を展開していたのだ。

千冬の声で停止した一人の頭に、千冬の腕が伸びてその頭を鷲掴みにする。そしてそのまま一人の頭の距離を強制的に零にした。密着する顔と顔、こう書くとどことなくロマンチックな響きがあるが、先に密着したのは口ではなく額。「ゴチン」と盛大な音を鳴らして強制的な頭突きをせられたラウラと一夏はそろつて涙目だ。

「くうつー？」

「ぐおつー？」

「まあよからう。糞餓鬼どもの矯正も教師の仕事の内だ」

そう言いながら、千冬はそのまま一人の頭を鷲掴みしながら持ち上げられる。片手だけで人が持ち上がる光景、小柄なラウラはとも

かく、それなりに鍛えられた一夏の体は相応の体重があり、しかも同時に一人を持ち上げている光景にクラスにいる全員が言葉を無くす。

「頭を冷やしてこいつ……」

一人を持ち上げたまま、千冬は教室の窓の近くに行く。そしてそのまま一人を窓の外へと放り投げた。

「「くつー?」」

アイアンクローの激痛から解放されたと思ったら、何の足場も無い空中に放り出され、共に間抜けな表情を晒す。まあ、こんなことをされれば誰だって状況の変化に追いつかないだろう。

「「「「「「「落ちたああああつー?」」」」」」」

「馬鹿者、落したんだ」

その表情のまま見えなくなつた一人を認識してようやく、クラスにいる全員が驚愕の叫びを発し、千冬がそれを的外れな言葉で訂正する。

「いやいや、何を平然としてるんですか織斑先生つー?」
「あやあやあやあやかましいから黙らせただけでしょ?」何か問題でも?」

真耶を泡を繰つて千冬の行為を非難するが、千冬の態度はどこ吹く風と言つた感じで平然としていた。

「大ありますよつ！！」

「何も無いでしょうが、あの二人は専用機持ちだぞ」

「…………あつ」

真耶がそのことによつやく思い至つたと同時、窓の外から一人が戻ってきた。一夏はくラフアール・リヴィアイブ、ラウラは漆黒のISを纏い、精神的に消耗したのか妙に疲れた表情を見せていた。

「…………こんの糞姉貴」

「貴様…………まだ言うか……」

「専用機があるからつて窓の外から人放り落とす奴なんて糞姉貴で十分だろうが」

「…………」

流石のラウラも、千冬の行為には少々物申したい気分なのか、一夏の言葉に沈黙しか返さなかつた。

「何やつてる、さつさと席に戻らんか」

そんな千冬の言葉に一人ができたのは、言葉通りにさつさと席に戻ることだけだつた。

「では今からISを使っての実技訓練を行つ……！」

千冬のよく通る声がアリーナに響き、一組と一組の生徒が集結していた。今日からはISを使った本格的な実技訓練ということもあり、一様に緊張した面持ちを見せていた。…………少なからず例外もい

たが。

「実技訓練、ねえ」

「まあ、私たちは既にやりまくつているからな」

「私とウリ坊ちゃんは専用機持ちですから今さらです」

「一夏と篠も一般生徒なら教えられるぐらいには技量が上がっているしね」

確かに毎日の様に模擬戦を行つてゐる一夏たちにとっては今更な話だらう。それを見越してか千冬が更に言葉を続ける。

「ではまず、専用機持ちに戦闘を実演してもうおつか、余裕もあるみたいだしな」

「どの組み合わせでやるのですか織斑先生?」

「まあ慌てるな、相手がもうすぐやつてくる」

その言葉に全員が疑問符を浮かべ、同時にアリーナの中央に件の対戦相手がやつてきた。

「準備は万端か、山田先生」

「はい、OKですよ」

一夏と同じくデュノア社製の「ラファール・リヴァイブ」に身を包んだ真耶が、アサルトライフルを構えて闘志を滾らせる。普段の頼りなさげな様子とは違つその様子に、場にいた物が全員面食らつた表情を見せる。

「ふむ、そうなると相手は誰にすべきか……織斑!! ボーデヴイッヒ!! お前らが揉んでもうえ」

その選択に誰よりも速く不快感を示したのは、指名された当人たちだつた。しかし二人ともに「一対一」という、傍から見れば舐められている様な条件を突きつけられたことに不快感を示しているのではない。仮にもEIS学園の教師である。それぐらいを鼻歌交じりに成せる技量はあるだろうと思つてゐる。

不快感を示してゐるのはその人選。互いに「コイツとは慣れ合いたくない」という思いが、その顔にありありと浮かんでいた。

とはいえそれは千冬の思惑通りである。この「一対一」の戦闘実演は連携がとれない者たちがどれほど脆いかを鮮明に示すものであり、見るに耐える戦闘を行えるほどの技量の持ち主で、連携が取れない組み合わせが一夏とラウラしかなかつたためだ。

ラウラ以外の三人は日夜模擬戦を繰り返してゐるし、その様子は千冬もある程度目を通してゐる。連携をとる上で重要な呼吸の合わせ方などいまさら言つまでも無くできている。

そうなると二人組のうちラウラが真っ先に上がるのに、ラウラと一番連携が取れない組み合わせとして一夏が選ばれた。

「マジかよ」

「命令とあれば、否はありません」

「ならばさつとEISを展開して空に上がれっ……」

千冬の劇に促され、一夏とラウラは不承不承といった感じでEISを展開し、空へと急速上昇する。

「足を引っ張るなよ、織斑一夏」

「はつ、知るか」

「あの～、そろそろいいですか？」

気弱な声とは裏腹に、真耶は即座にアサルトライフル一挺を展開し銃撃を一人に加える。その射線は一人が散開するのを防ぐような

位置取りで行われ、思う様な回避機動をとらせないための物だ。

「うつわ容赦ねえなあ 真耶つち」

「真耶つちでなんですか！？」「

「ふん」

相も変わらずふざけた口調のままにシールドを開け、弾幕を力任せに突破するいくらアサルトライフルの弾幕といつても、IS戦においては牽制が主目的の兵装である。威力的に決め手が欠けるために、こういった力づくの突破は乱暴なようすでいて実に堅実だ。

「お前せこいな

「合理的と言え」

そしてラウリはとくに、そんな一夏を楯にして悠々と弾幕を抜けていた。そして間合いをとりなおした後、真耶から流れを引き戻すために自機のIS-2シコヴァルツェア・レーゲンに搭載されているワイヤーブレードを射出、真耶のラファール・リヴァイブを囲むように展開する。

その挙動は実に滑らかで、実に六本のワイヤーブレードがそれぞれ生きた蛇の様に真耶へと襲いかかる。

おまけに、それに合わせる様に一夏がお得意の銃弾ビリヤードで、更に真耶が回避できるための隙間を奪っていく。

「流石ですねつ！… でもつ」

無論その程度で落とせるほど真耶は間抜けではない。自機の進行方向を塞ぐよにして展開するワイヤーブレードに対しハンドグレンードを投擲。その爆風でワイヤーブレードの動きを一瞬鈍らせる。そこに對し瞬時加速を発動。あっさりと遠距離戦の間合いへと引

き離し、即座にスナイパーライフルを展開。速度と精度を兼ね備えた照準の狙撃で、一夏とラウラを寄せ付けない。

「くつ！？ ならば」ちらもつ「

ラウラは自機に搭載されているレールカノンで撃ち合いを選択する。電磁加速された団体が真耶の至近を駆け抜けるが、これだけの狙撃戦を開いておきながら真耶の機動に翳りは無く、射線を見切った最低限の移動でレールカノンを避け切る。

「ちいっ、狙撃はそれほど得意じやないんだよな」

ぼやく一夏。故に選択した手段はハンドミサイルコニットを展開しての飽和攻撃。向こうの対処能力を超える攻撃を叩きこむことだつた。表面のカバーが外れ、その中から多数のマイクロミサイルが白煙を噴出させながら真耶に襲いかかる。

「…………予想外に連携が取れていますね。いえ、これは単に互いを頼りにしてないだけですか」

つまりは一夏とラウラの両名ともに、手持ちの札の中での最善手を選び取り、結果連携が取れているように見えているだけだ。ラウラは自身の持つ遠距離砲撃戦能力で、一夏はそういうスキルが無いために武装頼りの飽和攻撃。とはいってもそれは悪手ではない。方向性の違う二種類の攻撃は結果的に対応の難度を上げていた。

「ですが、そんなものではやられません！！」

スナイパーライフルを収納し、即座にアサルトライフルを展開する。秒に満たない間に行われた武装の切り替えは高速切替くラビット

ト・スイッチ」と呼ばれる高等技能であり、それを見た一夏の瞳に感心の色が浮かぶ。

「へえ、あそこまで速くできるのか」

そうして一夏の間に、断続的に弾丸を吐き出すアサルトライフルが一夏の撃つたミサイルを撃ち落とし、ラウラの放ったレールカノンの砲撃は真耶自身の精妙な機動によつてすべて避け切られていた。射撃を行ながらも手放すことの無い機動の制御は、まさに教師としての手本に相応しいものだ。その基本的ながらも高レベルの動きを見て、ラウラは射撃戦では埒が明かないと判断。ミサイルの爆炎に紛れて接近を掛ける。

それは一夏も同じ判断 といつよりも一夏自身が近・中距離戦を得手としているためだろう。今度はラウラを楯にするような位置取りで真耶に接近を仕掛ける。そして自身が一番得手としている武装であるハンドガンを両手に展開する。

「レスト・イン・ペース なんてな」

茶目っ氣を滲ませながらも一夏はそのままハンドガンを連射する。ラウラの背後で火を噴ぐ一挺の銃口。狙い定めるはラウラ越しに位置する真耶。しかしてその弾丸はラウラに当たることは無く真耶に襲いかかる。あらぬ方向に打ちだされた幾多の銃弾は、空中で弾丸同士衝突し、半数はあらぬ方向に飛んで行き、もう半数は真耶に狙いを定める。

完全な死角からの不意打ち。常道と常識を彼方に置き去りにしたその魔弾。

「すごいですねえ、織斑君」

しかしその魔弾は、更なる魔弾に迎撃された。真耶の放つアサルトライフルの弾丸が、一夏の放つ魔弾を迎撃、更にはその矛先をラウラに向けることに成功していた。

「なつー？ くわ」

「……嘘だろ？」

「嘘じやないです。マジですよ織斑君。君のこれちょっと真似したかつたんですよねえ」

流石にこんな常識外れを常識外れで迎撃されれば、ラウラも反応すらできずに銃撃をまともに食らってしまう。救いといえば一度の反射を繰り返し、威力がかなり削られていたことだらうが。

それでも突撃の足が鈍り、隙を晒してしまつ。そこでラウラはワイヤーブレードを射出。

「 テメエー！」

「ふん、役立たずを有効活用してやるだけだ」

ただしその射出先は眼前の真耶ではなく、後方にはいる一夏のくわファール・リヴィアイブ^ヘ。ワイヤーで完全に絡め取られた一夏を、ラウラは真耶の上を抜ける様にして加速する。

「きやあつー！」

「ぐおつーー 悪いね真耶つち

絡め取られた一夏がそのまま真耶に対してぶつけられ、それを見たラウラはそのまま真耶も絡め取つとする。

「やつはさせません……」

それより先に真耶の腕がワイヤーブレードを纏めて鷲掴み、絡めて縛ろうとしたラウラを逆に引っ張りこむ。しかしそれでもラウラに起こったのは僅かな体勢のずれ。だがその僅かな隙に真耶はラウラに対して銃撃を放つ。しかもその狙つた先はくシユヴァルツェア・レーゲンへのレールカノンの砲口だ。

「しまつた！？」

大口径故に大きく穴のあいたそこに放り込まれた弾丸は、レールカノンに大きな爆発を起こし、その爆風でラウラの体が大きく揺さぶられる。

「お返しですボーテヴィッヒさん！？」
「オレは物かつ！？」

そこに真耶が未だワイヤーブレードに絡め取られている一夏をぶつけ、二人諸共に吹き飛ばす。

「二人ともこれから要精進ですよ」

そんな言葉と共に真耶が放り投げたグレネードの大爆発が、一夏とラウラを揃つて戦闘不能にしたのだった。

第九話（後書き）

＜あとがき＞

いやあ、マッキーの人気も高いけど、ニートの人気も高いなあ。
そういうマッキーはいつ再登場させようかな。今度はマジで殺す気
満々になるけどね。

IS学園の生徒会室で私は私専属の使用人である布仏虚から、あの正体不明機に関する現時点での調査報告を受けていた。

「あの脳髄が収められたコニーチトに関しては、そもそも分解調査すらできない現状ですので殆ど何もわかつておりませんが、それでもわかつている接続端末の形状からしてフランスのデュノア社製の物が多く使われています。しかし、そのいずれもがデュノア社がライセンス契約を結んで世界各国に流出させてている物ですから、追及の手掛かりとはなりませんね」

虚の理知的な輝きを持つ瞳が、メガネのレンズの奥で疲れた様な色を滲ませる。

「脳髄の身元に関しては、何もわかつていいないのよね?」

「ええ、脳細胞が一欠けらでも採取できればDNA鑑定ぐらいはできるのですが、教師側からの猛反発が起こりますね」

「使用目的から鑑みて、わかつてているのは女性ぐらいか……」

「確か、篠ノ之篠さん……でしたが、の方だけは彼女が未だ生きているとおっしゃられているんですよね」

「そうみたいね。あの時の会話記録を見る限り、あの正体不明機もだからこそ篠ちゃんにあのコニーチトを託したみたいだし。篠ちゃんがあの子から鮮明に話を聞き出せれば調査も進むとは思つわ」

純粹にあの子を救おうと思つてはいる篠ちゃんに対し、打算的な自分の思考が惨めに感じるが、それでもこれは自分の役目だと言い聞かせる。まあ、篠ちゃんも、自分のこの意思は単なる打算と言つていたけどね。自分の目の前で泣かれっぱなし嫌だから、のどこが

打算なかしう。ものすついぐく青臭い感情だと思つけど。

「フフツ」

「どうされました？ お嬢様」

「やっぱり後輩つて可愛いものだなあ、とか思つちやつたの」

「可愛い後輩ですか？」

あの子を毎日のように見舞いに行つてゐる篠ちやんに、どうしてそこまでするのか尋ねた時の事を思い出して、微かに笑みが漏れた。口では自虐するような言い方だったけど、本人はあれで隠し通したつもりなのかしう。

ウリ坊ちゃんが篠ちやんの事、カツコ付けたがりの馬鹿、大人ぶつてゐ癖に感情第一で動く奴つて言つていたわね。

「それで？ 」のゴニシトの情報はEU委員会に上げてはいるのよね

「ええ、存在を秘匿することは即時可決されたのですが、その後の処遇については紛糾していいる様です」

「一応国際的な中立を謳つてはいるけどねえ、所詮は各国から派遣された委員によるパワーゲームでしかないし」

「ええ、ですがその中でも欧州の各国家の反応がきこちない」という報告が

「欧洲の？」

「はい、具体的にいえば欧洲防衛計画イグニッショソ・プランの主要参加国の反応が」

「…………それつて勿論フランスも入つてゐるわよね」

「お嬢様はあれが、国家レベルでの計画の元に作られた、と？」

「HJは女性しか動かせない。この不文律を崩そつとするにはそこの非合法組織には荷が勝ちすぎる。国家レベルの財力・技術力

が無ければ難しいだろ？ 何せ中枢であるIHSコアが未だ解析不可能な現代のオーパーツだ。

「そう考えるほうが、筋は通ると思つ」

「ではあの機体はフランス政府が？」

「でもねえ、このスキヤンダルは大きすぎる。万が一露見すれば確実に政権がひっくり返るわよ」

そう、もしこの一件にどこかの国家が一枚かんでいたとして、こんなハイリスク・ハイリターンの方法をとるだろ？ こんな博打的な手段を選択するほど、今はどこかの国家も軍事的に逼迫していいはずだ。

となると、国家レベルの関与だとしても、国家全体では動いていない？ 現場レベルでの暴走？ けどあの正体不明機を見る限り、相応の結果は残しているのは間違いない。非合法研究とはいえどこの国もそのデータを欲しがるはずだ。

「もしかして、対応が決まつていないのでしれないわね」

「……先ほど言った国が、ですか？」

「うんそう、この一件に対して、切り捨てるか、それとも抱え込むか……」

「確かに、今現在どの国でもIHSの登場による女尊男卑問題の対応に苦慮していますからね。それを解決できるかも知れないとなると、どの国も喉から手が出るほどに欲しい筈です」

IHS学園はIHS委員会と同じく国際的な中立機関ではある。けれども、委員会と同じくそんな建前は有名無実と化している現状、委員会からあのユーニットの引き渡し等の要求があれば、こちらに断るための法的根拠はない。

「更識櫃無としては、無用な反抗なんてするべきではないとわかつてゐるんだけどね」

漏れ出した言葉は、實に今更なことだった。更識家がこのHIS学園に私を送り込み、裏から色々と手をまわしている理由は、学園で巻き起こる諸々の厄介事の累を日本に及ぼせないため。

ならば、あのゴーットに関しては不干涉が一番だ。たとえあの子が更に辱められることになるうとも、安定を保つための犠牲だと言い切つて、氷の仮面を張り付けてそのままうべきだ。

「わかつてゐる。わかつてゐるんだけどなあ……」

素筋を伸ばし、胸の内の淀んだ物を吐き出すようにそんな言葉を吐き出した。更識櫃無としては、確かにそうだ。

けれども、篠ちゃんや、一夏や、ウリ坊ちゃんや、セシリシアちゃんの友達である私はどうなんだろうか。

「Hリーとしては、いやだなあ」

「ふふふ、Hリーですか？ 確かお嬢様が昔好きだった漫画のキャラクターでしたね」

ああ、そういうや虚はそのこと知つていたわね。しまつた、失敗だつたわ。虚の目の前でそんなこと言つなんて。

ああ、なんか私に向ける視線がすつごく微笑ましい、というか生温かい氣がする。言葉にしなくても「大人ぶついていてもまだまだ可愛らしいですね、お嬢様」って視線で言つているわ。

「いいじゃない、楯無つて響きよりもエリーつて響きの方が好きなんだから」

「いいと思いますよ私は、友達にあだ名で呼ばれるのは至極健全なことだと思います」

そんな生温かい空氣の中、私たちは仕事をこなしていく。あのコニットに關することだけではなく、襲撃事件に対する後始末や、それでこっちが混乱してるだろうと甘い期待を抱いて、ちよつかいを掛けたる連中への対処とか、やるべき事は数多くある。

「 ょおエリー、差し入れ持つて來たぜ」

そんな中、至極自然に、まるで自分の部屋に入るみたいな気軽さで客がやってきた。その手には瓶とコップが握られてくる。その瓶はどこからどう見ても酒瓶で、そんなものを平然とこの学園内に持ち込む人物など一人しかいない。

「ワイン？」

「おう、安酒だけどな。あれやこれやの厄介事がたまつてゐるだらうから、せめての心配りつて奴だよ」

「ほんと、一夏つてまめよね」

「あつたりまえだろ、オレはどーぞの捻くれ者とは違つたのさ」

「ふふつ、まあいいわ、ありがたく頂戴する」

「あの.....お一人とも?」

「何?」

「どうしてそう平然と飲酒の事を話し合つてゐるんですか。お一人ともまだ学生ですよーーー！」

私と一夏のノリに虚が堪え切れずに声を荒げる。他の皆だと最早突っ込みすらないから新鮮な感じだ。うん、私相当に毒されてるなあ、一夏に。

「お？ アンタも一緒に飲むかい？」

「あ、それ私も気になるわねえ、虚が酒飲むとどんだけ乱れるのか気になるし」

「わかるわかる、酒飲んで内面さらけ出せのって面白いんだよな」

「というわけで今日は虚も飲む事、これは更識家当主としての命令よ

「職権乱用過ぎますお嬢様つ！…」

「職権は乱用してこそでしょ？」

「違いますつ！…」

「じゃあオレもう一つコップを持つてくれるわ」

「頼むわねえ、一夏」

「OK任せとけ、ついでにつまみも持つてくれるぞ」

一夏との馬鹿なノリの会話。でも、だからこそ私の内の溜まった鬱屈とした物を払い落してくれる様な感じがしていた。そういうや私つて、こんな馬鹿なノリに付き合つてくれる友達つて一夏が初めてかもしけない。

更識家つて黴臭いとはいえ権威だけはあるし、身近にいたのつてそういうことをまず念頭に置いている人ばかりだったし、虚はあくまで主と使用者というスタンスを崩そうとしないし。

あの日、一夏に接触したのは、何かに付け耳目を集めの存在になつた一夏を護衛するには親しくなつておいた方がいいって打算が先だつたけど、この人ならありのままの自分を見てくれる、なんて考えがあつたのかもしけない。

「うわ……何それ、まるで恋する乙女の思考じゃない。甘ったるすぎて吐き気がしそう。ああでも、考えるまでも無く私の行動つてそれよね……！」

「どうしたんですか？ 急に頭を抱えて……」

「何でもないわ、ほんとに何でも無いから」

「ああ、もしかして一夏君のことが気になるんですか？ 御嬢様があそこまで異性の方と親しくされるのは初めてのことですしき」

「何言つてるのよ虚、アイツとはただの友達」

「ええ、初めての“ただの”友達ですね」

虚のこいつの内心を見透かすような言葉、絶対わかつてて言つてるわよね、この子は。

「虚、今日は絶対飲みなさいよ」

「お断りします」

「当主命令よ」

「主の間違つた意見には諫言が必要だと、一使用人として心得てありますので」

「付き合つて悪いなあもつ」

一夏が再び生徒会室に足を踏み入れたのは、虚が今日の分の仕事を終わらせて帰つた後だった。去り際に「後はお一人でごゆっくり」と小声で呟いたのを、私の耳は聞き逃さなかった。

「へえ、それでお嬢さんはいないわけか」

「うん、氣を使われちゃつた」

「それじゃあ、御厚意に甘えるとしますかね」

そう言つて一夏はにやりと笑い、私の対面に座つてワインのコルク栓を抜く。葡萄の香りが私の鼻腔をくすぐり、紫色の液体がワイングラスに注がれる。

「それで？ 今日は何に對して乾杯するの」「さてね、何にしようか」

一夏からワインが注がれたグラスを受け取り、乾杯の名目を一人揃つて考える。

「そうだな、あの子の未来に幸あれ、つてのは？」

「あの子……ああ、あの子、ね」

「不満か？」

「まあ、いいんじゃない」

本当に、一夏つたら篠ちゃんのことが一番なんだから。あのゴニット あの子の事を気に掛けるのも、篠ちゃんがこだわっているからでしょ? 一人の間にあるのが恋心なんかじゃないってのはわかるけどさ。やっぱこう、なんか納得いかない。

「 やっぱやめた」

「へー?」

「今日この時、お前と一人つきりで過ごせることに感謝をこめて、つてじうのは?」

何よもや、こつち見てにやにやしちゃつて。そのわかつてひるつて言つ感じの表情が気に喰わないわね。

「……どういふ風の吹き回しよ、いきなり意見を変えて」

「別に、ただ俺は鈍感でも間抜けでもないんだよ。田の前で可愛い女に拗ねられりやあ、意見の一つも変えるよ」

「一夏って、言葉だけはうまいよね」

「おいおい、オレは嘘なんかつかなって」

「どうだか、嘘はつかなくても調子のいいことは言いまくるくせに」

そういう甘い言葉を囁けば、すぐに機嫌を直すとか思われるのは癪だし、そう簡単に許してやらないんだから。

「まあどうあえず、乾杯だけでもしようぜ？ 酒持ったまま言い争うつてのは間抜けすぎる」

「…………同感、乾杯だけでもしましょうか」

互いに苦笑を交わし、ワイングラスを軽くぶつけ合つ。チン、と甲高い音がなつて、グラスの中の水面が揺らめいた。

グラスに口を付けて、ワインの香りと味が私の喉を潤した。そして暫し無言のままワインを飲み交わし、どんどんアルコールが私の体中を駆け巡つていく。

「いい飲みっぷりだな、エリー」

「一夏もね」

「何だよ、まだ拗ねてんのか？ そんな顔も可愛いけどや、やっぱり笑顔が一番だぜ」

「ふんだ、私は一夏に都合のいい女じゃないわよーだ」

そう言つて私は更にワインを煽る。もつと酒精が回るようになると、自分のペースを少々無視した飲みっぷりだ。だって、そうじゃないと、ばれるじゃない。

私の方が年上なのにさ、一夏にはずっとペースを握られっぱなし

だ。ショウモ無ニプライドだけど、それでも一夏におひおひをかいれるんじゃなくて、おひおひさせたいの。」

一夏には可愛い女、じゃなくてイイ女って思われたい。私は一夏の付属品でも無くて、一夏も私の付属品じゃない、そういう関係になりたいから。

「なあ、Hリー」

「なあに?」

「オレを使え。オレもお前を使つから」

そんな益体も無い思考にとらわれている時、一夏は唐突にそう切り出した。

「どうこいつ……意味かしら」

「何、簡単なことだよ。あの子がこれから何の干渉も受けないと、は、端からオレも思つちやいない。あれだけでかい厄ネタだ、阿呆どもが使い様によつちや金の卵になると思つても不思議じやない。もしくは証拠隠滅の為にあの子を破壊しようつて動きもあるかもな」

違つちかい? と表情で訴える一夏。確かに、その程度の事は当事者ならば推測できる事柄だ。特に一夏はこう見えて頭の回転は速い方だから、思つ至るのは当たり前か。

「それで? 何が言いたいわけ」

「この一件 どこまで絡んでる。オレの勘じやあ、相当大きなところまで絡んでるとみたね」

私はその問いに何も答えられず、ワインを飲み干しつつ沈黙を続けた。

「沈黙は、肯定と受け取つてもよいのか？」

「…………好きにすれば？」

「ククッ、〇Ｋやつわせてもらおう。それで」」からが本題だが、本当に学園側はあの子を守れるのか？」

酒がまわつていともなお、一夏はその問い合わせを真剣な面持ちで言いつた。その疑問は、」の段階まで思に至つたのならば当然のことだらう。何せつこれつとまで私はもとの懸念を抱いていたのだから。

「…………守れない、でしょ」うね」

血の不甲斐無を認めんとの一言を、私はじつにか胸の奥底から絞り出した。これがもし国家レベルの陰謀ならば、」」学園に、生徒会に、更識家に、私に、あの子を守る力はない。

余計な波風を立てないために、あの子を引き渡すなりなんなりして手打ちにしかねないだらう。しかも虚の報告によれば複数国家にまたがつての陰謀の恐れすらある。そんな状況下での子を守るなんて、そんな楽観的な言葉なんて言えはしなかつた。

「だらうな」

「そういう一夏ならできるって言いたいわけ？」

「馬鹿言え、できるわけねえだろ」

「…………よかつた、一夏がそんなこと言ひ馬鹿じやなくつて」

「阿呆ぬかせ、それは馬鹿じやなくつて間抜けって言つんだよ」

ならば一夏がこの話を切り出した理由は何だらう。一夏は意味無くこと言つ筈がない。私にも無理、一夏にも無理、じゃあ。

「だからさ、お前がオレを使え。オレもお前を使
う」

それは、私と一夏が力を合わせれば、それを成し遂げられるとい
うことに他ならない。

「お前の方は、こざといつとき動けない可能性が高い。かといつて
オレの方はそのこざつて時がわからない可能性が高い」

「そりゃあそただけど、それじゃあ一夏が」

「オレの肩書忘れたのかよエリー。オレは世界で唯一のHIS男性操
縦者だぜ?」

一夏が口にしたその可能性。それはつまり、一夏といつ現場レベ
ルでの独断で、あの子に対する干渉を撥ね退けて、学園側は素知ら
ぬ顔をしておけといつ事。そしてその暴走に対する支援と、事が終
わった後に一夏の肩書を利用してなるべく丸く収めるように交渉し
てほしいうことだ。

「つまり一夏をいい様に使え、つてことかしら?」

「バーカちげえよ、オレもお前も互いにいい様に使つてこと。つ
まりは共犯者つてところだ」

そう言つてにやりと笑う。それは何といふか実に様になつていてた。
例えて言つなら悪党の笑みだ。悪巧みしていると言つた方がいいだ
ら。

「共犯者、か」

「気に喰わないかい?」

「いいえ、気に入ったわ。そうね、私たちには恋人なんて言つてこ
響きじゃなくて、そんな苦い響きの方がいいかもね」

「じゃあ、もう一度乾杯するかい？」

「何にかしら？」

「決まつてんだろ？」

そして窓のグラスに再びワインを注ぎこれる。ワイン入りのグラスを眼前に掲げ、私たちはもう一度言葉を揃えて乾杯した。

「俺たちの

「私たちの

再び甲高い音色を鳴り響かせるワイングラス。

「
悪巧みの成功を願つて、乾杯つ！」

年頃の甘つたるい関係じゃない、少しばかりの後ろ暗さがある関係。うん、私たちにはこいつのがぴったりなのかもしれないわね。

視界いっぱいに広がるのは、まるで黄金の様に輝いている黄昏の砂浜。

「いい、は」

耳に響くのは、寄せては返す漣の音だけ。穏やかで、安らぎを感じる風景に、私はしばしの間見とれていた。

「綺麗、だな」

そう、ここは綺麗だ。いつまでも輝きを失わない、宝石の輝きのよう。そうだ、ここは時間が止まっている。誰かが感じた刹那の残滓。切り取られた一瞬だ。

そんな中を私は歩き続ける。踏みしめる砂の音と、私の素足を撫でる波の音だけが響く中、私は当ても無く歩き続ける。

視界に映るのは静止しているようだ、ずっと変わらない。変化がない。時間が止まっている。

「…………」「…………」「…………」

だからきっと、この世界にいるのは、この世界の主なのだ。視線の先には波打ち際と戯れながら鼻歌を歌つ、白のワンピースを身に纏つた私と同年代の少女の姿。ぐるぐると軽やかに回る体に合わせて、彼女の黄昏色の髪がふわりと舞つた。

その姿に、見覚えは無い。完全完璧に初対面だ。でも、誰かなんて思う筈がなかった。だから抱く気持ちは、たとえこの瞬間が僥ぐ消える夢としても、彼女が笑っているそのことへの喜びだけ。

「…………」「…………」「…………」

「うん、そうだね。初めてまして」

「…………」「…………」「…………」

彼女は鼻歌を歌つのをやめて、私へと振り返り屈託のない微笑みを見てくれる。この黄昏にぴったりな、全てを包み込むような暖

かな笑顔。

「会いたかったよ、ほつき」

たどたどしく、私の名前を呼ぶ彼女。言い慣れないのか少しだけ
イントネーションがおかしかったけど、それがなんだか微笑ましく
感じられた。

「ああ、私もだ。えーと……」

そうだった。今の今まで気付かなかつたけど、私は救おうとして
いる彼女の名前を知らないのだ。

「君の名前、教えてほしいな」

「シャルロット、シャルロット・ブルイユだよ」

今この時初めて知つたその名前を、私は胸の奥深くに刻みつける。
始まりは利己的で、打算的でも、私が彼女を救おうとするこの思い
は決してあやふやなものじやないと信じているから、誓いの言葉を
改めて彼女に伝える。

「いつか、夢の中じやなく、現実で君と会つよ
「うん、楽しみにしてるね」

心底その言葉通りなのだとわかるシャルロットの微笑み。現実で
はそんなことすらできない彼女だから、今この微笑みを忘れぬよ
うに私の心に刻みつける。

「なあ、何かしたい」とはあるか?」

「ふえ?」

「だから、何かしたい事。こんな所じゃできる事なんて限られてるだろうけど」

今は無力に過ぎるから、せめて彼女の心を救える何かをしたくなつた。ほんと、今の私って言葉だけだな。心の底に宿る虚の思いを覆い隠して、できるだけ私は微笑んで彼女の願い事を待つた。

「えつとね、じゃあいつしょに座る?..」

「はい!?」

「だから一緒に座つて」

「そんなんでいいのか?」

「それだからいいの?」

あまりに予想外だけど、そんな簡単なことを断る理由は無いから、私は砂浜に座り込んだ。その横にシャルロットも座り込んで、私の肩に頭を乗せる様にもたれかかる。

そのままずっと、シャルロットは穏やかな表情で私にもたれかかり、黄昏に輝く水面を見つめ続けていた。

「温かいね、ほつきの体」

「そうか?」

「うん、暖かくて、寒さなんか感じないよ?」

「……そうか、それは良かつたな」

そんなありふれたことすら、今のシャルロットには望めない物だと、改めて思い知らされる。それでも、今この時だけは、シャルロットが穏やかな気持ちになれているのなら、私がしかめつ面を晒してシャルロットの気持ちに影を差すわけにはいかなかつた。

「」の風景はね、私が昔お母さんと一緒に遊んだ風景なの

「思い出の風景ってことか」

「そう、お母さんと一緒に砂浜で遊んで、空がこんなになるまでいっぱい遊んだ」

ああ、やっぱりこれはシャルロットが今も抱き続けている、刹那の輝き。過ぎ去ってしまった宝石なんだ。

手の中から失ってしまった、もう追い付けなくなってしまった物。

今の彼女には、そこへと行くための足すらないのだから。

「……もう一度」

ああそうか、今の彼女には、こんな境遇に追いやった誰かへの恨みなんてものは無いんだ。ただずっと、失ってしまった輝きに恋焦がれているだけ。この透き通った表情を見れば、そんなことは容易に察せられた。

「……ここで遊びたいなあ」

日常への回帰、それだけがシャルロット・ブルイコの望みなら、それを成し遂げるここにが、彼女を救うことだらう。

「遊べばいい」

だから思わず、そう呟いた。

「え！？」

そんなことすら望めずにいる誰かを、やっぱり放つておける筈がない。やっぱり彼女を救わなきや、私も日常に戻れない。誰かを見殺しにしている様な、言いようのない感触を抱えたままじや、私も

笑えない。

「こいつかきつと、私が“*ジー*”と連れて行つてやる」

こんな儂い刹那の幻じや無く。幻想でも何でもない現実へと、彼女を連れだして見せる。

「ふふつ、楽しみに待つてるね、ほつき」

「ああ、その時は多分馬鹿の一夏や、ウリ坊や、*ヒリー*や、セシリアやうが集まつてぐるから、今の様に静かにとはいいかないだらうけど」

「ほつきの友達？」

私が言葉にした名前に、シャルロットはあどけない疑問の表情を浮かべる。

「ああ、全員私の友達さ」「えへへつ、楽しみが増えちやつた」「そつか、なら頑張らなことな」「楽しみにしてるよほつき」
「それならあそこここへとも耐えられる」

今この*ジー*、結局のどこの夢の中なんだらう。

「やうだよ、ほつきが田舎めぢやえれば消えちやう場所なんだ、*ジー*は

「本当に、夢の中なのか、*ジー*は」

ああ確かに、この風景は夢の中の幻だからこそその美しさなのだろう。大事に抱えていたシャルロットの思い出だからこそ、輝きを失わない風景。

「だから、抱きしめてよほつき。夢から覚めても、暖かさを失わないよつに、抱きしめて」

その時初めて、シャルロットの表情に翳りの色が混じった。

「そのぐらー、お安い御用だ」

「ありがと、ほつき」

「言つただろ？ お安い御用だつて。

寒くないか？」

「うん、暖かいよ」

私はそうして、夢から覚めるまでの間すうと、シャルロットの体を引き寄せて抱きしめ続けた。

その間ずっと、シャルロットの表情が安らかだったのは、きっと幻ではないと信じたかった。

第十話（後書き）

「あとがき」

やつぱつうちの一夏と樋無はこんな関係が一番しつくつくるな。
甘酸っぱい関係より、一緒に悪巧みしてる方が似合つ。

そして篠さんがヒロイン度零過ぎる。まあ、前世の関係上仕方が
無いと言えばそういうなんだが。

白室の中、鏡に映る自分の顔を見つめる。その中で異彩を放つ金色に染まつた左の瞳。

生来の物ではない、自身の性能強化のために施された施術。越界の瞳「ヴォーダン・オージュ」と呼ばれる疑似ハイパーセンサー。

眼球内に投与されたナノマシンが感覚器官を生成し、それを脳神経と直結することによつて反射能力の増大を図る仕組みだ。

兵器として作られ生み出され、その性能を更に強化するために行われた進化の証にして、失敗作の烙印。制御が効かなくなつたこの瞳を眼帯で隠し、いつ廃棄処分されるのかと怯えていた日々が、脳裏によぎる。

『さて、どうなるかねあの検体』

『まあ、取れるだけのデータをとつて廃棄処分が妥当だろ?』

『そつそつ表沙汰にもできんしな、あれは』

『……まったく、ここにのこるの俺の残業は無駄つてか?』

『ばやくなよ、次ので上手くやりやあいってだけだ』

実験室のガラス越しに、私を品評する白衣の研究者たちの声がマスク越しに響く。最早、諦めの感情でしか私を見ていない声。

嫌だつた。これまで私の同類が、同じく軍で生み出されていった名前も無い誰かが消えていった。

それはいい。その者たちは、性能が低かつたから、失敗作だから消されていったのだ。兵器として生み出された以上、失敗作を保存しておく道理などどこにもない。だから、この目が、金色に輝くこの劣化の証が、自分の瞳だというのが受け入れられない。

「 いつの世も、頭だけの馬鹿はいる物だな」

教官の第一声は、そんな言葉だつた。失敗作である私への非難ではなく、私を作った研究者たちへの非難。

織斑千冬、ISの操縦に関する第一人者。とある事情によつてドイツ軍のIS部隊の教官に迎え入れられた、最強の操縦者。自身が手塙にかけるべき人材を探し求め、ドイツ軍の各基地を回つていた彼女は、あらうじとか失敗作である私に目を掛けてくれた。

「…………しかし、私は」

「何だ？ 失敗作だから私の教えを受ける資格が無いとでもぬかすつもりか？」

「そう…………」

どう足搔いたところで、最早この瞳く烙印へは消せないのだ。だから、最悪の苦痛であつても、私にはそう述べるしかなかつた。

「 」
「の馬鹿がつ……」

そんな私に教官は、とてつもない威力を誇るその拳を私の頭に振り下ろした。痛かった。すごく痛かった。はつきり言つて私のこれまでの経験の中で一番痛かつたと断言できる。

「まあいい、貴様程度の馬鹿なら」ちらりも楽だ

「…………あの」

「まだ何かぬかすつもりか？ もしや貴様、その程度の馬鹿さ加減で私の手を煩わせるつもりでいるのか？ 生憎と身内の極大の馬鹿

がいてな、貴様程度に煩わしさなど感じるものか」

「は……はあ……」

そんな感じで、わけのわからぬ間に私は教官の教え子にされてしまった。とはいって、その時は何が何だかわからぬままに事態が進行していく、正直言つてあのときどんな気持だったか、未だに思い出せない。

ただ、私を教え子にしようとする教官を諫める軍高官たちを、その怜俐な声で論破してくれた光景だけは、今も鮮明に胸の内にある。

「ふん、どうにもああいつ手合には虫唾が走るな」

そうして、私は遺伝子操作体の失敗作から、あの織斑千冬の教え子という立場になつた。批判・やつかみは腐るほどに出てきたが、それを教官は一顧だにせず、私が教え子だという立場を崩さなかつた。

「さて、これからは私がじこでやるからな。覚悟しておけ」

その時になつてようやく私は、教官に、拾い上げて頂いたのだと実感した。失敗作となつて廃棄処分の決定を聞くことに怯える日々から、厳しくはあれど、一流のIDS操縦者になるため邁進する日々。未来に怯えることなく、未来に希望を持てるようになった日々の始まり。

失敗作如きが、などという嘲りもあつた。けれども教官の薰陶を受け、結果を残していくばそれも自然と収まった。そうなると最早、私の立場はゆるぎないものとなつた。専用機も支給され、多分にプロパガンダの意味もあるだろうが、少佐の地位にまで上り詰め、ドイツ国内における精銳IDS部隊の部隊長に任せられた。

幸福、幸せ、そうとしか言いようがないこの結果。自分自身が持

て余しそうになるほどこの結果は、全て教官が「与えてくれた物だつた。

最早、ラウラ・ボーテヴィッヒにとって、織斑千冬の存在はその心の中心に根付くものとなつていた。

そんな教官との日々も、長くは続かなかつた。もとより教官は、あくまで特別扱いとしてドイツ軍に招聘された身だ。私がある程度の成長を見せればその役目も終わる。

教官がドイツから去り、日本のI.S学園で教鞭をとる。部下からそう聞かされた私は、常の自制心など吹き飛んで教官に詰め寄つた。

「教官……日本に帰られるといつのは本当ですかっ……！」

それが筋の通つた現実だとしても、それでも私は、その現実をやすやすとは受け入れられなかつた。心の奥底で、もしかしたら教官はまだドイツに残つてくれるかもしれないといつ、砂糖菓子の様に甘い妄想を抱いていた。

「まあ、まだまだ完璧とは言えんがな、それなりになつた……お前は

そう言つて、無造作に私の頭を撫でてくれた教官の手は、暖かかつたが、どこか冷たかつた。まるでもうそこまで来ている別れの様に。

「それに、これ以上家を放つておくわけにもいかんからな。お前以上に手のかかる奴もいることだし」

苦笑する教官。口調では面倒だと言つていながら、その裏にあつたのは違つていたように思つ。その誰かへと向ける感情は、きっと教官にとつてすごく大切なもので、だからそのためにも、教官は日本へと帰らなければいけないのだ。

それは、私には向けられていない。

教官は、私と“それ”を天秤にかけた。

それは、私より

しかし私は、教官の教え子なのだ。別れるその時まで泣き顔を晒すわけにはいかなかつた。涙をこらえ、嗚咽を飲み込み、心を固める。

「ふふつ、一端の顔をするようになつたじやないか」

「……私は、教官の教え子ですから」

「そうか　　これからも頑張れ」

「はいっ！！　今までのご指導と受けた恩は、一生忘れませんっ

「！」

そうして交わした敬礼が、私と教官の、個人的な別れの儀式だつた。堪え切れず滲んだ涙を、教官は見ないふりをしてくれた。その時は、それで一応、気持ちの整理がついたのだ。

転機は、それからしばらくたつた後に全世界を駆け巡った一つのニユースだった。

世界で唯一、ISを起動することのできる男性が見つかったのだ。それがどこの馬の骨ともしれぬ奴ならば、私は別にどうでもよかつた。

織斑一夏

よりもよつてそれが、世界唯一の男性操縦者の名前だった。あの教官の弟。あの人にとっての一一番。ニユース番組で映し出されるその顔写真を見るたびに、胸の奥が微かに痛んだ。

ズキリ、と口を追う事に強くなつてゐるそれを持て余してゐるうちに、件の織斑一夏に対する身辺調査も行われていた。

彼のブリュンヒルデの弟という形ばかりの身辺調査ではなく、趣味・嗜好・能力の全てを含めた本格的な調査。何故彼だけが男性でありながらISを起動することができるのか、あわよくばドイツに引き込むための方法を模索するためにも、その調査は微に入り細に入り行われた。

「これが、教官のつ……」

お飾りとはいへ、ドイツ軍の特殊部隊隊長に据えられている私は相応の権限を持つてゐるので、その調査報告書を難なく手に入れることができた。

副官のクラリッサから手渡された書類の束。その拍子に映し出された顔写真から既に、日本人でありながら髪をけばけばしい金色に染め、軽薄な表情を晒していた。

それだけでもう、この男への不信感は募っていく。そうして書類をめくつていき、この男のこれまでの来歴に目を通していった。

それらに目を通したうえで、コイツへの評価を付けるならば、肩としか言えない。日本での法に触れながらの飲酒・喫煙は当たり前。喧嘩、乱闘騒ぎを起こすのは日常茶飯事、補導回数も両手両足の指の数では收まりが効かないほどだ。

「これが……コイツが……教官の……」

こんな救いのない肩が、教官の大切な存在なのか！？ ある人にああまで気に掛けられながらも、それでもこんな非行を繰り返すコイツが許せなかつた。

しかも、教官がドイツに来るきっかけとなつたあの事件。コイツが誘拐されたせいで教官は「世界大会」「mond・グロッソ」の二連覇という偉業を断念せざるを得なかつた。

わかっている。それがただの言いがかりだというぐらいは。そもそも教官がドイツ軍に招聘されたのはこの事件においてドイツ軍が助力し、教官がその恩義を返すためにその誘いを受け入れたのだから、この事件こそが私と教官を繋げた一因だ。だからこそ、私がこの事に対してもかを言うのは筋違いもいいところだ。

教官に大切に思われ気に掛けられて、非行を繰り返して教官に迷惑を掛け、そして、私と教官が出会つた原因。

「…………くそつ、なんなのだこの気持ちは

わからない。私はどうしたいのだろうか。それでもわかっていることはただ一つ。

この男が、織斑一夏が、教官の弟といつたの寄生虫であることがだけだ。これ以上この男をのさばらせておけば、また教官の未来に厄介事を引き込むかもしれない。

だから、軍上層部からE.S学園へと転入するように指示されたのは、渡りに船としか言いようがなかつた。この日で直接あの男を見定め、正直の肩に間違いないのなら、いかなる手段も辞さないと覚悟を決めた。

「あの時は喧嘩両成敗としたがな、

「これは私の落ち度、か」

そうしてE.S学園に転入した初日。織斑一夏と言葉を交わし、下劣な物言いと気配に激昂し、同時にこの男はやはり教官に害悪しかもたらさないと判断した。

しかし数日たつたある日の放課後、私は放送で職員室に呼び出された。呼び出されていた先で待っていたのは教官で、隣接している小さな会議室で一人きりになつた途端、おもむろに教官はそう口にした。私を責めている様にも、自分自身を責めているようにも感じられる、そんな言葉を。

「ああ、あの愚弟の言い分は筋が通つてゐる。今のお前は木偶人形だ」

その時、時間が停止した。教官はますます意味のわからない言葉を口にする。あの男の支離滅裂な言葉に同調した教官が、本当に今、現実に存在しているのか疑わしくなるほどだ。

「教……官……」

「だから、これはお前への宿題だ。アイツの言葉の意味をよく考えろ。…………そして答えを出せ、誰のものでもない、ラウラ・ボーデヴィッシュとしての答えを」

それがいかなる答えでも、お前自身の答えなら私は受け入れてやる。それだけを言い残し、教官は去っていった。

もとより私と論じる気はなかつたのだろうか、それだけを伝えるべきとする様な態度に、足元が喪失したかのような錯覚に陥つた。地面を踏みしめている感覚がしない。

どうして、教官がそんなことをいつのですか。

私はただ、教官の為に

やはり私は、あの男より

その後自分がどういう行動をしていたのか、それは全く記憶に残つていない。

とにかく、その場から離れたかつた。当ても無く学園の中をさまよい続け、歩き続けた。私は拒絶されたのだろうか、私は結局

瞬間、身を切るような冷気が襲つた。

自失していた思考だからこそ、それに対しても体が思考を占拠した。生物としての生存本能が反射的に体を突き動かし、太ももに巻き付けていたナイフホルダーから愛用のナイフを引き抜く。そして

そのまま冷氣の元へとナイフを突き出した。

突き出される刃。順手で握りしめたそれは、最大速度で疾走し、冷氣の源、その喉元へと迫った。

「シイツ！！」

「はあつ！！」

だがその刃の腹を茶色の何かが激突し、その切つ先を逸らす。乾いた音を鳴らして空を切る刃をかいぐぐり、冷氣の源 敵手の拳が私の顔面に迫る。私の初撃を逸らした者は木刀で、その流れのまま両手で握りしめた木刀の柄尻を私の顔面に振り下ろしていく。

私はそのカウンターをナイフが逸らされた勢いを利用して、そのま右前方へと進んで回避。視界の左側には無防備を晒している敵の左わき腹。そこへと左腕での肘打ちを見舞う。

相手は木刀を振り下ろした死に体で、今更木刀を引き戻しての防御は間に合わず、振り下ろしの為右足を踏み込んだ状態。回避も防御もままならないはず。

「 させるかあつ！！」

そこで敵手のとつた手段は迎撃。とは言つても左足を脱力させちらへと倒れこむ様な变速のタックルだ。威力は望むべくも無く、ただ自身の左肩を柔らかくこちらに押し当てる様な攻撃とすらいえない攻撃。

だが、そうすることによつて肘打ちの威力を殺して窮地を退けてみせた。そのまま彼我の体格差 特に私の体は同年代の者と見比べても小柄だ を利用して私を弾き飛ばし、不利な状況にあつた間合いをリセットした。

人気のない校舎裏手の林の中、篠ノ之箒とラウラ・ボーデヴィッシュは向かい合つ。得物はそれぞれ木刀とナイフ。間合いの面では箒の優勢であり、スピードの面では箒が手にする木刀が愛用の鉄芯入りの特注品ということもあり、ラウラが有利であった。

「 しつつ！」

短い呼氣と共にラウラが再び動く。低く這う様な疾走で剣士の弱点とも言える足元へナイフを走らせる。横薙ぎに振るわれる銀光一閃。

それに対し箒は未だ正眼に木刀を抱えたまま。いきなりの奇襲。そこから続く意味不明の戦闘。だがしかし生来の負けず嫌いの気質は「それでも負けるのだけは勘弁ならん」と闘志を過熱させ、思考を研ぎ澄ませていた。

どうしてこうなったのかの解説は後回しにして、箒の思考はこの状況下における最善手を模索する。

導き出した手段は、右足の前方への踏み込み。何の変哲も無い、しかし現状においては遅きに失する一手。無論、そんな愚行を箒が犯すべくも無く、常の摺り足以上にその一步は大地を、その表面の砂利を爪先で抉り取る。飛び散る飛礫は丁度ラウラの顔面に飛来し、その視界を塞ぎ、勢いを削いだ。

もらつた！！

ラウラの得ていたスピードという優勢は既に無くなり、対して箒は右足を踏み込み体勢は十分。踏み込みと同時に振り上げていた木刀は、今まさに振り下ろされる。

唸りを上げる剛剣が直下にいるラウラの無防備な背中へと迫る。

丸みを帯びて刃筋の滑る可能性がある頭頂部を避け、狙うはラウラの右肩。その一撃で骨を砕き、ナイフを振るわせない様にするためだ。

実際に手慣れた、一夏に巻き込まれ潜り抜けてきた幾多の乱闘の経験が成せる的確な選択だ。故に骨の一、一本砕くことにも躊躇は無く、今は医療技術も進歩しているのだから骨折程度すぐ治るだろうといつ思想の元、その一撃は間違いなく箒の本気だった。

その箒の思惑を打ち碎いたのは、無手であるラウラの左手。初めから兵士となるべく生み出された遺伝子操作による高性能な肉体に加え、誇張なく人生すべてを修練に捧げたラウラの身体性能は、その可憐で小柄な体格に反して、まさに常人離れした物だ。

「な……にいつ！？」

故に左腕一本で自身の体を九十度方向転換する無茶も罷り通る。大地に掌打を喰らわせて、その反動による離脱を成したラウラはすぐさま跳ね起きる。まるで猫のようにしなやかに体勢を整え、箒が木刀を振り下ろした隙を突く刺突を放つ。

「…………」

「ふんつ……喧嘩を売るのなら離してみせろつ……」

自失による忘我の状態で幽鬼のように刃を振るい続けるラウラを、箒は苦々しい表情を浮かべながら迎撃し続ける。

別段箒は売られた喧嘩を買うこと自体に否は無い性質だが、それは相手の意思が明確であつてこそ。こんな意思なき喧嘩を売られては、喧嘩を売られたその事実よりも、その様にこそ苛立ちを感じる。

「ああもう、萎えるんだよっ……」

まるで一夏が言つ様な台詞を口にしながら、箒はどうにかラウラの連撃を捌いていく。

とはいえ場所が悪すぎた。一人が戦っている場所は林の中で、お世辞にも剣が振りやすい場所とは言えない。乱立する木々が剣筋を制限し、このような状況下において重要な小回りとスピードはラウラが優れている。

軍人としての修練を收めてきているだけあって、ラウラの格闘戦の技量は並外れている。特に室内での近距離格闘戦などは特殊部隊の軍人にとっては必須の物だ。それを應用しての小回りを重視したラウラの猛攻は、箒にとって厄介すぎる物となっている。

頬や四肢に次々とできる赤い筋。かすり傷とはいえど、ここまで続けばいつかは致命の一撃を喰らいかねない。しかし、こんな状況下において一か八かの特攻などもつてのほか。カウンターをとられて自滅するのが落ちだ。

（…………やるしか、ないか？）

今日この時箒がここにいた目的。それを思い返し、それこそが起死回生の一手になるだろうかと思考し、忘我故に研ぎ澄まされ続けているラウラの猛攻がその思考を後押しした。

箒は左手を木刀の柄から手放し、手近に生えていた樹木の枝先をつまむ。そのまましならせラウラが突撃を仕掛けてきたと同時にその枝先を手放した。解放された枝先は、高速で元に戻ろうとしてラウラの視界を遮るコースをとった。ラウラはそれを頭を捻り回避するも、その一瞬の停滞を突いて箒は大きく飛びのいた。

「まあちゅうどいい、貴様で試してやる」

そう言って筈は木刀を眼前に掲げ、意識を研ぎ澄ませる。いつもなら模擬戦に明け暮れる筈の放課後、筈がここにいたのはまず、一夏がいきなり真耶に教えを請いに行くと言いたしたのが切欠だつた。

「まあ、戦い方が似ているみたいだし？ ちょっとくら美人教師といけない個人授業でもしに行くわ」

そうのたまつて去つていった一夏。宙ぶらりんになつた放課後の予定をどう潰そうかと模索した時に、ならばこそ自分も独自に修練しようと筈は思い立つた。そしてその課題として選んだのが、とある古流剣術の技だつた。

篠ノ之筈という少女は、自他ともに認める剣術馬鹿だ。とはいっても強くなること自体が目的ではなく、古流の技を習得することにこそ充足を感じる少々変わり者ではある。

故に時間が空けばどこかの道場に出稽古に赴いたり、両親や千冬の伝手を頼りに武芸者に師事を乞つたりしていた。

（ 宗次郎さんほどにできるとは思わんが、いや、これこそが雑念だつ！！）

そんな毎日の中では、毎日の中で出会つた一人の剣士。この時勢にありながらも剣に生き剣の為の人生を送り、剣そのものとまで謳われた一人の剣

鬼。老齢にありながらも、その剣腕は人後に絶するほどであり、あの千冬ですら現状で引き分けがやつとという人物がいた。

しかも、篝にとつては幸運というべきだろうか、その人物は自身の流派の秘奥について他者に教えることに一切の頓着を見せず、むしろ喜び勇んでその技の数々を教えてくれた。

この時勢、剣を学ぶ者の大半がISの為の剣技しか学ばず、僕の技もこのまま消え行くのみかと思っていましたが、それでも正直の、生身の人間が扱う剣技に目を向けてくれるあなたの様な人物がいてくれたことは、素直に嬉しいと感じますよ。

剣を持つた時とは似ても似つかない優男の笑顔を浮かべ、その武芸者は親身になって篝に手ほどきをしたのだった。

無論、学業の合間を縫つての事、その全てを習得するには未だ至っていない。故に篝は今日この時をそのための修練に当てるにしたのだ。

まずは彼が得意としていた技を、その階だけでも掴んで見せようと意気込んで、そのために必要な精神を研ぎ澄ませていた。

アイツはアイツで前に進んでいるのだから、私も前に進んで見せる。

なぜならば、その技に必要なのは肉体の技量ではなく、余分の一切が無い精神であるのだから。ただ只管に「斬る」という意思のみを刃に、切つ先に込める。

斬れないなどとは思わない。思つては駄目だ。なぜならこ

の一刀は必ず斬るのだから、斬れない道理などござりにもない。

状況としては、修行僧の精神統一に近いのだろう。只管に余分と余白を無くし、精神を一つの意思で染め上げて刃と成す。自己暗示、そう呼ぶのが適切なかもしない。

「梵天王魔王自在大自在、除其衰患令得安穩、諸余怨敵皆悉摧滅」

更に深く自己を変革し研ぎ澄まさせるための祝詞を唱え、いよいよもつて身も凍るほどの ラウラですら反射的に戦闘態勢に移行したほどの殺氣を、斬氣を切つ先に込める。

その気配に押され、ラウラが反射的に飛びさがる。忘我故にその反応は正しく、そしてまったくの無意味だった。

「石上神道流、首飛ばしの颶風

蟻声ーー」

横薙ぎに振るわれる笄の木刀。ただでさえ開いていた間合いに加え、この瞬間においてはラウラが飛びさがっているが故に、完全にその切つ先は届かず空を切る。これまでラウラの猛攻を捌いていたのと同じ人物の行動だとは思えない、かけ離れた愚行の一撃。

「ぐあつー？」

だがその瞬間、ラウラの首筋から赤い血飛沫が舞つた。まるでそう、横薙ぎの一撃がラウラの首筋を襲つたかのように、ラウラの首筋の頸動脈が切り裂かれていた。

普通ならそのまま即死しかねないほどに深い傷だったが、ラウラが専用機持ちだつたことが幸いした。自動的にI-Sの操縦者保護機能が働き、止血を施し応急処置を行つた。

石上神道流、首飛ばしの颶風 蟻声

彼の武芸者の得意とする技であり、届かぬ筈の一撃を届かせたその技の正体とは、殺氣や斬氣、つまりは相手を害する意思による攻撃である。

本来は剣先に凝縮した攻撃意思により、相手を竦ませ体勢を崩す技である。諸般の流派に謳われる気当たりなどに代表される物の剣技版と言えばいいだろうか。

しかし、彼の人物がこの技を振るう際はそれだけに留まらず、実際に対象を「斬る」ことすら可能にしている。

別段それは何か異質な力を使つていてはいるということではない。例えば暗示を掛けて、ただの鉛筆を焼けた火箸と認識させれば、ただの鉛筆に触れただけで人間の体は火傷の症状を負う。

それと同じように、常識離れした量を凝縮した殺氣と斬氣で、対象の体に「斬られた」と誤認させるのだ。そうしてその幻覚の後を体に追わせ、触れずに切るという芸当を成し遂げる。

この技において重要なのは、敵手の、身体の隙ではなく精神の隙を突く事。心の乱れこそがこの技を仕掛ける好機なのだ。

故に今のラウラなど、この技を前にしては隙だらけといつほかない。忘我し反射的に暴れる獣に等しいのだから。

「……………あ、ヤバ

といえ纂こ、マジで首を切り落とすつもりはなく、未だ習得に至らぬ技、致命的な隙を晒させれば週の字ぐらじにしか考えていないかつた。

そもそもラウラが纂に襲いかかったのも、この技の修練の為に研ぎ澄ませていた殺氣に、ラウラが過剰反応してしまったのが原因である。完全に纂が悪いとは言えないが、この現状に至ったのは半分ぐらじ纂のせいでもあった。

首筋を鮮血で濡らし、一時的な貧血で氣を失うラウラを皿の前にして、途方に暮れる表情を浮かべる纂。

「……………とりあえず保健室に運ぶか

あんまつこの技は使わなこよつてよつと想いながら、纂はラウラを抱えて保健室へと向かったのだった。

第十一話（後書き）

＜あとがき＞

首飛ばしの颶風つて、今の筆にはぴったりな技だと思つ。何せ筆の中身はあれだからして、いつかはあれをつかから、その時にこれを使つたらいろいろと洒落にならないよなあ、といつ電波を受信したのさ（爆）

後シャルの名字に関しては、あれは母方の名字で、デュノア家には戸籍上引き取られていないためです。

筈との戦闘で氣を失い、ラウラは保健室にて寝かされていた。首筋には包帯が巻かれていたが、幸いにして筈の放つた蠅声の特性、殺氣による暗示での切斷は細胞レベルで分たれており、損傷した細胞という物が無かつた、つまりは細胞同士の結合が暗示によつて力を無くしてはいたので、適切な処置を施せば翌日には回復する程度だつた。

「……つたく筈の馬鹿」

そしてそんなラウラに付き添つのは筈ではなく、何故か鈴だつた。勿論筈も保健室にいることはこゝのだが、今は養護教諭に傷の手当をしてもらつている。

「何が餓鬼の相手は得意だら? ょつ」

実際に不機嫌そうな鈴の愚痴が響く。筈に電話でそう言われていきなり呼びつけられたのだから、愚痴の一つも出るのは仕方がない。

「そう言われてもな、コイツの相手はお前が一番適任な気がしただけだ」

「どうしてよ筈」

「だつて精神年齢でいえばお前も餓鬼だ」

「殴るぞこり」

「……とまあ冗談はさておいて、どうにもコイツが心底餓鬼っぽく感じたからな、お前の方が上手くあしらえそつた気がしただけだ」

そう言つて筈は絆創膏まみれの顔に疲れた様な表情を浮かべて、

未だベッドの上で眠り続けるラウラを見つめた。

「あ～、もうこや」の子、あつていきなり一夏に喧嘩吹っかけたんだっけ?」

「まあな、一夏の馬鹿は自分の妄想を現実に投影している阿呆だと思つてゐるみたいだけど」

「幕は違うの?」

「…………なんていうか、コイツに襲いかかられた時に、餓鬼の癪癪みたいだと感じたんだ」

それがあの時幕の抱いた印象だつた。我を忘れて襲いかかるその様はまるで、親に見捨てられて自暴自棄になる子供の様だと、あの時は迎撃するので手一杯だつたが、今思い返してみるとそういう印象を抱いたのだ。

「餓鬼の相手なんて面倒くさくてやつてられるか」

「それであたしを呼び出したつてわけ?」

「その通り」

「ねえ、本気で殴つていい?」

「いいわけ無いだろ」

そういうつつ幕はすぐさま踵を返して保健室から去つていいく。鈴が静止の声を掛ける間もなく黒髪のポニー・テールが廊下に消え、後に残されたのは鈴とラウラだけ。

「…………まつたく、本当にどうすりやあいにつてのよつ

幕を引き留めようとした腕も対象が居なくなつてしまえば、所在無げに彷徨うだけで、やがて鈴の愚痴と共に力無く降ろされた。

鈴としては、又聞きではあるがラウラの転入初日における経緯を

把握しているため、だいたいではあるがラウラという少女が一夏に對してどういう感情を抱いているのかはある程度想像している。

勿論、一夏がそういう感情を抱いている者に対し、どのような感情を抱くかも長い付き合いだからわかり切っている。

水と油。そう形容したほうがいいかもしれない。しかも一夏の方も相当にイラついているようだ。本当ならば、さつき簫が述べた様な事は先に一夏が気付く筈だろ？ 他者に対する機微という点では一夏は簫より上だ。

「はあ……あいつ等は厄介事ばかり起こさないと気が済まないんじやないかしら」「

溜息をつきつつ、鈴は未だ眠りこけるラウラの寝顔を見つめる。どうにも聞く所によると、この少女はかつて千冬の教え子であったらしい。

「 ううつ

その時、閉じられていたラウラの瞼が開いた。茫洋とした瞳がこちらを見据え、未だ鮮明に目覚めていないのか気の抜けた言葉が漏れる。

「…………」「は？」
「保健室。アンタいきなり簫に襲いかかつたんだって？」
「襲い、かかる？」
「はあ、それも覚えていなってわけ？」

ベッドの上で上半身を起こし、鈴の言葉を復唱するもその響きに現実感は無い。どうやらラウラはその事を覚えていないらしく。事実を突きつけても訝然といかないような表情を浮かべている。

「……私は……教官」……」

気が抜けている。鈴の瞳には今のラウラがそうとしか映らなかつた。動くためのエネルギーが無くなつてゐる。

そんなラウラの様を見て、鈴は再び嘆息する。こんな姿を見せられては「眼覚めたから、もういいわね」と言えなかつた。ものの見事に籌の良い様に踊らされてゐる。端的にいえばほつとけない。

「何かあつたの？ 錯乱して筹に襲いかかるぐらいいの何かが」

「私は、間違つたことはしていないはずだ……なのに」

ラウラの口にする言葉は、今一要領を得ない断片的なものだ。これでは助言の一つも言えはしない。

「ねえ、アンタどうして一夏のことが嫌いなの」

仕方がない鈴は、最初から話を聞きだすことにして。とはいつてもそれは鈴自身がラウラの事を理解するのではなく、ラウラが自身の事を思い返すためだ。

「決まつてゐる。教官に害しか及ぼさないからだ」

そうなると筹に負けたのはよかつたのかもしれない。文字通り血が抜けて頭が冷えたのだろうか、鈴がラウラの話から抱いていた印象とは真逆の、実に素直な様子でラウラは口を開いてくれた。

「教官つて、千冬さん？」

「そうだ……今の私があるのは教官のおかげだからな」

「けど、千冬さんが教官だと厳しかつたんじやないの？」

「ああ、教官の拳骨はすぐ痛かつた」

その時の事を思い返したのか、少しだけ顔を顰めるラウラに、鈴はおかしさと親しみを感じて笑みを浮かべる。

「わかるわかる……すつごく痛いわよね、あれは」

「お前もあれを味わったことがあるのか?」

「そりやもう何回も、腐れ縁の奴がいろいろと事件巻き起こさせいでね」

「連帶責任というわけか、当然のことだな」

「そうよね、厄介事起こした奴を止められなかつたってことだもの。当たり前だ、何もしなかつたといつことば、何もできなかつたという事。無能の証だ」

「うわあ、それだつたらあたしは無能つてこと?」

「かもしけんな」

そう言つたラウラの顔には、微かな、それでも鈴が認識している中では初めての笑みが浮かんだ。

「けじねえ、あいつ等は本当に止めても止まらないからなあ

「そりなのか…………む」

「どしたの?」

「いや…………今更なことだが、お前誰だ?」

つい先ほどラウラの事を気が抜けていると評した鈴だったが、今度は鈴の体から盛大に気が抜けた。具体的にいえば座つていた安物のパイプ椅子をひっくり返して、そのまま盛大にずつこける位には

「あ……あんたねえ……」

「す、すまんつ。……確か、ウリ・ボーだつたか?」

そして更なる「ウラ」の迫撃に、ビートとか立ち上がりはじめていた鈴は、再び盛大に「ずつ」けた。

「なんじゃそりやああああつ……あたしはどこの機動で戦士なアーメの登場キャラクターよツ……つーかウリ坊じゃねえつ……」

咆哮一閃。保健室に響き渡る大音量、しかもしつかりと「ウラ」の肩を掴んだ上で、至近距離からの大音量だ。思わず「ウラ」は耳を押さえ、その暴威を何とかこらえる。

「ぐあ……み、耳が」

「いいつ？ あたしの名前は決してウリ坊じゃないからねつ……あたしの名前は鳳鈴音……「ア・ン・リ・ン・イ・ンよつ……」「わ、わかつたから耳元で叫ぶなつ……鼓膜が破れるからつ……」「じゃあ復唱つ……あたしの名前はつ……」「鳳……鳳鈴音だつ……」

「ウラ」の口から放たれた自分のちやんとした名前によつやく鈴も平静を取り戻し、荒くなつた呼吸を整えながら再び椅子に腰を下ろした。

「うう、まだ耳ががんがんする」

「うつさい、自業自得よ」

「うう……」

確かに名前を間違えて読んだのは悪いのだが、それでもこの仕打ちは納得いかない「ウラ」は鈴に視線で訴える。しかし、鈴がその程度の叱責で自分の意見を変える筈も無く、逆に「文句あるの……」と視線で訴え返していた。

「はあ、一夏と笄の馬鹿がウリ坊ウリ坊連呼しまくるから」いうなん

のよ」

「……織斑、一夏」

ある意味和氣あいあいとしていた室内の空気が、鈴がふいに漏らした「一夏」で霧散した。ラウラの顔には急速に険しさが宿つていぐ。それは未だラウラが織斑一夏という個人に反感を抱いている証だった。

「ねえ、アンタ一夏のことどう思つてる?」

暴れたせいで少し乱れた髪を乱暴な手櫛で整えながら、鈴はラウラに問いかけた。

「嫌いだ。認められん。あんな教官に害悪しかもたらさん奴など認められるか」

それに対するラウラの答えははつきりとしていた。未だ顔を合わせて一週間もたっていない。そつそつ認識は変わらないだろ?。

「私は、間違つたことはしていない。教官の為にも、アイツは認められな」「……」

ラウラ・ボーデヴィッヒといつ少女の思考は、どうしてもその一点に帰結する。誰がどう見たところで、ラウラが教官 織斑千冬の事を尊敬していることは間違いなく、故に素行不良の極み傍田にはそうとしか見えないのだろう である一夏を排斥しようとする。

中学時代に鈴もよく出合つた手合いの思考パターンだ。だが、そ

れでもラウラがそいつた手合いと決定的に違う点があった。

そういう手合いは、自分の好きな物が自分の妄想通りで無いからこそ一夏に敵意を示した。要は餓鬼が思い通りにいかない現実に当たり散らし喚いているだけだ。

しかしラウラの思考は、どうにも違つ。ほとんど同じではあるが、これではまるで子供が親に褒めてもらいたくて空回りしたかのようだ。

「ねえ、もしかしてそのことで千冬さんに怒られでもした？」

その一言が、ラウラの精神を決壊させた。一粒、また一粒と、ラウラの左目から涙が滴る。

「……教官に……今のお前は……木偶人形だ……つて」

自身の口からぞうぞう漏らせば、ラウラの涙が一層流れ出た。だがしかし、鈴の脳裏には疑念がよぎった。確かに織斑千冬という人物は自身にも、そして他者にも厳しい人格をしている。それでも、こんな少女に対しここまでその心を抉る様な事を言つだらうか。

「ほんとにそれだけ？」

「え？」

「本当に千冬さんはそれだけしか言わなかつた？」

ならば、例え心抉る一言だつたとしても、ラウラ・ボーデヴィッヒという一人の少女の為にも、その言葉を言わなければいけなかつたとしたら？ そう考えた方が筋は通る。

「あの時は……最初に……あの男の言葉の方が筋が通つていいって言われて……それから……自分自身で考えろって言われた」

考える。その一言を聞いた時、鈴の中でパズルのピースがはまる
ような感覚がした。

「ああ、成程」

「何が、成程なんだ……？」

「ねえ、アンタは千冬さんのことどう思ってる？」

「それは、IS操縦者だけじゃなくて、一人の人間として尊敬できる人だ」

鈴の質問にラウラは淀みなく答える。その様子を見て、鈴は自分の考えに対し更なる確信を抱く。まるで我が事の様に、誇らしげに答えるラウラ。未だ鈴はラウラと千冬の詳しいいきさつを知らないが、きっと厳しいながらも充実した時間を送っていたのだろう。

「ねえラウラ、アンタはいつ千冬さんと出会ったの？」

「……どうしてそこまで聞くんだ？」

「いいから答えなさいよ」

「……昔教官は我がドイツ軍に招かれていてな、私はその時日を掛けてもらつて、親身になつて鍛え上げてくれたんだ。教官と出会わなかつたらきっと、私は失敗作として処分されただろうな」

「失敗作って……また剣呑な響きね」

「それはそうだろう、私は軍の計画で生み出された遺伝子強化試験体だからな」

「……うわっちやー」

遺伝子強化試験体。言葉の響きだけでラウラがどのような半生を送ってきたか明白だ。きっと親など、普通の家族の触れ合いなど無かつたのだろう。

そんな中で現れた織斑千冬という人物は、きっと、ラウラにとつ

て家族並みの好意を抱いた人物に違いない。母親、そう言い表してもいいのかもしない。

だとすれば、ラウラ・ボーデヴィイッヒが織斑一夏に抱く敵意とはとどのつまり。

「ラウラ、多分ね」

「どうした、凰？」

「千冬さんはね、きっとアンタが“どうしたいか”を聞きたいんだと思つ」

「……どうしたいか？」

「うん、どうしたいか。アンタがどうあるべきかじやなくて、何をしたいのか、どうしたいのか」

「……何を、したいのか」

「ぶつちやけて言つて、アンタが抱えている中で今一番大きな欲求は何かつてことよ。 ああ勿論、織斑一夏を排斥すべきだ、

なんてのは筋違いもいいところよ。それはあくまでアンタの中じや千冬さんの為にしたい事でしょ？ 多分それは千冬さんにしてみせれば『大きなお世話だこの馬鹿者。いつから貴様は私より偉くなつた』ってところでしきうね。だからアンタは、誰かに迷惑を掛けるかもしれないとかそんな考えは置いといて、自分の中の一番大きな欲求を見つけ出すべきだと想うわよ？」

きっと千冬は、ラウラの心の奥底の欲求を見抜いているのだろう。だからこそ、自分自身で考えると言つたのだ。今のラウラはその欲求に教官の為、という蓋をしてその欲求に目を向けていない。何せ今日初めて会話をした鈴でさえ、ラウラの抱えている欲求。一夏への敵意の裏にある物がわかつたのだ。千冬もきっとそれがわかつた上で考へると言つたに違ひなかつた。

「…………わからない」

けれど、翌の「アリカラ」してみればその至極簡単な問い合わせはとつもない難問だったようだ。霧の中に迷い込んだような、不安げな表情を浮かべていた。

「そりか、わかんないか」

「ああ、やりたいことなど、今まで考えたこと無い」

「だったらちよどいにんじやない?」

「え?」

「こじってエス学園。かなり毛色は違つたび一応学校よ? アンタずっと軍隊で生活してたでしょ?」

「あ、ああ……」

「だつたら友達と馬鹿騒ぎしたり、ときには喧嘩したりしたらいのよ。学校つて、そういうことできる場所だからね」

「友達と……そんなもの、私にはいない」

ああ、実に予想通りの展開だな、と鈴は心中で苦笑した。話で聞いたり、国元が収集した情報だとリカラは「ドイツの冷水」と呼ばれるほどの成績優秀にして冷静酷薄といつことだったが、一皮むけばただの年相応の少女と変わらなかつた。

「馬つ鹿ねえ、アンタ」

「むつ、どういう意味だ」

「ここまで親身になつて相談に乗つてあげた奴がいるのに、そいつは友達じゃないてわけ?」

「…………え、凰?」

「それ禁止!! 友達をそんな堅つ苦しい呼び方しちゃダメ、鈴でいいわよ『ラウカラ』」

まつげの下に伏せて、ラウカラは惚けた表情に理解の色を見せた。

「えっと、鈴……でいいのか？」

「勿論……後ついでに言つておくけど、ウリ坊は絶対禁止だからね。どんなに仲良くなつてもそれで呼んだら怒るわよ」

「わ、わかつたつ」

「ならばよしつ」

そういうつて鈴は滲刺とした笑顔を見せ、それに対しラウラは申し訳なさそうな表情を浮かべる。

「すまないな鈴。色々と世話になつてしまやんつ……！」

ラウラの言葉を断ちきつたのは、鈴の指先、正確にいえばトコピングだ。ラウラの白磁の様な肌に包まれた額に赤い斑点が浮かび上がり、ラウラの左目に涙が滲む。

「な、何をするんだ鈴！？」

「シャラップツッ！……そういうときはすまないじゃないでしょ？」

友達同士なら、ありがとうよ……」

「…………」

「どうしたの、何か文句ある？」

険しい表情を浮かべる鈴にあつけにとられるラウラだったが、それでも、次第にその表情を赤く染めていく。軍隊の任務だとそんな形式ばつたものではない、人同士のつながりで起こる至極当たり前の行為。それを恥ずかしがりながらも、どうにか口にする。

「あ、ありがと！」

それを見て、鈴の表情には満足げな笑みが現れる。同時に、自分が一夏と簞に出会った時の事を思い出し懐かしい気持ちに浸り、そして、自分とラウラだけじゃなく、いつかラウラと一緒に仲良くなれる事を祈ったのだった。

そして保健室を抜けだした簞はといつと、ここ最近の日課となつているシャルロットが眠る場所へと見舞いに行つていた。いつもの様に、カード式の学生証をドアのロックに通し、指紋認証と虹彩認証、そして千冬から伝えられた16ケタの暗証番号を入力して、本來ならば一般生徒には入室不可能な学園の機密ブロックへと足を踏み入れる。

「しかし、よくもまあそこまでいけた物だ」

同時に、先程の戦闘の顛末を思い出す。石上神道流・首飛ばしの颶風　蠅声。いかに致命傷は負わないだろうとはいえ、人体の中でも有数の急所である首に對して攻撃を仕掛けることに、何の躊躇も持たなかつた自分がいた。事実、頸動脈を切り裂くほど深い手を負わせながら、それに対する罪悪感などほとんど抱かなかつた。

斬首、首を刎ねる

まるでそれが、自身にとつての当然であるかのようだ、必然であるかのような。

馬鹿馬鹿しい。ふいによぎる鮮明な妄想を振り払い、簞はシャル

ロットの待つ部屋へと足を進める。

別に斬首といつ行為に對し、どのよつな合致を「」が見せようがそんなものばぢつでも「」と、幕は誰よつもまづ自身に念押した。

「 よお、また彼女のと「」るか？」

だからだらう、前にいる一夏に対し、その存在を一夏から声を掛けてもううまで氣付かなかつた。

不覚を一夏に晒してしまつた事を自覚し、幕の顔が屈辱に至る。よりにせよつてこつにか、とその表情が鮮明に物語る。

「……ああそ「」だよ、今の私にはそれぐら「」しかできんからな」「せめて彼女を慰められるようこ傍に居たつてか？ 相変わらず内側の奴には甘いね、お前も」

「悪いが、それが」

「別にこ、まるで足繁く女の所に通う男みてえだなと思つただけだよ」

「やがましに、じゃあ何か？ 今の貴様は間男か？」

「はつ、寝取りなんぞ趣味じやねえつての」

「まあいい、それよりお前、ここでなにしてたんだ？」

「いや何、保険掛けに来たんだよ」

「保険？ ……ああ」

すぐれも幕は、一夏の言つた「保険」といつ言葉の意味に思い至る。何せここは地下深くで、この奥に繋がる通路はここしかない。無理やりぶち破るうにもそれはEISの火力でも難しい行為だ。

つまつせそつこつこつこつなのだらう。

「ありがとう、と言つてやるうか」

「はつ、馬鹿言え、女喰いもんにしてソレをやる奴の思い通りにいかせてたまるかよ。これはオレの為だ」

「ああそりゃ」

「ああそりゃだよ。 それと糞姉貴から伝言だ」

「伝言?」

「学園側は委員会の意向に従うが、あまり無体な命令だと勤労意欲が落ちて機材の管理が甘くなるかもな、だとよ」

「そりゃ、それは仕方がないな」

「だろ?」

「ううして篠と一夏は、互いにニヤリと笑みを交わす。その言葉の裏側の意味をしつかりと理解したからだ。ある意味それは、篠にとって百万の援軍に等しい言葉だった。

「じゃあ、せいぜいがんばれや篠」

「ああ、お前もな、一夏」

「ううして一夏は篠とすれ違い、歩き去つていぐ。その背に対し篠は何も言わない。礼すらも。それはきっと一夏に対する侮辱だから。恰好を付けたいのなら、存分に付けさせてやるべきだと沈黙を貫き通す。

「ほんと、一夏の奴は馬鹿だよ」

苦笑し、シャルロットが眠るコニ芝の近くに腰を下ろした篠は、そのまま背中を預けて臉を閉じる。

あの黄昏が夢ならば、再びここで夢を見ればあそこに行けるかもしないと思つたからだ。

そうして再び訪れた黄昏の浜辺。

幕の姿を見つけたシャルロットはすぐに柔らかな笑顔を浮かべ、幕の元に駆け寄ってきた。

「また来てくれたんだ。ほつき」

「ああ、シャルロットに会って来たよ」

「ふふっ、ありがと」

嬉しさを体中で表現して、シャルロットは幕に抱きつぐ。それは人恋しさの表れで、だからこそ幕もそれをじっと受け入れる。

「えっと、迷惑じゃないかな、ほつき」
「迷惑だなんて思わないよ、シャルロットがそうしたいのならそうすればいいさ」

そういうて、幕はシャルロットの黄昏色の髪を優しく撫でていく。いつもの様に仏頂面であったが、それでもその手つきには慈しみが込められていた。

「……フフッ」

「どうした？ シャルロット」

「なんだか今日のほつきは嬉しそうだな、つて」

「そうか？」

「うん、何か良いことがあったの？」

「そうだな、いいことは、あったかもしれない」

「じゃあ今日は、それを聞かせてほしいな。ううん、それだけじゃ無くてほつきの事とか、ほつきの友達の事とかにいっぱい聞かせてよ

「……しょ「うがないな、わかつたよ」

そうして篠は前と同じように、黄昏の浜辺で一人一緒に腰をおろして、とつとめも無い話に花を咲かせたのだった。

第十一話（後書き）

＜あとがき＞

……やつぱりルネ山の系譜は主役になれないのだろうか。現状なんだか雛が主役っぽい気がする。

そして露骨にギロチンフラグがたつたけど能力はどうじょうか、原作通りに時間操作にするべきか……。

「セシリア！…遊びに行くわよっー！」

日曜日の朝。爽やかな日差しが差し込む中で優雅にまどろんでいたセシリアの平穏は、ウリ坊の突撃によつて無残にも打ち砕かれた。勢いよく開け放たれたドアからは当然の様に鈴のツインテールがなびき、何がそんなに嬉しいのか実に滲刺とした笑顔を見せていた。

「……………とりあえずぶち抜きますわよ」

ルームメイトから突き刺さる視線の痛みに耐えながら、セシリアはレーザーライフルの銃口を鈴に突きつけた。天蓋付きの豪奢なベッドのシーツから突き出るレーザーライフル。想像するだになかなかシユールな光景である。

「セシリアって低血圧？」

「…………（無言で引き金を引こうとする）」

「OKOK、落ち着きなさいよ」

「それで？ 要件は何かしらウリ坊」

「ちゃんすら無くなつた！？」

「いいではないですか。今度から私も簫やあの馬鹿の様にあなたのことウリ坊と呼び捨てにしますわ

「よくないわよ！…」

「私はいいですわ。それで朝から何の用ですのウリ坊」

今度はレーザーライフルの銃口の代わりに、寝ぼけ眼と額の井桁

を張り付けた不機嫌そのもののセシリ亞の顔がひょっこりと出でた。

「だから言つてゐるぢやない、遊びに行こうつて
「……何か約束してましたかしら？」
「うんにや、何もしてないよ？」
「風穴開けてもいいかしら？」
「駄目にきまつてゐるぢやない」
「あなたと篠と一夏、實に似た物同士ですわね」
「何処がよ、あたしあいつらみたに馬鹿ぢやないし」
「…………はあ、とにかく朝食をとつたら連絡入れますわ」
「うん、待つてるからねえ～！～」

そうしてウリ坊は去り、セシリ亞の精神には深い深い突撃の傷跡が残つてゐた。何が悲しくて休日の朝つぱらからこんなにも精神的に披露しなくてはいけないのかと頃垂れ、重さを感じる体を引きずつてベッドから這い出る。

「本当に、騒がしい子ですこと

とりあえず今田はウリ坊をいじくつて憂さ晴らしきしようと固く決意を固め、セシリ亞はきっと騒がしくなるであろう今田一日を想像して苦笑を浮かべるのだった。

そして食堂で朝食をとり、再び鈴の元へとやつてきたセシリ亞が目にしたのは、当然のことながら元氣溌剌としている鈴と、慣れな伊斯カートを着て恥ずかしさに頬を赤く染めている銀髪鬼、も

とい
。

「ちょっと、何そんなに縮こまつてんのよラウ！」

「いや、こんなにひらひらした服着せられて恥ずかしくないはず無いだろうがつ……！」

「じゃかあしい……年頃の女の子が休日遊ぶのに学生服着ちゃ駄目でしょがつ……！」

「何故だ、着慣れている学生服で充分だらうに」

「アンタねえ、それって終わり過ぎな発言よ？」

「そ、そうか？」

「あ～あ、せつかく仲良くなつた友達の為に自分の服貸してあげたのに……しかも結構お気に入りの奴」

「…………す、すまつ、じゃなかつた、ありがとづ」

「…………よしつ」

実際に微笑ましい、普通と言つていいやり取りを鈴と交わす、ラウラ・ボーデヴィイツヒといつ少女がそこにいた。実際に普通の、何処にでもありそうな友達同士の会話だからこそ、セシリアの困惑は最高潮に高まつていた。

あれ？ ここの子って誰？

ラウラ・ボーデヴィイツヒといつ少女とはセシリアの中では、転入初日に初対面の男子生徒に平手打ちをかますほどに世間一般の常識から外れている少女だ。セシリアも当然一夏や簞から話を聞いてラウラの大体の状況を知つてはいるが、だからこそ目の前のこの光景にすさまじいギャップを感じていた。

俺達三人の中で一番出鱈田のあのウリ坊だ。

アイツは「友達百人できるかな」を実際にやりかねないほどだぞ。

そういえば以前、第と一夏が鈴の事をそのように評していたことをセシリ亞は思い出していた。曰く、人たらし。曰く、一流フラグ建築士（ただし友情限定）。実際中学生のころにはモテモテだったらしい、友達としてだが。

「……よくよく考えれば私も一日でウリ坊の事を気にいつていましたわ」

振り返つてみればセシリ亞自身もそのフラグ建築能力に絡め取られていた。恐るべしウリ坊、代表候補生を一日で絡め取るとは。というか現状、ウリ坊に何がしかの危害を加えようとした場合、まずはセシリ亞にラウラ、楯無、一夏という専用機持ちが敵に回りかねない。何気に入脈的に恐ろしいことになつていてる鈴であった。

「…………ゴホン！ 私を放つておくとはい一度胸ですわねウリ坊」「あ～、『ごめんごめん。……ラウラに構つてばつかりで妬いた？』

頭を搔きながら一応謝つて見せる鈴だが、少し間をおけばそのような戯言を吐き出した。それも実に小憎たらしいドヤ顔で、だ。ああ、あの二人はきっとこんな気持ちを抱いたのだろうと、セシリ亞は右手を鈴の眼前に持つて行きながらそう考えた。そしてやるべき事はただ一つ。

「きやんつ！？ 何すんのよつ……」

「え？ 何を言つてているのかしらこのウリ坊は、そんな言葉を口に

すればこうなるのは当然でしょう

更にセシリアは怒り顔の鈴の頬へと手を伸ばし、指でつまんでこねくり回す。無に無一と音を立てそうなくらいに形の変わる鈴の顔とその柔らかな感触に、実にご満悦といつぶつな表情を浮かべるセシリア。

「ほひよふおふふえるふや～！」

「ああもう可愛いわねウリ坊は」

傍目から見ても心底いやがっているのがわかる鈴と、心底楽しそうに頬をこねくり回し続けるセシリア。しかし、それは対人関係の経験が希薄なラウラにとつては、わけのわからない光景にしか映らなかつたらしい。

「わからん…………」の一人は仲がいい、のか？」

ラウラにとつて、少なくとも鈴は好意に値する人物だ。言葉を交わしたのはついこの間の保健室が初めての事だが、それでもあまでも親身に語りかけてくれたのは嬉しいとは感じられた。

これまでのラウラの対人関係は、その全てが戦闘能力に関わるものだった。まずそもそもが、自分自身が強さのみを求められて生み出され、強くなるために訓練だけの人生を過ごし、強くなるために自らの瞳に手を加えられ、強くなることができなかつたから失敗作の烙印を押され、敬愛する織斑千冬によつて強くなれた。

故に、一切強さと関わりの無い対人関係　友達　は鈴が初めてだつた。いくら同じ年だとはいえ、これまでの経験の中に友達付き合いの一切が無いラウラにとつては、こういつた状況にすらどう

反応すべきかわからない。他の誰かであれば笑って受け流す程度の出来事にも、その少ない経験からどうするべきかを必死になつて考えた。

セシリ亞は笑つてゐるけど、鈴は、嫌がつてゐるのかな？

友達が嫌がつてゐるのなら、えつと、止めるべきなんだろう。

そういう間柄ができたことを大事にしひ、と鈴の後に保健室に見舞いに来た千冬は言つた。

今のお前に足りないもので、今のお前に必要なものだ。そういう物は軍人云々以前に、人として必要なものだ。お前の様な者を生み出した奴らはそこがわかつていいない。兵器は機能を百%発揮することはできても、そこから先へは到達できん。“強くなれる”のは人間だけだからな。

ラウラ自身としては鈴とどう接するべきか、未だに定まつていない。暗中模索という言葉がぴったりだろう。だからこそ、大事にしろとと言われたことに従つて、拙くともしっかりと自分の意思を口にした。

「そ、そこまでにしておけ」

おずおずと、暗がりに怯えながら進むような面持ちで、ラウラは未だに鈴の顔をいじり続けているセシリ亞に告げる。

「はい？」

「…………だつて、鈴が嫌がつてゐる」

そう告げた途端、セシリ亞と鈴が固まつた。頬を抓り抓られながら惚けた表情を見せて二人は静止し、ラウラはそれを見て、まさか自分は間違つたことを言つたのだろうかと不安げな表情を見せる。直後、セシリ亞の指先が鈴の頬から離れ、ようやく言語の自由を取り戻した鈴は、今度は自分で自分の頬を抓り、これが現実かを確かめた。

「痛い…………夢じやない」

「ねえウリ坊、あなた本当に何もしてませんの？ ついこの間とは別人ですわよ」

「もしかしたら第に首斬られて性格変わつたのかも」

「…………一体何をどうしたらそういうことに繋がるんですの？」

依存と言える程に敬愛している人物から自分を否定されて錯乱状態に陥つて、第（剣術馬鹿）の劍氣に当たられて戦闘を仕掛けてその結果頸動脈を切り裂かれた、とは少々どころかかなり説明しづらかつた。

「まあ、以前よりはいい感じなのでしょうけど」

「うん、そう思うわ…………というかすつごく嬉しい」

「何故にマジ泣き！？ ウリ坊どうしたのっ！？」

そしてそのぱっちりとした瞳から大粒の涙を流し始める鈴。何せこれまでの人生において、鈴の立ち位置はずつとからかわれる側だつた。弄られ役が板に付いていたと言つていい。

勿論それは愛情の裏返し。子供がついつい行為を持つ相手に素直に慣れないそれと同じ。全員がシン状態だったわけだ。何せその筆

頭が一夏と簫。どちらも素直とはかけ離れた捻くれ者である。

そこに現れたラウラは、鈴の人生においてデレ状態で接した初めての人物。そりやあもう、感極まつて泣くのも当たり前だった。

「り、鈴つー？ どうしたんだ、何か気に障る事でもいったのか？」

勿論そんな心境をラウラに察しろといつのは無理な話である。自分のせいで泣かしたのかと勘違いし、困惑の表情を浮かべながら鈴に詰め寄る。

「違うの。これ嬉し涙だから気にしないで 　　といつかアンタ可愛すぎむ」

詰め寄つてくれたのならば好都合、と言わんばかりに鈴の両腕がしつかりとラウラの体を抱きしめる。……余計にラウラの困惑は深くなるばかりだが。

「え……鈴ー？」
「ああもう、アンタ本当にいい子よね、　　嫁にしたい」
「…………はー？」
「いい加減に現実に帰還しなさいなウリ坊」
「ふぎゃんつー？」

歓喜で茹だりまくつている鈴の頭に振り下ろされるセシリ亞の手刀。結構な音を響かして奇行に走り続ける鈴を強制停止させ、密着している二人を引きはがす。

名残惜しそうですらある表情を浮かべながらも鈴はラウラから離れ、ラウラもまた、安堵しているのか名残惜しいのか判別がつかない微妙な表情を浮かべていた。

なんかそうなるとセシリ亞がまるで悪者の様であり、意味不明の

罪悪感を感じながらセシリアは本題を切り出した。

「それで？ 今日はいつたいどつするつもりですの」「うーん、そうだよねえ。とりあえずショッピングモールでラウラの私服買いましょうか」「ボーデヴィッヒさん？」「ボーデヴィッヒさん？」「…………ラ、ラウラで、いい」

いやもつほんとにこの子はいつたい誰なんだ、セシリアは声を大にして言いたくなつた。頬を赤く染めてそんな微笑ましい言葉を口にするラウラが、どうしても自分の知るラウラ・ボーデヴィッヒと同一人物だと思えない。いくら何がしかのショックな出来事があつたとはいえ、その変貌ぶりたるやそつくりな別人と言つた方が納得できる。

最早初めましてと言つて改めて自己紹介をした方がいいんじゃないかと、セシリアの思考が混乱する中、鈴が改めて今日の目的を説明する。

「だつてさ、ラウラつて私服全然持つてないのよ？ 女の子としてそれは駄目でしょ」

「全然？」

「そう、全然。だつて自室のクローゼット見てみたら制服とトレー二ングウェアしかなかつたもん。同室の子に聞いてみてもラウラがそういう女の子の身だしなみに頼着した様子は一切ないってわ」

「…………駄目、なのか？」

「駄目にきまつていいでしょ。ラウラさん」

ラウラの、自分がどれほど終わっているか今一理解していない物言いに、セシリ亞もこれは早急になんとかするべきだと認識した。

同時に、鈴が何故一夏を誘つていいかを理解した。流石にこのよつなときにも男である一夏は誘いづらかったのだろう。いつの女は女子同士で楽しくやるべきだ。

しかし、そうなるとHリーと篠を誘つていいかが気になった。セシリ亞のその思考が顔に出ていたのか、鈴が先にそのことを口にした。

「まあ、一夏は男だし。Hリーは生徒会の仕事が忙しいし。

篠はそもそもこいついう場には向いていないし

「向いてない？」

「篠はね、ラウラ以上に終わってる。オシャレを全く気にしない

つてことは無いけど、徹底的にカッコいい系の服しか買わないもん

「まあ、確かに可愛く着飾つた篠は想像しづらいですね」

「でしょ？ アイツ中学の時はそのせいで後輩の女の子に妙に人気

があつたしね

「それに比べてラウラさんは、可愛い恰好が似合いそうですね」

そういってセシリ亞は今のラウラの服装に目をやつた。至つて普通のミニスカートとシャツの組み合せだが、それでも素材がいいのだろう。中々の物になつている。

だからこそ、ちゃんと自分に似合う服を吟味して着こなせば、それがなり以上の仕上がりになるのは想像に難くない。

「そ、そうなのか？ あまり可愛いとかそういうことはわからないんだが」

「何言ってんのよラウラ。アンタが可愛いしないのならどこの誰が可愛いくてことになるのよ」

実際に単純な褒め言葉にも実感の湧かない表情を見せるラウラ。これまでの人生において自分に向けられる評価が全て戦闘能力に起因していた彼女にとって、そのような褒め言葉にどう反応していいかわからない。分不相応だと思うべきなのか、そう言われたことに対する胸を張ればいいのか判断がつかない。

「…………とりあえず出かけましょうか。ラウラさんには何よりもそういうことが必要でしよう」「う

これはいけない、とセシリアも鈴と同様の結論に達した。ラウラに必要なのは何よりも日常だと、自分に向けられたありふれた称賛にも困惑する少女を見て痛感する。

「そうね、いつまでもここでだべつていってもしようがないし、いこつかラウラ」「ああ、その……よろしく頼む一人とも」「ふふっ、わかりましたわ。大船に乗つたつもりでいてくれて構いませんわよ?」「そうよね“女の子”としてはあたしたちが先輩みたいなもんだしね

そうして出発する女の子三人組。人種や素性はともかく、それは実際に平凡な女の子の日常だった。

「…………女の子というのは、実に大変なんだな」

時刻は既に正午近く、あれからラウラは店に付いた途端鈴とセシ

リアの二人がかりで試着させられ続け、等身大の着せ替え人形と化していた。

しかもラウラにとつては不幸と言つべきか、三人ともが代表候補生という高給取りであつたため、このようなときに一番ネックとなる金銭面が全く気に掛ける必要がなかつた。

故に次から次へと、あれやこれやの服を持ってきては試着の繰り返し。ドイツ軍の精銳でもあるラウラにとつて体力面では問題ない行為ではあつたが、精神力はすでに枯渇寸前であつた

「そう？ 序の口でしょ」

「そうですわね、楽しくありませんでしたか？」

大量の衣類が入つた紙袋を手に持ち、疲れた様な表情でそう呟いたラウラに対し、同じように大量の紙袋を持ちながらも溌剌とした笑顔を見せる鈴とセシリア。女の子としての各の差が如実に表れていた。

「着る物を選ぶだけで、こんなに苦労があるとは思いもしなかつた」「仕方無いんじやない？ ラウラがこうことしたのつて初めてでしょ？」

「ああ、初めてだ。着飾るなんて行為はな」

「全て、とは言いませんが、世の中の女の子は殆ど皆そういうことをしていますわ。何事も初めては労力を伴いますもの」

「そうそう、それにラウラだつて気に入つた服とかあつたでしょ？」

セシリアと鈴の脳裏に再生されるのは、努めて無表情であろうとするのだが、気に入つた格好に御満悦なのがばればれのラウラの姿だ。口の端が僅かに緩んでつり上がつているのがポイントである。

「……うん、自分があんな風になれるなんて思わなかつた」

可能性が大きく広がった。高が着るもの一つだが、それでもラウラにとつては何もかもが初めての体験で、カッコいい服に満足したり、たくさんのフリルが付いた可愛い服に恥ずかしさを感じながらも悪くは無いかもと感じたりと、高々数時間の間に人生初の出来事が山の様にあつたのだ。

今日は鈴とセシリ亞の勧めるままに着ていつたラウラだったが、心の片隅で「次はどんなものが来るんだろう」と、実に真っ当な高揚感を抱き、初めて趣味の片鱗と言えるものを心の中に生み出していた。

「ふふ～ん、楽しかったの？」

「えっ！ あの……「ん、楽しかった」

それを思い返して微かに綻んだラウラの表情は、実に綺麗な物だつた。花が咲く様な、と言い表わせるほどに。

その緩みが原因だつたのかもしれない。

「あれ？ 今のつて」

「ラウラさんのお腹の」

ラウラの下腹部から鳴つた可愛らしい音。時刻は昼近くでもうそろそろ昼食にはもつてこいの時間である。つまりはラウラのお腹の虫が鳴つたのだ。

「…………「うう」

軍での訓練の時は限界まで訓練して、腹の虫を盛大にならしながら軍のレーシヨンを食べていたラウラだったが、今日のこれには何

故だがとてもない気恥ずかしさを感じていた。

どうしてか、これはいけないと感じて、自覚できる程に熱を持った顔を隠す様に俯いた。それでも耳朶まで赤くなつたのには気づいていないラウラだった。

「よつし、それじゃあお皿にしましちゃうか」

「そうですね、ラウラさんがもう限界の様ですし」

「ふ、ふんつ……私はまだいけるぞ」

手本の様な虚勢を張るラウラの為に、鈴とセシリアは皿に飯をとる場所を探すことにしたのだった。

「つーわけでお客さん連れてきてあげたわよーーー！」

そうして三人がやつてきたのは一軒の食堂。しつかりと年季の入った建物のそこは、近隣の住民にはなじみの食堂であり、その名を「五反田食堂」と言つた。

「何がつーわけで、だ。相変わらずテメエは騒がしいな

真つ先に出迎えたのは、いかにもぶつきりぱつとこつた表情を浮かべるロングの髪を赤く染めた青年だった。客商売としては不適切というほかない態度であったが、それに対し鈴は一切気分を害した様子を見せない。

「アンタも相変わらずね、弾」

「お前もな、ウリ坊……とりあえず業火野菜炒めでいいのか？」

「うん、二つお願ひね」

そういうて勝手知つたると言わんばかりに給水機から水を汲み、カウンターに腰を下ろす鈴。セシリアとラウラも鈴のそんな様子に少々気圧されながらも鈴の横に腰を下ろした。

「ちょっとウリ坊、何勝手に頼んでますの」

「……別に私は構わないが」

「大丈夫だつて、頼んだのはここの看板メニューだし」

勝手に注文を頼んだ鈴に対し不機嫌さをあらわにするセシリアだつたが、それを宥めたのは厨房に注文を伝え終わつた先ほどの青年

五反田弾 だつた。

「すまないな、コイツときたら昔から先走る性質でよ」

「え、えっと……」

「ここの見習の五反田弾だ。このウリ坊とは中学からの付き合いでな」

変わらずぶっきらぼうと言える表情と口調だが、その雰囲気は落ち着いたもので浮ついた感じが無かつた。しつかり者のチンピラ、という表現が適切かもしけない。

「まあ、ウリ坊が頼んだ奴は爺さん自信の逸品だから、期待しててくれ」

「はあ、そこまでおっしゃるのなら」

「全く、いつも落ち着けと言つてたるだろ?」が

そういうと同時に、手に持つお盆で鈴の頭をこつく弾。しつかりと痛くなじよう加減しているあたり、弾の人の良さが現れている行為

だつた

「うつさいわね、そんなの自分が一番解つてますよ～だつ
「だつたら直せ。そういううノリはいつまでも通らねえぞ。
で？ この二人はお前の新しい友達か？」

「そうよ、セシリアとラウラ。クラスは違うけどね」

「初めてまして、セシリア・オルコットと申します。イギリスの代表
候補生ですわ」

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ。ドイツの代表候補生を務めている
「また結構な肩書の友達だな。そういうや一夏から聞いたが、お前も
代表候補生なんだつてなウリ坊」

「何よ、似合つてないとでも言いたいわけ？」

「ちげえよ、すごいなつて言いたいだけだ。たつた一年でそこまで
いつたんだからそつと思うのは当然だろうが」

「う……ありがと」

「まあ、見てのとおり素直じゃない奴だが、根はいい奴だから仲良
くしてやつてくれ」

「うが～つ～！ アンタはあたしの兄貴か、母親かつ～！」

「だつたらすぐに吠えるその癖を治すんだな」

そう言いながら弾は厨房から出来上がつたばかりの業火野菜炒め
定食を三人の前に配膳する。初めから勝負にならないほどの落ち着
きの差である。

「ふふつ、ではいただきます」

「ああ、私もいただこう」

「」に来る前とは違つて、今度は鈴が微笑ましい視線に晒されて
いた。そしてセシリアと鈴は出来たてでおいしそうな香りを漂わせ
る野菜炒めに箸を伸ばす。学園の食堂で日本食にもある程度慣れて

いるセシリ亞はともかく、ラウラの方は少々おつかなびっくりとう感じで、箸でつまんだ野菜を口に含む。

「はむ……むぐ……はむ……」

しかし、ラウラがどうこつた感想を抱いているかは、黙々と口元と食器の間を往復させる箸の動きが、実に雄弁に物語つている。

「肩書きの割には、えらく可愛らしいお嬢さんだな、おい」

「……にだけ打ち込んできたからね、ある意味箱入り娘なわけよ」「じゃあオルゴットさんはどうなんだ?」

「一夏に付き合つて平然と酒飲むぐらいには不良娘よ?」

「付き合わされて”、ですのでお間違いないよ!」

「ああ成程、あの馬鹿は相変わらずつてことか、……ところとは第も元気でやつてそうだな」

「まあね、第も相変わらずよ」

「何にせよ、ドンパチをやらなきゃいけない学校だ。気を付けるよ」

そういうと弾は厨房の奥に引っ込んだ。その背中を鈴とセシリ亞少しだけ偶然としながら見つめている。

「……なんというか、泰然とした方ですわね」

「けどあいつ、中学一年の頃まではすごい悪戯鬼だったのよ。飲酒

喫煙万引き喧嘩何でもござれのね」

「そりなんですか? とてもそつには見えませんが」

「ちょうどそのころにあいつのお爺ちゃんが体調崩したことがあってね、それがきっかけになつたの。これじゃ駄目だ、いい加減に目え覚まさないとな、って」

それまでは犬猿の仲だった一夏も、弾が心を入れ替えてからは好

意を見せていた。曰く真面目になつたから、とは一夏の弁だ。

当然いきなり真面目になつた不良仲間からしてみれば、一人だけ真面目ぶつてゐるようと思えた弾は曰障りな存在だったのだが、それを一夏と簾が率先して排除していくうちに、次第に弾も打ちとけるようになつていつたのだ。

「それからここに仕事を手伝つよくなつたのよ

「へえ、人に歴史あり、ということですか」

「むぐ？ どうしたんだ二人とも」

鈴が語る弾の来歴に感心するセシリア。そして、そんな状況に目もくれず業火野菜炒めを堪能しているラウラだった。

「 何人のこつぱずかしい事をペラペラと、ちよつとはその口を閉じておけ」

そして苦虫を噛み潰したような表情で厨房の奥から戻つてくる弾。その手には小皿が一つ握られており、そこからほのかに甘い香りが漂つてくる。

「 何それ？」

「 ……少しずつ厨房に立たせてもらひよくなつてな。 ラ

ウラだつてか、おこしそうに食つてくれて礼だ。未熟者の作った奴だが、爺さんのお墨付きだ」

「 あ、ありがとう……これはなんていう料理なんだ？」

「 大学芋つて奴だ。油で揚げたさつま芋に糖蜜絡めたおやつだよ

「 はむ……むぐ、甘くてほくほくでおいしいな」

「 そうか、そいつは良かつた。お代わりがいるならもう少しだけあらぞ？」

「 ほんとか？」

「おへ、ひよつと待つてろ、すぐに持つてきてやる」

実際に堂に入った兄貴分を披露する弾。ラウラもラウラで初めて食べる甘味に御満悦のようだつた。

「…………本当にやつ今までの悪餓鬼だつたんですね?」

「この国には男子二日会わざれば呪目して見よ、つて諺があるのよ

それにしても、変わり過ぎだらうと思いつつ、セシリ亞は話に花を咲かせ過ぎて少しだけ冷めた業火野菜炒めを口に頬張るのであつた。

第十二話（後書き）

＜あとがき＞

この話におけるそれぞれのキャラクターのツンデレ度は以下の通り。
第……誰にでも対しツン百%。ただしシャルだけデレ百%。
一夏……気に入った奴に対しては基本的にデレ百%、ただし捻くれ
ているために“デレ”と受け取られない可能性大。そして第に対しても
ツン百パーセント。

鈴……基本的にデレ百%。ただし周りがツンとしか思えないために、
引きずられてツンになる。故にラウラのデレに大ダメージを負った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6569z/>

Dies irae × I S

2012年1月12日22時45分発行